



Ministry of Education

平成 22 年度 政府開発援助ユネスコ活動費補助金  
アジア・太平洋地域等における開発途上国の教育、  
科学又は文化の普及・発展のための交流・協力事業

# 発展途上国における〈ESD 広域モデル〉の構築に 向けた基礎調査及び視聴覚教材の作成・普及

## 事業報告書

聖心女子大学



## はしがき

2011 年 3 月 11 日、日本社会は未曾有の震災に見舞われ、多くの犠牲者を出しました。大震災と大津波、そして原発事故という 3 重の災いは私たちの生活に重くのしかかり、復興への道は険しいと言わざるを得ません。もちろん国内外の義援金や救援活動チームの活動に支えられながら、私たちは希望を失っておりません。しかし、その一方で、原発事故によって露呈された食糧問題やエネルギー問題は、今後の日本社会の持続可能性を厳しく問いただしていると言えます。

「持続可能な開発」に関する世界首脳会議(ヨハネスブルグ・サミット)において日本の政府と市民が提唱した「持続可能な開発のための教育(ESD)の 10 年」が 2002 年の国連総会で採択されてから 7 年目を迎えました。こうした国際的な潮流の中で、日本でも持続可能な未来に向けた努力が殊に教育分野で期待されることになり、聖心女子大学でも活動を継続してきました。2007 年の環太平洋 ESD 国際会議を始め、翌年以降 3 度にわたり、ESD の優れた実践を学ぶための海外スタディーツアーを東南アジアや南アジア諸国、豪州で実施してきました。2010 年には、ESD の専門家としても知られるマグサイサイ賞受賞者のソンバット・ソンポン氏(ラオスの NGO、PADETC(参加型開発センター)代表)を本学に招聘し、ESD をテーマにした公開講演及び国内視察を行い、さらに同年、4 度目のスタディーツアーを PADETC との協働で同国のシェンクワン県で実施しました。この報告書は、こうした一連の活動の上に成立したもので、ラオスのユネスコ国内委員会や教育省、シェンクワン県教育事務所、PADETC との協力を得て、政府開発援助ユネスコ活動費補助金「アジア・太平洋地域等における開発途上国の教育、科学又は文化の普及・発展のための交流・協力事業」の一環として実現された事業の成果報告です。

聖心女子大学の教育理念は、一人一人の人間をかけがえのない存在として愛するキリストの聖心(みこころ)に学び、自ら求めた学業を修め、その成果をもって社会との関わりを深めることにあります。この建学の精神ともいえる「聖心スピリット」のもとに掲げた教育目標のひとつとして「個としての自己を確立し、かつ地球を共有する人類の一員として世界を視(み)、人々と交わり、そしてこれらの重要な関心事に自ら関わることのできる広い視野、感受性、柔軟性および実践的な行動力を持つ人間を育成する」ということ、そして「社会の急激な変動に対応できる思考力と判断力を持ち、現代のみならず、未来に向けても自らの考えを自らの言葉で発信できる人間を育成する」ということを掲げております。

今回の国際協力プロジェクトは、こうした聖心スピリットの涵養にとってこの上ない機会でした。大学院生を中心とした調査チームは現地でのワークショップや村々でのインタビューを通して実に多くを学ぶことができたと言えます。これもひとえに上記の諸団体の関係者のご理解とご協力のお陰です。

なお、本報告書はシェンクワン県での調査報告、ならびに持続可能なコミュニティ等に関するタイやインドでの調査報告を併せてまとめたものですが、シェンクワン県での調査をもとにして作成した「学びのエコロジー」というリーフレット及び教育の質をテーマに作成された DVD と

共にご活用いただければと思います。

最後になりましたが、これらの成果物は、シェンクワン県の教育関係者及び PADETC の熱意と優れた専門性なしには実現され得なかったものです。まことに残念なことにシェンクワン県での調査の直前に同県教育長官であったソムチャイ・ムアバンギャ氏がお亡くなりになりました。この場をかりて同氏のご冥福をお祈り致します。また、ご理解とご協力をいただいたラオス国教育省とユネスコ国内委員会の皆様、調査に参加したシェンクワン県の教育関係者や青少年ボランティアの若者に、そしてソンポー氏をはじめ、PADETC の職員の皆様に心より謝意を表します。

この報告書やリーフレットが本事業の最終目標である＜ESD 広域モデル＞構築の一助となることを願って止みません。そして冒頭でふれた険しい状況のただ中に置かれてはおりますが、持続可能な社会の実現に少しでも寄与できるように、本報告書の中に込められたメッセージを今後も活かしていく努力を続けていくことをここに記し、ご挨拶にかえさせていただきます。

聖心女子大学学長  
寺中平治

本報告書及び関連の成果物（DVD）については次の URL から入手可能である。

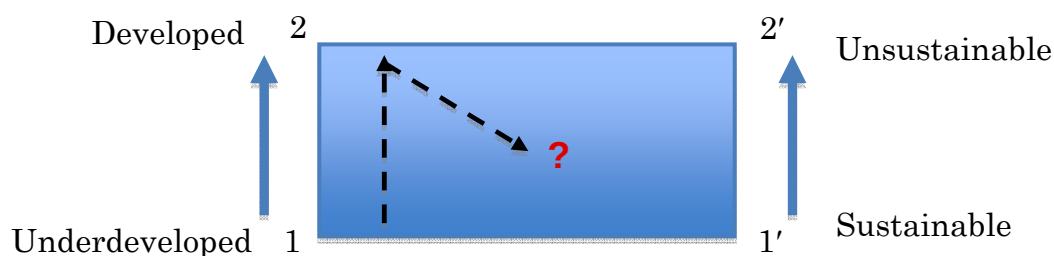
<http://www.u-sacred-heart.ac.jp/nagata/laos-oda/index.html>

## 序

「持続可能な未来」や「持続可能な社会」という言葉が世間で使われるようになって久しい。戦後、幾たびかにわたり環境と開発、または環境教育に関する世界規模の国際会議が開催され、特に 1992 年の「国連環境開発会議」（地球サミット）や 1997 年の「環境と社会に関する国際会議」（テサロニキ会議）以後、「持続可能な開発」や「持続可能性」という概念がしばしば国際舞台でも登場するようになった。2002 年の「持続可能な開発に関する世界首脳会議」を機に、国連のフラグシップ・プログラムである「国連 持続可能な開発のための教育の 10 年」もはじまり、現在では ESD（持続可能な開発のための教育（持続発展教育））の旗印のもと、持続可能な未来に向けた様々な取り組みが各国で展開されるまでになった。

しかし、これまで発展途上国は、経済発展を阻害するという理由をもって、環境保全や持続可能な開発には消極的でした。環境教育や ESD の積極的な牽引役は主に先進国であったように思われる。開発を抑制しようとする先進国側の主張と、開発をある程度すすめて豊かさを享受できるようになってから持続可能性のための取り組みをしたいとする途上国側との間のテンションは、しばしば環境や開発関連の国際会議での争点となってきたことは周知の事実である。

両者に見られる発展観は次のように図示することができるであろう。下の図は、主に南アジアで環境教育や ESD を普及させているインドの環境教育センター（CEE）長のカルティケア・サラバイ（Kartikeya Sarabhai）氏の講演会で示された図をもとに筆者が作成したものである。



上図では、通例、国家や社会がたどる発展の経路がクリアに示されている。四角の左辺はある国（社会）の発展度を表わす一方、右辺はその国（社会）の自然環境の持続可能性を示している。つまり、いわゆる低開発国と称される国は 1 から 2 へ経済・社会の発展を遂げようとする。しかし、開発のプロセスと同時に、かつては持続可能であった社会（例えば、農耕社会）が持続不可能になっていくものである（1' → 2'）。高度経済成長を一気に成し遂げ、公害問題に直面した戦後の日本社会はその典型であると言えよう。

しかし、多くの国は 2 に達してから、環境のかけがえのなさに気づき、持続可能な社会を求めて 1' を意識しはじめる。しかし、ひとたび到達した快適な生活のレベルを下げずに 1' に向か

おうとするので、なかなか上手くいかない。そこで2から1'への途上で路頭に迷っているのが多くの先進諸国の現状ではないだろうか。

実際、1からまずは2へ向かい、そして1'への方向性を考えるというシナリオを描いている途上国は少なくないのかもしれない。しかし、すべての国々がこの経路をたどることを待っていると、地球がいくつあっても足りないほどに環境が破壊され尽くされてしまうのは必至である。では、どうすればよいのか・・・。

本調査研究は、こうしたグローバルな課題に対して少しでも突破口を開くことができたという想いのもとに生まれた。とはいえ、小さな大学の研究チームにとって、こうした難題の壁はあまりに高く、先達の知恵や知見に謙虚に学びつつ挑む方法以外には考えられない。その知恵の中には、長年、アジアでオルタナティブな開発を推進してきたヴァンダナ・シヴァらが含まれるが、理論として参考にしたのがアトキソン・グループによって開発された「コンパス」と呼ばれるメソッドであった。コンパスは、環境・経済・社会・幸福（well-being）の4側面からバランスのよい発展のあり方を考えていくためのツールである（詳細は本報告書「資料3」を参照）。

ところで、この事業の一環として、バンコクを拠点に「コンパス」の普及活動にアジア地域で取り組む「システナビリティ・アジア」（Sustainability Asia）の事務所を筆者らは訪れる機会に恵まれた。そこで当事務所の所長であるロバート・スティー爾(Robert Steel)氏との会話の中で話題になったことの一つがギリシャ神話の「カサンドラ」であった。

カサンドラとは、古代ギリシャの都市、トロイ最後の王の美しい末娘である。カサンドラの美貌に恋したのは、他ならぬ太陽神のアポロン神であった。しかし、カサンドラはアポロンの愛を受け入れることができずにいた。そんなカサンドラに対してアポロンは自分を愛するなら、特別な力を授けるとカサンドラに約束した。その特別な力とは「未来を予見する力」であった。ところが、ひとたび受け入れられたかのように思われたアポロンの想いであったが、カサンドラはどうしてもアポロンを愛せないままだった。結局、彼女はアポロンの逆鱗にふれてしまう。怒り狂ったアポロンはカサンドラに一度だけの接吻を懇願し、願いをかなわせる。そしてキスをした瞬間に、カサンドラの口に呪いの息を吹き込んだのである。その呪いとは、カサンドラの予言に対して誰も信じなくするという呪いであった。その結果、カサンドラはトロイの人々にギリシャ軍が巨大な木馬に隠れて攻めてくることを伝えはしたものの、だれも信じないままトロイは滅亡したのである。

この話を、環境問題と重ね合わせて「カサンドラのジレンマ」として説いたのが、先のアトキソン・グループの創始者であるアラン・アトキソンである<sup>1</sup>。彼は、環境問題に警鐘を鳴らしている現代の人々を、望ましくない予言が当たっても外れても非難の対象となるのが常であるがゆえに、カサンドラと同様のジレンマの状態にあるという。予言が的中したらしたで破局が訪れるし、予言が外れたら外れたで世間騒がせのレッテルを貼られる。『人口論』を書いたマルサスしかり、

---

<sup>1</sup> A. Atkisson. *Believing Cassandra: How to be an optimist in a pessimist's world*. Chelsea Green. 1999

『沈黙の春』の著者のレイチェル・カーソンしかりである。

今、持続不可能な未来へブレークダウンしていくか、持続可能な未来へブレークスルーしていくかという岐路に立つと言われる人類にとって重要なのは「カサンドラ」達の警鐘に傾聴することであろう。もちろん、グローバル経済の競争下で「豊かさ」を追求する以外の選択をするということは、経済成長の著しい新興国や途上国にとって決して容易いことではない。どの国も「豊かさ」を経験してから環境問題に本腰を入れたいというのが本音であろう。

しかし、物質的な豊かさのみを追求しても、生活満足度は必ずしも保障されないことは「世界価値観調査（World Values Survey）」などの国際比較調査のデータが示すところである<sup>2</sup>。経済成長によってのみ人々は幸福になるわけではないということに気づき始めた私たちが立ち止まり、持続可能な暮らしについて本気で考えるにはどうしたらよいか。そのために説得力をもつのはオルタナティブな開発のあり方を具現化している事例であると筆者は考える。

確かに、これまでもオルタナティブな開発のあり方は刷新的な共同体や学校によって示されてきた。しかし、その多くは傑出した個人や組織によって成し遂げられたような「雲の上の存在」だったのではないだろうか。今、求められているのは、普通の公立学校で普通の教師たちが通例の努力を通して成し遂げられる持続可能なコミュニティづくりであろう。さらにそうした個別の事例が外部にも開かれていくことにより、持続可能な地域社会の裾野が市民参加を通して広がることが期待されている。言い換えるなら、ブータン国王が提唱する国民総幸福（GNH）やタイ国王が提唱する「足るを知る哲学」（SEP）を具現化するような地域社会形成の実践である。

今回のプロジェクト実施地域であるシェンクワン県が選定された背景には、こうした実践を「発見」するのではなく、プロジェクトをきっかけに時間をかけて育んでいきたいという意図がある。同県は、豊かな自然資源がある一方で、外国資本を巻き込んだ開発が流入し、様々な弊害を人々の生活にもたらしているという現実も合わせ持つ（「調査結果の分析」を参照）。そうした抜き差しならぬ現状の中、経済のみならず社会的な側面も文化的な側面も大事にしながら社会全体が発展していくようなプロセスを地元の人々と共に共有してみたいという思いが本事業の背景にある。

なかには人類に警鐘を鳴らすカサンドラの育成こそ、教育の大事な使命であるという主張もあるであろう。しかし、カサンドラのジレンマ、すなわち自らの予見が当たっても外れても批判に晒されるような人生に苦しみ続けることを思うと、それはあまりにやるせない。言い逃れに聞こえるかもしれないが、筆者のように教育に携わる者の使命があるとすれば、それは現代のカサンドラの声に傾聴するような感性と理性をもった次世代の市民を育むことではないだろうか。持続可能性に関する知識のみならず、技能や態度、精神性、構想力と行動力をもった市民を育んでいくことは ESD の挑戦であると言ってもよい。

新しい時代に求められる若者の技能や思考を、彼（女）ら自身を調査に巻き込むことを通して

---

<sup>2</sup> B. Frey and A. Stutzer. *Happiness and Economics: How the Economy and Institutions Affect Human Well-Being*. Princeton Univ. Press. 2002.

育むような学習のあり方を重視し、本事業では青少年が主体となって調査が行われた。持続可能な未来をつくるのは持続不可能な社会をつくってきた大人達ではなく、未来の担い手の子ども達であることを、私たち教育者の側も立ち止まって考える時代に来ていると言えよう。

「発展途上国における＜ESD 広域モデル＞の構築に向けた基礎調査  
及び視聴覚教材の作成・普及」事業 企画提案者(総括)／聖心女子大学准教授  
永田佳之

本事業報告書は、平成 22 年度政府開発援助ユネスコ活動費補助金「アジア・太平洋地域等における開発途上国の教育、科学又は文化の普及・発展のための交流・協力事業」の企画提案者である永田佳之(聖心女子大学文学部教育学科准教授)の責任のもとに監修されたものである。ここで述べられている見解は、聖心女子大学、その他の機関を代表するものではないことをお断りしておく。



## 目 次

|                        |     |
|------------------------|-----|
| はしがき                   | i   |
| 序                      | iii |
| 1. 事業実施国の概要            | 1   |
| 2. 事業実施地域（シェンクワン県）の概要  | 3   |
| 3. 調査の概要               | 7   |
| 1) 調査の目指すところ           | 7   |
| 2) 調査のアプローチ            | 7   |
| 3) 調査内容                | 8   |
| 4) 調査チームのメンバー          | 20  |
| 5) シェンクワン県の地図          | 21  |
| 4. 調査結果の分析             | 22  |
| むすびにかえて                | 31  |
| 資料                     |     |
| 1. 調査結果のマトリクス          | 35  |
| 2. 技術移転のための調査及び招聘プログラム | 51  |
| 1) タイ調査報告              | 53  |
| 2) インド調査報告             | 69  |
| 3. コンパス・スクール（翻訳）       | 75  |



## 事業実施国の概要



(国旗：赤は自由と独立のためにながされた血、白い丸は平和と輝かしい未来の展望、青は国家の繁栄とメコン河を表している。)

正式国名：ラオス人民民主共和国 (Lao People's Democratic Republic)

国歌：ベーンサッラオ (Pheng Xat Lao)

首都：ビエンチャン (Vientiane)

人口：612 万人 (2009 年ラオス統計局)

面積：24 万平方キロメートル

民族構成：低地ラオ族 (60%) 他、計 49 民族

宗教：仏教 (約 90%)

言語：ラオス語

通貨：キープ (kip) 使用されているのは貨幣のみ

歴史：1353 年、ランサーン王国として統一される。

1899 年、フランスのインドシナ連邦に編入される。

1949 年仏連合の枠内で独立する。

1953 年、仏・ラオス条約により完全に独立する。その後内戦が繰り返される。

1973 年「ラオスにおける平和の回復及び民族和解に関する協定」が成立する。

1975 年、ラオス人民民主共和国が成立する。

政治体制：人民民主共和制

元首：チュンマリー・サイニャソーン国家主席

議会：国民会議一院制

ラオスは東南アジアに属し、タイ、ベトナム、ミャンマー、カンボジア、中国と国境を接している。東南アジア地域で唯一海岸線を有しない内陸国である。首都ビエンチャンは、メコン河沿いのラオス最大都市である。16 世紀頃に当時のセタティラート国王により首都と定められ、現在も政治、経済の中心地であり国のメインゲートとなっている。フランス植民地時代の古い建物や並木道、多くの仏教寺院が混在し、アジアと西洋文化の融合を見ることができる。国土全体は豊かな自然資源にめぐまれ、労働人口の 80% が農林業（米、木材、野菜等）に従事しており、農林業はラオスの主要産業となっている。近年では過度の森林伐採による森林減少が深刻で、ラオス農林省によると、かつては国土面積の 70% を

占めていた森林も現在では国土面積の 45%となっているという。

UNDP（国連開発計画）が 2010 年に発行した人間開発指数（Human Development Indicator<sup>1</sup>）で、ラオスは全 169 カ国中 122 位に位置付けられている。識字率は 72.7%で 2005 年から変化がない。初等教育純就学率は男子で 88%、女子で 82%であるが、初等教育修了の 5 年生までの就学率は 64%にとどまる。中高等教育の純就学率の男子で 38%、女子で 32%となり、初等教育就学率と比べてその割合は半分以下である。初等教育において、5 年生の就学率が 64%に下がる背景には、家事への従事などによる中途退学や留年が挙げられる。これらのデータから、男女間の教育格差があることがわかるが、この差は民族間で見るとさらに大きくなり、特に山岳民族であるモン・ヤオ系およびシナ・チベット系に属する少数民族の女子が最も深刻となる。シナ・チベット系に属する少数民族コーの女性識字率は 0.7%であり、識字率が最も高いラオ族の男性識字率が 84%である点と比較しても、民族および男女間に教育格差があることがわかる。

続いて経済に目を向けると、ラオスにおける近年の経済成長は目覚ましく、2009 年の GDP 成長率は 7.6%と、182 カ国中 9 位という躍進をみせている。しかし、一人当たり GDP が 916 ドル（2009 年）と極めて低いことから、国民生活は経済的に「豊か」とは言えない。ラオスの経済成長は 80 年代以降顕著に見られるようになるが、この背景には、日本を含めた外国企業の積極的誘致を通じて、西太平洋経済へ参画しはじめたことが挙げられる。

ラオスは仏教的思想に重きを置き、人々は僧侶に対して格別な敬意を払う。豊富な自然資源と世界遺産を持つ豊かな文化国である。その一方で、これまでに示した低い識字率や経済的側面などからラオスは低開発地域とされ、貧困からの脱却が国の大目標として掲げられている。

#### 【引用・参考文献】

UNICEF（2007）『世界子ども白書』

Asian Development Bank, 2000. *Addressing the Health and Education Needs of Ethnic Minorities in the Mekong Sub-Region* TA No.5794-REG, Research Triangle Institute.

International Monetary Fund 2010. *World Economic Outlook (WEO) Rebalancing Growth*. April 2010. International Monetary Fund

外務省ラオス人民民主共和国（2011/02/20 閲覧）

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/laos/data.html>

UNDP. 2010 *Human Development Report 2010* (2011/02/20 閲覧)

<http://hdr.undp.org/en/>

---

<sup>1</sup> 一人当たり GDP、平均寿命、識字率、就学率を基本にして数値化したものである。経済面だけでなく、人間がその可能性を十分に開花させ、創造性を持って人生を開拓するために必要とされる基本的能力をふくめた人間開発指標である。

## 事業実施地域（シェンクワン県）の概要

### 【地理】

シェンクワン県はラオス北部にあり、首都ビエンチャンから 400km の位置にある。県庁所在地はボンサワンで、東をベトナムと接している。土地の 90% が山、8% が平原、2% が田んぼである。これらの山々は川の源となり、川はラオス中心部の農業や電子工業を支える重要な役割を果たしている。近年では、もち米栽培を中心とした農業だけでなく、牛などの大型動物の飼育も大切な収入源となっている。2005 年に行われた国勢調査によれば、シェンクワン県の総人口は約 23 万人で、そのうち約 14 万人が女性である。人口増加率は 1.4% で、平均寿命は 61 歳である。シェンクワン県は多くの少数民族が住んでいることでも知られており、その割合は 44.5% がラオ族、次いで 38.4% がモン族、8.1% がクム族とその他に分類される。

また、シェンクワン県は巨大な「石壺」が散在する光景で有名なジャール平原の拠点となる町でもある。ジャールとは「壺」を意味する語だが、なぜこれほど多くの壺があるのか、何のために使われたのかなどジャールにまつわるミステリーは未解決のままである。シェンクワン県は 1960 年代半ばから始まったラオス内戦の地でもあり、ジャール平原内に残る無数のクレーターはアメリカ軍が投下した爆弾の痕である。未だ撤去されていない不発弾が多くあり、その処理のために世界各国からの支援はあるが、毎年犠牲者が出ているのが現状である。



写真：ジャール平原に数多く点在する「石壺」

### 【経済】

2006 年の経済成長率は 7.4% で、シェンクワン県における GDP は 9850 万ドルであった。GDP の構成を見ると、その半数以上を占めているのが農業分野であり、ドルでは 54.2 万ドル、比率では全体の 55% にも及ぶ。労働人口の 80% が農業に従事していることから、シェンクワン県における経済基盤や人々の暮らしの中心は農業にあることが分かる。その他、工業や手工芸が GDP 比の 33% を占めている。また、近年では外国資本による農業分野への投資も増加している。2003 年から 2007 年までに 45 の多国籍企業が主に農業施設などのインフラ整備に投資をしており、その総額は 2400 万ドルになる。

主な輸出品は、木材、木工製品、家畜、米、トウモロコシなどで、輸入品は、自転車や部品、建材、嗜好品、衣類などがあげられる。

## 【文化】

シェンクワン県には代表的な観光名所が 33 ヲ所あり、気候も温暖で過ごしやすいため、観光地としても知られている。また、鉱物や牧草地などの自然資源に恵まれた豊かな土地でもある。ダムはまだ無いが、これから 2 つのダムが 2015 年までに建設される予定であり、これらのダムが完成すれば 165KW 以上の電力を賄うことができるとされている。しかしこのダム建設によって、建設予定地域下流の村に住む人々は深刻な水不足に悩まされており、自給自足で生きる人々が多い村の暮らしに多大な影響を与えている。

## 【不発弾との関わり】

1961 年、アメリカはソ連・中国の支援を受けた北ベトナム軍がホーチミンルートを通じて南下することを防ぐため、ラオス国内において「秘密戦争」を開始する。ホーチミンルートの 9 割はラオス国内に建設されていたためである。1965 年 3 月から本格的にベトナム戦争が始まると、ラオスにおける内戦も激化する。秘密戦争と呼ばれる所以は、その凄まじい戦闘状態の最前線にジャーナリストが入ることが不可能だったため、世間で知られることがなかったからである。今でも多くの不発弾がラオス国内にあり、2004 年時点で、全 17 県のうち 12 県で不発弾処理が行われている。シェンクワン県には特に大量の不発弾が存在し、その数は 900 万にものぼる。

米国はホーチミンルートを断絶するためにラオス北部ファティを拠点におき戦闘を繰り広げた。米国は当時 300 万にもおよぶ爆弾を投下し、この爆撃によりラオスの大半が不毛の地となった。シェンクワン県はベトナムに近い立地であり、またモン族が多く住む場所であったため特に戦闘が激しい場所であった。米国は山岳に住むモン族を訓練し「モン特殊攻撃部隊」を組織した。その目的は山岳戦における共産主義側兵士を掃討するためである。山岳地帯は共産勢力の侵攻をふせぐために死守しなければならない場所であったため、多くの死者が出た。戦争から逃れるためにタイのキャンプに向かうモン族の人々もいたが、脱出中に地雷、待ち伏せ攻撃、飢え、マラリヤ、溺死などで 10 万人以上が死んだ。1964～69 年の 5 年間にシェンクワン県には 75000 トンの爆弾が落とされたとされている。1973 年以降、クラスター爆弾が残した不発弾による死者は 5000 人以上にのぼり、不意に不発弾に触ったことなどから起きる事故で、障害を負う人も後を絶たない。

米国はこの戦争を公式には発表しなかったため、世間的にこの戦争は存在しないものであった。しかし米国に多くのモン族が住んでいることから、この戦争が明らかになる。イラク戦争にはモン族の人々も参加しており、2004 年 6 月 18 日、イラク戦争で最初のモン族の死者が出ることとなる。不発弾の脅威、そしてモン族の悲劇は未だに終わっていない。シェンクワン県は、民族の 38% がモ



写真：現在も多く発掘される不発弾

ン族である。秘密戦争であったために、彼らには悲劇をつたえる手段がない。

### 【教育】

シェンクワン県は、ラオス国内において海外援助が多い県のひとつである。その理由としては、少数民族のモン族が多く住み、教育環境改善むけたプロジェクトが数多く行われているからである。少数民族とラオ族の間の教育格差は深刻な問題があるとされており、アジア開発銀行の報告によると、少数民族が住む 4000 の村にいまだに小学校が建設されておらず、シェンクワン県を含むラオス北部がその具体的な事例として挙げられている。また、山岳地帯を含むシェンクワン県では村が分散しているため、村の位置によっては学校までの距離が遠く、小学校低学年の体力では通うことが困難となる。ラオス教育省によれば、2000 年のシェンクワン県の教育予算は 8600 万円であったが、未だに校舎や学校用具の不足は解消されていないため教育予算の不足を指摘することができる。ラオス語を話すことができない少数民族は少なくないが、ラオスでは共通してラオス語による授業が行われている。そのためラオス語を母語としない少数民族にとっては、授業の履修自体が難しい。このように教育予算の不足と地理的条件、教育の質の問題が重なり、民族間には教育格差が見られる。

シェンクワン県は温暖な気候と豊富な自然資源、そして多様な文化がいまでも残る豊かな地域である。近年では外国資本の投入による経済発展が見られるようになったが、その発展の急激さから、シェンクワン県の持つ「豊かさ」と経済発展がどのように共存していくのかが今後の課題であると考えられる。また、少数民族を含む全ての国民が質の伴う教育を享受し、国家発展、政治・経済活動に共に関わり合う社会の形成も重要な要素であろう。

### 【参考文献・URL】

乾美紀 (2004) 『ラオス少数民族の教育問題』明石書店

竹内正右(2004)『ラオスは戦場だった』めこん

ボワリン・ポンマシン氏(Xieng Khouang Provincial Education Service, Lao PDR

Pedagogical Advisor)作成によるレポート

ラオス政府観光局 (2011/03/01 閲覧) <http://www.lao.jp/>





## 調査の概要

### 調査の目指すところ

この調査では、発展途上国における＜ESD広域モデル＞の構築に向けた基盤形成が目標とされ、そのための基礎調査が行われた。ここでいう「モデル」とは、複数の学校を核としたサステイナブルな地域開発の実践であり、ESDの国際実施計画（IIS）で明記されている環境・経済・社会・文化のバランスのとれた発展のあり方を具体的に提示することを目指す<sup>1</sup>。換言すれば、近年、注目されているブータンの国民総幸福（GNH）やタイの「足るを知る経済」哲学を理念レベルではなくて、地域の実践レベルとして具現化していくための調査であると言ってよい。

現在、ESD推進の障壁の一つとして「ESDは先進国のものであり、EFA（「万人のための教育」）は途上国のものである」という神話がある。時として持続可能な世界の形成に障害ともなりえる、この二項対立的な思考様式を解消していくためにも、発展途上国におけるグッド・プラクティス、しかも学校単位の事例ではなく地域レベルの持続可能なコミュニティ・モデルを創ることを射程に置いている。

本調査を行うにあたって、聖心女子大学のカウンターパートとして共同で事業を推進するのはラオスのNGO、PADETC（Participatory Development Training Centre: 参加型開発センター）である。PADETCとは、2005年にラモン・マグサイサイ賞を受賞したソンバット・ソンポン氏が1996年に設立した非政府組織であり、団体創設以来、持続可能な未来に向けた地域社会のリーダーとなる青年育成や農村開発、教育の質向上に関する事業、メディアによる啓発事業等を行っている。

ラオス国内で活動を積み重ねてきたPADETCとの協議で今回の調査地として選定されたのは首都のビエンチャンより約200km北東に位置するシェンクワン県である。同県は豊かな自然環境に恵まれている一方で、近年、外国資本が流入し、急速に伝統的な生活基盤が崩れつつある地域でもある。調査を通して、シェンクワン県の持続可能性および持続不可能性を明らかにし、よりサステイナブルな地域開発を実現する上での課題を示したい。

### 調査のアプローチ

アジアの発展途上国における＜ESD広域モデル＞構築に向けた参加型の調査を通して持続可能な地域社会の形成に資する学校教育の機能と地域社会の役割を明らかにすることを目指す。本調査では、生徒らによる村人へのインタビューを中心にした参加型調査とともに地図作りが行われた。

本調査の主体となったのは、シェンクワン県にあるポンサワン高等学校1・2年生の生徒32名である。生徒らはシェンクワン県に在住し、PADETCのユースボランティアに属している。リーダーシップ育成も兼ねた本調査では、32名の生徒が複数のグループに分かれ、6

---

<sup>1</sup> UNESCO. *Framework for the UNDESD International Implementation Scheme*. 2006. p.14.

つの村に赴きコミュニティの持続可能性について村人にインタビューし結果分析を行った。研究者や教師などの大人ではなく、生徒が調査者となって調査のプロセスを経験し、コミュニティ開発の一役を担った。

参加型調査は村人への聞き取り調査を中心とし、システナビリティ・アジア (Sustainability Asia) が開発した「コンパス」が活用された。このコンパスを採用した理由は、持続可能な社会形成の4つの側面、すなわち環境、社会、経済と福祉（ウェルビーイング）を軸に社会の発展のあり方をホリスティックに捉える手法であり、先の要点に即しているからである。ただし、調査地の文化的状況、調査者である生徒らの能力等を考慮し、4つの側面のうち村人や生徒になじみの薄いと思われる「環境」「社会」「福祉」の用語については次のような工夫をこらした。つまり、「環境」を「自然」、「社会」を「文化」、「福祉」を「幸福」としてコンパスの一部を修正し、調査を進めた。また、「コンパス」メソッドは調査法として刷新的であるため、調査を行う前にワークショップが開かれ、生徒らはコンパスを用いた調査についてのトレーニングを受けた。この際、ファシリテータ間においては「コンパス」についての認識の共有はあったが、実際の調査者となる生徒間においては「コンパス」という用語は用いない形で調査・分析のトレーニングが行われた。

結果分析では、各側面—自然、経済、文化、幸福—に見出された特徴を用いて、異なる側面同士の関係性を捉えるワークが行われた。そこでは、他の側面に見られた特徴との関係性を可視化させるために毛糸が用いられた。つながりが可視化された状態は「知恵の箱」 (Wisdom Box) と名付けられ、それは、各側面の特徴がいかにつながり成り立っているかを示す地域の持続可能性のみならず全体のバランスを崩している持続不可能性を帯びた問題を表している（コンパスの詳細は「資料3」を参照）。以上のように導き出された調査地の持続可能性と課題は生徒らによってまとめられ、村人に向けて結果報告という形で提示された。

村人への聞き取り調査と並行して、村の地図が作成された。「知恵の箱」と同じように、地図を作成することでコミュニティの現状が可視化でき、持続可能性と課題を地図上に描いて、記録することができるためである。コンパスだけでは調査結果をすべて記録することはできなかったため、地図作りを組み込んだことにより、聞き取り調査で得られた情報を地図上に描き、村の現状を図として示すことができた。ここに質的・量的に調査結果をまとめることができる本調査の一つの特徴が見出せる。

## 調査内容

ここでは、調査の概要について一連のプロセスをたどる形で示したい。

### (1) 調査場所

| 日にち      | 場所                                                                      |
|----------|-------------------------------------------------------------------------|
| 2月23日    | ベック Pek 郡ナオ Na-O 村、同郡ラッドゴーン Ladgone 村                                   |
| 2月25～27日 | カム Kham 郡リンムワン Limmouang 村、<br>同郡ヒン Hin 村、同郡ロンピュー Longpia 村、同郡ナパ Napa 村 |

(2) 調査日程

| 日にち   | 内容                                                                                                       |
|-------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 2月21日 | シェンクワン県教育事務所訪問、挨拶、プロジェクトの概要説明                                                                            |
| 2月22日 | 朝：ポンサワン高校訪問、開会式<br>午前～夕方：PADETC 職員によるワークショップ（ユースボランティアのトレーニング）                                           |
| 2月23日 | フィールド調査：ペック郡ナオ村・ラッドゴーン村                                                                                  |
| 2月24日 | 午前：前日のフィールド調査の振り返り<br>調査で得た情報の整理と結果発表<br>午後：インタビュー（質問するときの留意点と質問項目の作り方等）についてのワークショップ<br>前日の村への再訪、調査結果の報告 |
| 2月25日 | カム郡へ移動、4村（リンムワン村、ヒン村、ロンピュー村、ナパ村）に分散しフィールド調査。<br>村でのホームステイ                                                |
| 2月26日 | フィールド調査（聞き取り調査等を通した情報収集）、村でのホームステイ                                                                       |
| 2月27日 | フィールド調査（聞き取り調査等を通した情報収集）の続き<br>コミュニティの人々へのプレゼンテーション準備、報告<br>村でのホームステイ                                    |
| 2月28日 | ポンサワンへ移動、全体のフィードバックとリフレクション                                                                              |
| 3月1日  | シェンクワン県教育事務所訪問、調査報告                                                                                      |

コンパスを活用したワークショップ：ユースボランティアのトレーニング

|    |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
|----|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 導入 | <ul style="list-style-type: none"> <li>挨拶、PADETC 職員と生徒らの自己紹介</li> <li>調査に関するグラウンドルール作り<br/>トレーニングにあたってルールを作った。教員が「今日のトレーニングを通してどんなことが守られなければならないか？」「どんなことに気をつけるべきか？」と発問し、生徒から 20 近くの回答が挙げられた。<br/>例：協調性をもつこと、努力すること、時間厳守、責任感をもつこと、思いやりを持つこと、携帯電話を使用しないこと、勤勉であること、自己中心的にならないこと、互いに尊重し合うこと。</li> <li>シェンクワン県の紹介<br/>ファシリテータが生徒にシェンクワン県で有名なもの、もしくは地域を代表するものは何か発問した。挙げられた回答の中からひとつを選ぶため、生徒による投票が行われ、タンピュー洞窟が選出された。</li> </ul> |
|----|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

|                                          |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
|------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|                                          |  <p>⇒タンピュー洞窟を題材に本トレーニングは進められていった。</p> <p>写真：投票の様子</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
| コンパスと<br>タンピュー<br>洞窟を使用<br>したワーク<br>ショップ | <ul style="list-style-type: none"><li>・グルーピング</li></ul> <p>32名の生徒を4グループに分けた。なお、各グループには、ボランティア経験のある高校2年生が均等に配置された。</p> <p>各グループには「自然」「経済」「文化」「幸福」というグループ名がつけられた。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ブレインストーミング</li></ul> <p>「タンピュー洞窟には何があるか」を題材に、グループ名に関連したブレインストーミングをした。</p> <p>ブレインストーミングの一例</p> <p>「自然」：タンピュー洞窟には山や木がたくさんある、戦時中の人々の生活用品がある。</p> <p>「経済」：商売や観光が盛んである、伝統的なものが売っている。</p> <p>「文化」：仏教を信仰している人がよく行く、洞窟の中にはたくさんの仏像がある。</p> <p>「幸福」：戦争時に人々が暮らしていたが今は観光地になっている<br/>タンピュー洞窟には、幸せなことと悲しいことがある。</p>  |
| ブレイン<br>ストーミン<br>グの発表                    | <p>写真：「幸福」グループのブレイン<br/>ストーミングの様子</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・各グループで挙げられたブレインストーミングの内容を模造紙にまとめ、グループごとに全員の前で発表した。</li></ul>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |

|                              |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
|------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>分析法の導入</p>                | <ul style="list-style-type: none"> <li>・発表した内容の中で最も重要だと思われる項目を3点挙げ、A4の紙にそれぞれ書き出し、発表した。</li> </ul> <p>各グループが選出した3点</p> <p>「自然」：雰囲気、空気、伝統品の販売</p> <p>「経済」：旅行サービス、村人が商売をしている、生産品を売る</p> <p>「文化」：宗教(仏教、アニミズム)、服装、文化</p> <p>「幸福」：ラオスの大切な歴史の場、恩返しの場合、村人の収入向上</p> <p>⇒挙げられた計12項目を使って、調査後に行う分析の方法を学ぶ。</p>                                                                                                                                                                                                                                             |
| <p>分析のトレーニング</p>             | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ファシリテータが口字に座るように指示し、各グループが一辺ごとに座り四角の形を作った。</li> <li>・選んだ3点が書かれたA4用紙3枚をグループ内の3名がそれぞれを持って立つ。</li> <li>・それぞれの内容に関係性があるかどうかを考え、関係するもの同士を糸糸を用いてつなげる。</li> </ul> <p>糸でつながれた関係性の一例</p> <p>「文化」の「文化」と「経済」の村人が商売をしている</p> <p>「自然」の「伝統品の販売」と「幸福」の「村人の収入向上」</p> <p>「経済」の「村人が商売をしている」と「幸福」の「村人の収入向上」</p> <p>⇒関係性あるものをつなぎ、各領域間のつながりを可視化された状態を「知恵の箱 Wisdom Box」と名付けた。これによって村の持続可能性と持続可能性を帯びた問題が示される。</p>  <p>写真：「知恵の箱」作成の様子</p> |
| <p>地域の持続可能性を維持するための方法の検討</p> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・「知恵の箱」で糸のつながりが最も多かった「経済」班の「村人が商売をする」を題材に、持続可能性を維持するための方策が考え出された。ファシリテータは、生徒に「タンピュー洞窟を守りながら、シェンクワン県が収入を得るにはどうすべきか」と発問し、生徒はグループ内で話し合い、発表をして方針を分かち合った。</li> </ul> <p>発表内容の例</p> <p>「自然」：森の保護、洞窟の維持、よい観光サービスの向上、観光の広告普及とコミュニティの収入向上</p> <p>「経済」：伝統工芸品の販売、他の場所での商売、自然・文化を保全と並行</p>                                                                                                                                                                                                                         |

|                  |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |    |    |    |    |    |            |  |  |  |  |              |  |  |  |  |         |  |  |  |  |
|------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----|----|----|----|----|------------|--|--|--|--|--------------|--|--|--|--|---------|--|--|--|--|
|                  | <p>した経済の発展</p> <p>「文化」：文化の保全、ラオスの伝統について村人や観光客の認知度向上、タンピュー洞窟のルール作り</p> <p>「幸福」：洞窟の環境の改善、ラオスの文化保全、次世代への文化継承、木を伐採する村人の仕事に代わる職業機会の提供（例、タンピュー洞窟に関する仕事等）</p>  <p>写真：発表の様子</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                      |    |    |    |    |    |            |  |  |  |  |              |  |  |  |  |         |  |  |  |  |
| 地図作成についてのワークショップ | <ul style="list-style-type: none"><li>・地図を作成する際に必要な情報や道具についてグループ内で話し合わせ、模造紙にまとめて発表した。</li><li>・地図を描く上で共通認識しておくべき地図記号は、生徒らの意見をもとに決められた。</li><li>・村の地理情報を集めるには誰に聞くべきかの説明をファシリテータから受けた。</li></ul>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |    |    |    |    |    |            |  |  |  |  |              |  |  |  |  |         |  |  |  |  |
| 調査分析の方法について      | <ul style="list-style-type: none"><li>・ファシリテータが、インタビューで得た情報を整理するためにマトリクスを用いてまとめるように説明した。</li><li>・インタビューは What/ How/ Why に基づく質問を用意するため、ノートも同様に What/ How/ Why に基づいて整理するよう指示された。</li></ul> <table border="1" data-bbox="410 1326 1353 1538"><tr><td></td><td>自然</td><td>経済</td><td>文化</td><td>幸福</td></tr><tr><td>What（観察対象）</td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td>How（起きている現象）</td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td>Why（原因）</td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr></table> <p>⇒調査後の分析も、上記の表をもとに行われた。</p> |    | 自然 | 経済 | 文化 | 幸福 | What（観察対象） |  |  |  |  | How（起きている現象） |  |  |  |  | Why（原因） |  |  |  |  |
|                  | 自然                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             | 経済 | 文化 | 幸福 |    |    |            |  |  |  |  |              |  |  |  |  |         |  |  |  |  |
| What（観察対象）       |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |    |    |    |    |    |            |  |  |  |  |              |  |  |  |  |         |  |  |  |  |
| How（起きている現象）     |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |    |    |    |    |    |            |  |  |  |  |              |  |  |  |  |         |  |  |  |  |
| Why（原因）          |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |    |    |    |    |    |            |  |  |  |  |              |  |  |  |  |         |  |  |  |  |
| 調査班のグループ핑        | <ul style="list-style-type: none"><li>・各グループー自然、経済、文化、幸福ーから1名ずつ前に出させ、4名のグループを作った。計8グループが新たにできあがった。そのうち2グループは地図作りを担当した。</li></ul>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |    |    |    |    |    |            |  |  |  |  |              |  |  |  |  |         |  |  |  |  |
| 質問の作成            | <ul style="list-style-type: none"><li>・翌日からの調査の準備として、各グループにいる「自然」、「経済」、「文化」、「幸福」担当の質問者が What/ How/ Why を用いた質問項目を作るように、ファシリテータが説明した。</li></ul> <p>生徒が作成した質問内容の一例</p> <p>「自然」：村の自然は何ですか、川で魚を釣っていますか、森で何を採り</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |    |    |    |    |    |            |  |  |  |  |              |  |  |  |  |         |  |  |  |  |



|  |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
|--|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|  | <p>ますか、田植えは年に何回行いますか、観光地はありますか、今と昔の自然はどのように異なりますか。</p> <p>「経済」：収入は何から得ていますか、農業以外の収入は何ですか。</p> <p>「文化」：村人の信仰している宗教は何ですか、村の伝統的な文化は何ですか、シェンクワン県の有名な料理はありますか。</p> <p>「幸福」：どのようなときに幸せを感じますか、今一番欲しいものは何ですか、今一番苦しいことは何ですか、毎日の生活はどうですか。</p>  <p>写真：ファシリテータから質問の作成方法の助言を受ける生徒</p> |
|--|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

#### フィールド調査・調査結果の分析

調査は生徒が各家庭や学校に訪問し、村人や村長、村の学校教員にインタビューを行った。カム郡の調査では、生徒は村の住民の家にそれぞれホームステイを経験した。以下、調査と分析の詳細である。

|         | 聞き取り調査                                                                                                                                                            | 地図作成                                                                                                                                                                                       |
|---------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| フィールド調査 | <p>グループごとに家庭を訪問し、自然、経済、文化、幸福について生徒が村人にインタビューした。</p>  <p>写真：村の女性にインタビューする様子</p> | <p>村人とともに「google earth」を使用しながら村の全体図を把握し、インタビューを通して地図の詳細な情報を得た。</p>  <p>写真：google earth で位置を確認する村人ら</p> |

調査結果のマトリックス

例) カム郡ヒン村

(のこり 5 村の調査結果のマトリックスは「資料 1」を参照)

自然

| WHAT           | HOW                                                        | WHY                                               |
|----------------|------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------|
| I.川<br>1)マット川  | マット川は長い川だが川幅は広い。昔は水量が多かったが、現在は減少している。以前より川の水量の増減が激しくなった。   | 人が木を伐採するようになった。ゴミを川に捨てる人が多くなった。雨期に雨が十分に降らない。      |
| 2)クワ川          | マット川より大きい。以前は汚かったが、現在は水がきれいになった。                           | 川の水がきれいになったのは、川の上流に住む人がゴミを川に捨てなくなったから。            |
| * 追加情報         | 村にはホンシン川とホンブア川が流れている。                                      | (不明)                                              |
| II.山<br>1)ホック山 | 大きな山がある。様々な種類の木がある。ホックという木が多くあるが、今は減少傾向にある。                | 人口が増加して、木を切る人が多くなった。                              |
| 2)プーヴィエン山      | ホック村よりも大きな山だが、木は減少傾向にある。                                   | (不明)                                              |
| * 追加情報         | ジャー山とファヒア山は村の所有地により自由に木を伐採することができない。伐採する際は村長に文書を提出する必要がある。 | ホック山とプーヴィエン山は家を建設する時のみ自由に木を伐採できるが、伐採した木を売ってはいけない。 |
| II.土           | 肥沃な土壌がある。何を植えてもよく育つ。マックヘウを育てると土壌が肥沃になる。                    | (不明)                                              |
| III.天気         | 最近天候の変動が激しい。                                               | 木を伐採するようになったから。人口が増加したため木を伐採する量が増加した。             |
| * 追加情報         | 1983 年に洪水があり村が崩壊した。昔の村は現在の村よりも南に位置していた。                    | 昔は山に虎も生息していたが、現在は生息せず。木を伐採して田んぼにしたためである。          |

経済

| WHAT      | HOW                                                                         | WHY                            |
|-----------|-----------------------------------------------------------------------------|--------------------------------|
| I.農業<br>米 | 村人は皆農家である。米を年間 1 人あたり 450kg 生産している。マット川とクワ川の水を使用している。                       | 雨があまり降らないので川の水を使用して稲を育てる。      |
| とうもろこし    | 各家族 1 ヘクタールの農地を所有している。年間に 866,982,000 キープの収入がある (1 人当たりの年収 11,744,000 キープ)。 | とうもろこしを高値で売ることができるため、高収入が得られる。 |



|    |                 |                                                                     |                                            |
|----|-----------------|---------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------|
|    | にんにく            | 化学肥料を使用せずに、堆肥を使用して育てる。年間1家族あたり400kgの収穫がある（1家族あたり6,000,000 キープの収入）。  | 余剰の収入として栽培している。                            |
|    | マックヘウ（果物）       | 米と同時期に植える（1家族あたり3,000,000 キープの収入）。                                  | マックヘウを植えることによって土壌が肥沃になり、収入を得ることもできる。       |
|    | バナナ             | 山で栽培している。年に3回の収穫時期がある（1家族あたり400,000 キープの収入）。                        | 余剰の収入として栽培している。                            |
|    | Ⅱ.酪農<br>水牛・牛    | 稲作の時期以外は水牛や牛を自由に放牧することができる。稲作の時期は小屋にて飼育する。村には現在81頭の水牛と280頭の牛がいる。    | 堆肥のために飼っている。祭りや結婚式の際に食べる。お金がないときに売って収入を得る。 |
|    | ぶた・あひる・<br>にわとり | 家の周りで飼育する。108頭のぶた、300羽のあひる、1605羽の鶏がいる。                              | 普段の生活、特別な日にも食べる。お金がないときは売る。                |
|    | Ⅲ.商売<br>小さな店    | 日用品、お菓子をボンサワンから仕入れて売る（1家族あたり500,000 キープの収入がある）。                     | 余剰の収入である                                   |
|    | 動物、魚、野菜         | ボンサワンで売ったり、ボンサワンで売っている物をカム郡で売ったりする。                                 | 余剰の収入である。                                  |
| 文化 |                 |                                                                     |                                            |
|    | WHAT            | HOW                                                                 | WHY                                        |
|    | ラオスの習慣          | 毎年必ず行う仏教(ラオ族)の祭り<br>・ 4月ラオスの正月<br>・ 9月仏教の祭り<br>タイダム族の祭りも行う。         | 伝統的な習慣である。                                 |
|    | 宗教              | 少数民族<br>・ タイダム族(精霊崇拜)<br>・ カム族(精霊崇拜)<br>・ ラオ族(仏教)<br>村人の80%が仏教徒である。 | 昔からの仏教文化を守る。                               |
|    | 服               | 女性は仕事、祭り、結婚式の際にシンをはく。                                               | ラオスの伝統を守る。                                 |
|    | 言葉とマナー          | 年上の人を尊敬する。<br>シェンクワン弁を使用する。                                         | ラオスの伝統を守る。<br>シェンクワンの伝統を守る。                |
|    | 昔からのゆかりのある地     | 寺院が2つある。古い寺には本尊のみあり、僧侶はいない。新しい寺には僧侶が1名いる。<br>ムイという動物の形をした洞窟がある。     | 古い寺は昔からあるが、今は使用していない。                      |
|    |                 | ジャール平原がある。                                                          | 昔の人はジャール平原にあるツボを使用してお酒を飲んでいたと村人は信じている。     |

| 幸福                                 |                                      |                                               |
|------------------------------------|--------------------------------------|-----------------------------------------------|
| WHAT                               | HOW                                  | WHY                                           |
| 幸せ<br>1)生活                         | 幸せに生活している。村人同士でけんかしない。子どもたちが学校に通う。   | 昔は金持ちしか学校に通うことができなかった。戦時中は稲作がなかった。            |
| 2)うれしいこと                           | 政府が水道、電気、道路の整備をしてくれた。<br>土地がある。車がある。 | 暮らしが以前よりも楽になった。                               |
| 3)助け合い                             | 村の人が助け合って問題解決をする。                    | 金持ちも、そうでない人も協力し合う。                            |
| 不幸せ<br>1)心の不幸せ                     | 川の上流からゴミが流れてくる。                      | ゴミだけでなく、動物の死体も流れてくるため、水質汚染により、病気になりやすくなる。     |
| 2)体の不幸せ                            | 川の水量が下がる。天候が不安定である。                  | 天候の不安定により、畑作、稲作ができにくくなる。                      |
| 改善してほしいこと<br>1)10 代の子どもたちへのワークショップ | 服やラオスの文化に関するワークショップを設ける。             | 最近の若者は脱ラオス文化の傾向にある。                           |
| 2)政府からの支援                          | 村長の給料を上げる。                           | 村長の給料は 15 万キープと少ないが、村長はよく働いてくれる。村長の職場を作ってほしい。 |
| 3)環境への配慮                           | 木を切った分だけ植林をする。                       | 天候の変化の悪化を防ぐ。川の水の減少は木の減少による。                   |

**地図**

作成した地図(右参照)の提示のみならず、以下のような村の基礎情報も発表した。

村の人口:497 人(うち女性 257 人)

1-5 歳:5 人(うち女児 2 人)

6-18 歳:未調査

19-45 歳:144 人(うち女性 121 人)

46-60 歳:62 人(うち女性 32 人)

村の世帯数:113



結果分析 自然、経済、文化、幸福の各領域からインタビューを通して重要であると捉えた内容を3点選出し、「知恵の箱」を作成した。(カム郡でのみ実施)  
例：ヒン村の「知恵の箱」



|      |                                                                                                                                                                                             |
|------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|      | <div data-bbox="331 235 1437 1133"> </div>                                                                                                                                                  |
| 結果発表 | <p data-bbox="311 1176 1465 1261">作成したマトリックスを使用して調査結果を発表した。村の現状を自然、経済、文化、幸福の視点からプレゼンテーションを行った。</p> <div data-bbox="308 1274 967 1816"> </div> <p data-bbox="311 1848 539 1883">写真：地図の発表</p> |



写真：「自然」の発表



写真：「経済」の発表

フ  
イ  
ー  
ド  
バ  
ッ  
ク

村人から発表内容のフィードバックを受ける。発表内容に誤りがあればそれを訂正してもらい、なければ感想を述べてもらった。ヒン村では、村人に「知恵の箱」で生徒から挙げられた3点のうちどれが生活に最も重要かを挙手してもらい、村で重要視されているものを明らかにした。



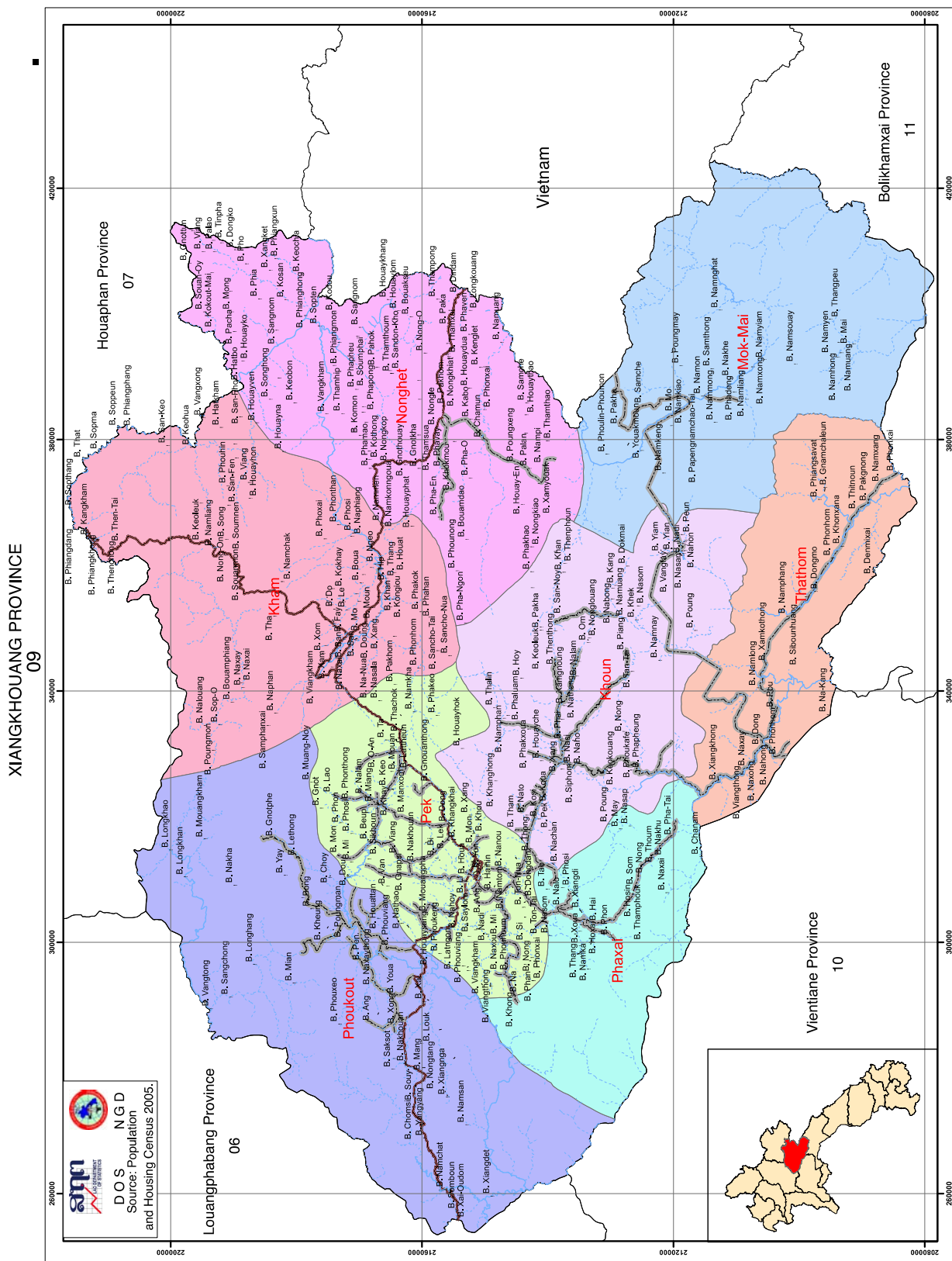
写真：村人がフィードバックを述べる

調査チームのメンバー

| 名前                                                                                                                     | 役職                                                                                       |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------|
| ソンバット・ソンポン<br>Sombath Somphone                                                                                         | PADETC 代表                                                                                |
| カンプイ・サイタラット<br>Khamphoui Saythalat                                                                                     | PADETC 職員<br>(シニアマネージャー)                                                                 |
| ボワチャン・タナヴァン<br>Bouvachan Thanavong                                                                                     | PADETC 職員<br>(カリキュラム開発チームスタッフ)                                                           |
| パンタナ・アルンサワン<br>Pantana Aloumsavath                                                                                     | PADETC 職員<br>(映像製作チームスタッフ)                                                               |
| コラカー・ブアンダーフン<br>Kolaka Bouanedaheuang                                                                                  | PADETC 職員<br>(SOUANMAI-LAO センター長)                                                        |
| センマニー・ボンナラット<br>Sengmany Vongnalath                                                                                    | PADETC 職員<br>(SOUANMAI-LAO トレーナー)                                                        |
| アヌレック・ドウアンダラ<br>Anoulek Duangdala                                                                                      | PADETC 職員<br>(映像製作チームスタッフ)                                                               |
| チャンタポン・ドンカンチャン<br>Chanthaphon Duangkhamchan                                                                            | PADETC インターン<br>(映像製作チームスタッフ)                                                            |
| サイソンポン・ファイパディー<br>Xaysomphone Phaypadith                                                                               | PADETC 職員<br>(秘書/ファシリテータ)                                                                |
| 曽我 幸代<br>Sachiyo Soga                                                                                                  | 聖心女子大学大学院生                                                                               |
| 斉藤 美貴<br>Miki Saito                                                                                                    | 聖心女子大学大学院生                                                                               |
| 下里 祐美子<br>Yumiko Shimozato                                                                                             | 聖心女子大学学部生                                                                                |
| ユースボランティア 32 名                                                                                                         | ボンサワン高等学校に属する 1・2 年生<br>(男子 16 名、女子 16 名)<br>カム郡でのフィールド調査参加生徒数 25 名<br>(男子 13 名、女子 12 名) |
| シサヴァン・ボンパクディー<br>(Khansysavanh Phongphakdy)<br>ソンペット・インタボン<br>(Sonphet Inthavong)<br>ソウサディー・シソポン<br>(Sousady Sysophon) | ボンサワン高等学校(ユネスコスクール)教諭<br>3 名<br>(Phon Savanh Upper Secondary School)                     |



## シェンクワン県の地図



出典) Lao Department of Statistics. *Population and Housing Census*. 2005.

## 調査結果の分析

### シェンクワン県の現状

前章で示した通り、シェンクワン県での調査では、同県のポンサワン Phonsavan 高校に通う生徒 32 名が合計 2 郡 6 村（ペック郡ナオ村・ラッドゴーン村、カム郡ロンピュー村・ナパ村・ヒン村・プームワン村）で自然、経済、文化、幸福について村人にインタビューを行った。インタビューで得たデータは毎回、生徒(ユースボランティア)によって整理され分析された。また生徒は村人を対象にプレゼンテーションを行い、村人からフィードバックを受けたり、村が抱える問題の解決策について大人も子どもも一緒になって検討したりした。

本章では、生徒が行った各村での聞き取り調査とその結果分析をふまえ、より広い視点から本調査全体を通しての分析を試みる。まず、以下に持続可能性という切り口からシェンクワン県の現状についての分析を行う。なお、ここで扱う分析のデータは、生徒が 6 カ村で行った聞き取り調査や結果報告の内容から得ている。

シェンクワン県の村々では、農業を中心とする自給自足の暮らしが営まれている。そこでのウェルビーイング（善き生き方／生活）の特徴としては、次の 4 点が挙げられる。1 点目に村の人々にはそれぞれ信仰があること、2 点目に民族間の調和があること、3 点目にコミュニティの結束が強く、村人はその結束に支えられて生活していること、4 点目に伝統文化が守られていることである。

その反面、村のウェルビーイングを阻害する要因も見られる。第一に、ゴミの問題である。川にゴミなどを捨てる人が多く、川の水質汚濁が進行している。村の人々は川の水を利用して農作業や家畜を育てているため、川の汚染による農作物への悪影響が懸念される。次に鉱物採掘にかかわる問題がある。県内からは金を始めとする天然鉱物が採掘でき、その際に使用される薬物によって人体に被害が出ているだけではなく、水不足や土壌汚染、川の汚染の被害が起きている。大量の水が採掘のために使用され、それに伴って地下水が掘り起こされる。また薬物による土壌汚染、そして川の汚染とその連鎖は人々の生活を苦しめている。さらに外国企業の参入に伴う被害も起きている。近年ベトナムなどの外国企業が村に介入し、輸出用のとうもろこしの栽培を展開している。村人はこれまで主に自給用の有機野菜や米を栽培していたが、とうもろこしを栽培し始めてから、大量の化学肥料を使用するようになり、土壌の劣化や水質の悪化等の影響が出ている。それに伴い、作物が育たなくなり、村の貧困状態を加速する要因になっている。また人口増加に伴う森林破壊や外来種の動植物による作物への被害が頻繁に起こっている。文化的な側面では、先進諸国からの影響により、村の伝統文化の衰退が進行していることも指摘されてよい。

以上のようなシェンクワン県の持続可能性と持続不可能性に関する諸問題をまとめて図示したのが、図 1(次項参照)である。緑色が自然、青色が経済、紫色が文化、赤色が幸福、オレンジ色と三角形は、村以外で発生している問題が村人の生活に悪影響を与えている状況を示唆している。丸い形は地域の持続可能性を、四角い形は村の持続不可能性を示して



いる。丸い形は村のウェルビーイングへとつながり、四角い形は村の貧困状態へとつながる現実や、将来的に貧困状態へとつながる可能性を表している。なお、ここで言う「貧困」とは、アマルティア・センが定義する「剥奪」“deprivation”、すなわち基礎的なケイパビリティが奪われている(deprived)状態を意味している<sup>1</sup>。単に飢餓の状態を表すだけでなく、人々の欲求が満たされない状態も「貧困状態」と解釈し、シェンクワン県には現在、持続可能な生活への流れと持続不可能な生活への流れが拮抗していることがわかる。

---

<sup>1</sup> アマルティア・セン著、石塚雅彦訳(2000)『自由と経済開発』日本経済新聞出版社

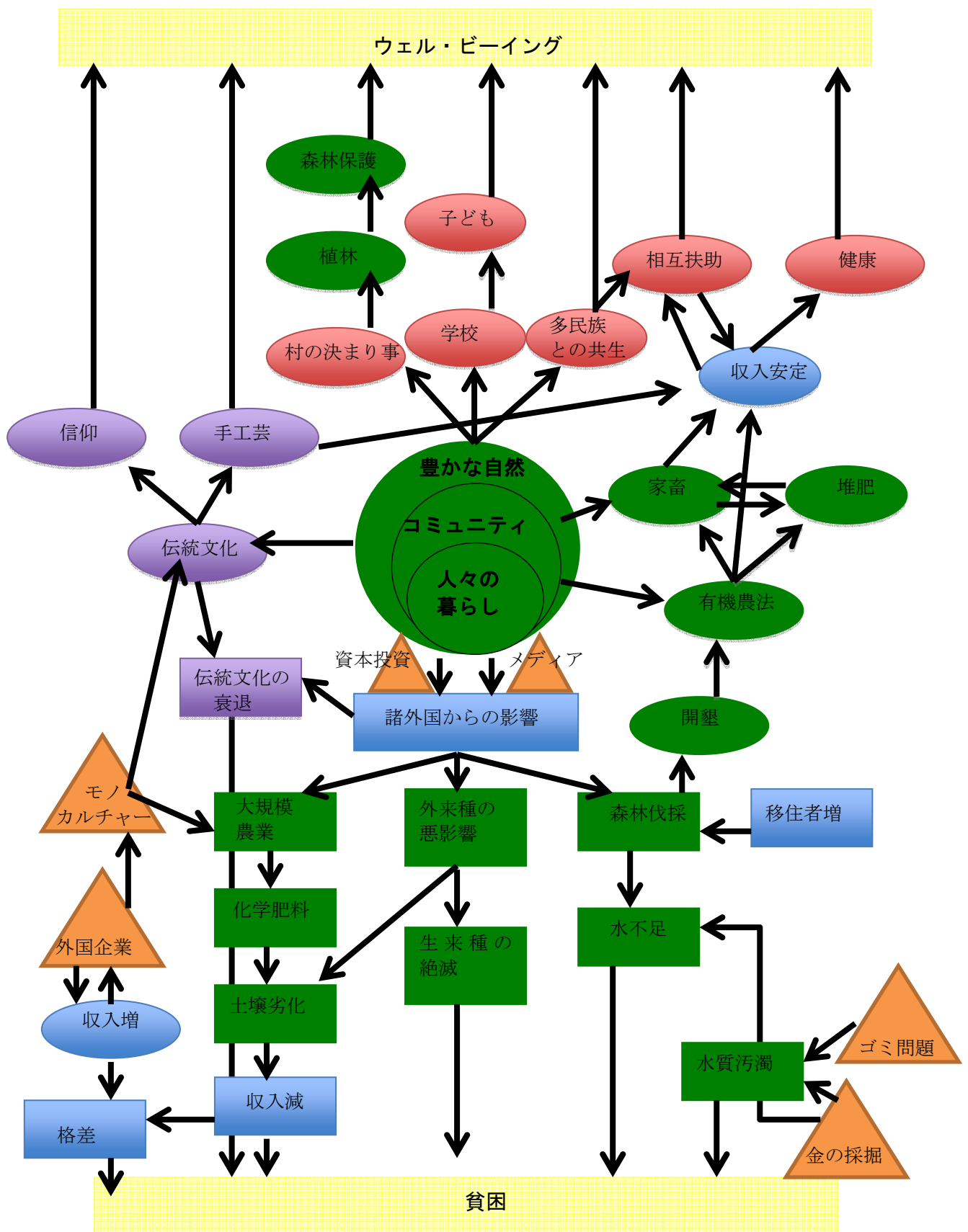


図1 シェンクワン県の現状  
\*生徒らが行ったインタビューに基づき図を作成

## 調査を通じて生徒が学んだこと

フィールド調査に参加した生徒たちは調査の主体を担うことで何を学んだのであろう。もちろん短期間の学びであるがために技能が一定して向上したと必ずしも言える訳ではないが、生徒たちの調査期間中の前向きの姿勢や学習意欲から判断して相当集中力をもって必要なことを学びとっていたというのが筆者らの実感である。興味深いことに、その技能のいくつかは ESD の国際実施計画(IIS)で強調されている「高次の思考 (Higher-order thinking)」スキルと重なる<sup>2</sup>。以下にその主たる6の技能について述べる。

まず、創造的思考である。生徒らは自分たちでインタビューを行うにあたって、生徒が知りたいと思っている情報を聞くためにどのような質問をするかを考えなければならなかった。また、準備した質問をどのような順番で聞くべきか等、質問項目の内容とともにインタビューのプロセスについても思考力を駆使していた。

次に批判的思考が挙げられる。インタビューで収集したデータを整理・分析・考察し、まとめるためには批判的に物事を検討する力が求められる。特に「知恵の箱」を作成する際は、単に4側面の事象のつながりについて考えるだけでなく、批判的に分析することが求められていた。ある村では、村人の多くが収入向上のために輸出用のとうもろこし栽培を行い、村の経済を支えていることが判明した。しかし同時に環境の側面では、とうもろこし栽培をすることによって土壌劣化という現実にも直面するようになった。そしてとうもろこし以外の作物も不作になり、家計の収入減少という問題に直面している。単に各側面の現状について理解するだけでなく、4つの側面の事象を関連づけて批判的に分析することが求められていたのである。実際には、生徒が日常生活のなかで批判的思考やシステム思考を駆使するまでには時間がかかりそうだが、今回の調査を通じて新たな視点から物事をとらえ、さらに分析する力を育んでいくことへの取っ掛かりをつかむことができたと言えよう。

3つめに、プレゼンテーション能力もこのワークショップを通じて向上した。生徒は村の人々に調査結果を発表するために得た情報を的確に、かつ明確に伝えることが求められた。模造紙に必要最低限の情報を書き、それを使用しながらプレゼンテーションを進めた。当初、生徒は人前で話すことに恥ずかしさを感じていたが、徐々に自信を持って大きな声でプレゼンテーションするようになっていた。

4つめに、コミュニケーション能力の向上もみられた。インタビューは必ずしも生徒が用意した質問通りに進まないこともあり、場面に応じて、臨機応変に対応することが求められた。1回目の調査を終えた際、インフォーマントに質問内容が理解してもらえず、期待通りの回答が得られずに分析で大変な思いをしたという生徒の感想や反省が多々あった。その後インタビューや質問法についてのワークショップを行い、2度目の調査に臨んだ際には、インタビュー内容やインフォーマントによって質問を臨機応変に変えることができ、得たい情報が得られたという感想が多く挙がっていた。このことから参加した生徒のコ

---

<sup>2</sup> UNESCO. *UNDESD International Implementation Scheme*. 2005. p.31.

コミュニケーション能力は短期的だが集中的に育てられたと言える。

5 つめに、生徒間のよい協力体制も指摘されてよい。ワークショップやフィールド調査では、グループワークを中心に活動が展開されていたことから、生徒間でのチームワークが重要となった。1 回目の調査後のリフレクション(反省)の時間では、チームワークが上手くいかなかったという反省も少なくなかった。最初の調査を経て生徒たちはチーム一丸となって取り組むことの重要性も身をもって感じたようである。実際に 1 回目の調査では質問者以外の生徒は違う方向を向いていたり、携帯電話を操作したりしている生徒も見受けられたが、2 回目の調査では、質問者以外の生徒もインタビュー内容をノートに書き込んだり、真剣にインフォーマントの話を聞く態度をとっており、協力体制がみられた。また 2 回目の発表準備の際は、皆で協力し合いながらインタビューのまとめや分析を進め、地図の作成グループは互いに協力し合いながら効率のよい地図の描き方について話し合っていた。

最後に、複眼的思考も育まれたことを強調したい。インタビューを通して生徒は、村の人々が抱える問題に直面した。県の中心部で生まれ育ったいわゆる「都会育ち」の生徒たちにとって村人の生活を知る機会はいくつにもなかったと思われる。したがって 1 回目のインタビュー準備の際に、村人の生活と生徒自身の生活の共通点を見出すことが上手くできず、村の生活に即した質問内容を考えることに困難を感じている様子の生徒が多かった。しかし、インタビューを重ねることによって村人の生活が生徒の生活を支えているということ、反対に生徒らが水の無駄遣いやゴミのポイ捨て等を行うことで、村人の生活に悪影響をもたらす危険性があることが明らかになってきた。生徒らはそのような事実と直面するにつれて「もし私が村の人たちの立場だったら、この状況をどのように感じているだろう」とか「もし私が村の人だったら、どんなことを感じているだろう。」という思考を働かせるようになった。生徒が持つ視点から村の状況を分析するだけでなく、村人の視点やその他の視点から物事をとらえることができるようになったと言える。

### 調査に見られる学びの構造

ESD では、学びの結果よりもプロセスに焦点が置かれていると言われる。しかしながら、プロセスを重視した学びとはどのような実践であるのか十分に検討されてこなかったように思われる。教育の質を大切にするには学びの健全なプロセスが重んじられるような構成と構造が必要であるとの認識のもと、本調査が大事にした 6 つの要点について次にまとめたい。

第 1 に、生徒の経験的な学びを中心にプログラムを構成することである。ラオスにおいて通常の学校で行われる教科書中心の学びではなく、現地調査では生徒が学びの主体となる体験的・経験的な学びが展開されていた。ある生徒は次のように経験的な学びの利点について述べている。「学校の勉強も大切なことは分かっているけれど、今回の活動は学校の学びとは大きく異なっています。自分で体験できることが一番大きいです。学校の勉強も大切なことは分かっているけれど、こうやって自分で行うことで教科書を暗記するよりも

もっと早く覚えられるし、理解も早いし、こっちの方が楽しいです。」生徒自身が主体性を持ち、経験的な学びを展開することは、学びのプロセスに重点を置く ESD の学習論に欠くことのできない点であると考えられる。

第2に、リフレクションの時間を確保することである。ワークショップでは活動の節目にリフレクションが設けられていた。その時間を通して生徒たちは自分のこれまでの活動を落ち着いて振り返ることができた。例えば1回目のインタビュー後のリフレクションを通して生徒は各々のよくできたと思う点と改善点について振り返った。どのようなことが上手いき、逆にどのようなことが上手いかなかったのか、自ら分析を行った。実際に2度目のインタビューでは、大半の質問の質が改善されていた。

第3に、試行錯誤できる構造を組むことである。先の生徒の回答にもあったように、調査では学習者主体の学びが展開され、通常の教室での学びのように教師に指示された内容を学ぶような学習は1つもない。したがって生徒自身が学習のプロセスを理解する必要があった。リフレクションをもつことによって、生徒の中に解決すべき問題が明確に表れ、その問題解決を次のインタビュー等で試みる機会が設けられていた。失敗した内容があれば次の機会にそれを修正し、もう一度挑戦する機会が保証されていたのである。また、1度目と2度目の調査方法を振り返ったり、インタビュー時に直面した問題を解決したり、課題を発見したり、生徒たちは試行錯誤の結果、上手くいった場合はどうしてそれが上手くできたか、改善が必要だと思われる点は何かといった自己対話を繰り返しながら少しずつ適切な調査法や分析法を会得していた。

第4に、＜つながり＞に気づかせるような工夫を凝らすことである。先にも述べたように調査に参加した生徒の多くは県の中心街からの出身であり、生徒の生活と村人の生活の共通点やつながりを見つけることが当初は困難なように見受けられた。しかしインタビューを通して生徒は村が直面している問題について知るようになり、その問題と自身の日常生活につながりがあり、問題を他人事ではなく、当事者意識を持ってとらえることができていた。また、コンパスの4側面をつなげるアクティビティにおいても相互の関連性について知ることができていた。

第5に、オーナーシップや責任感の意識を育むことである。村の現状を知り、またその状況と生徒の生活につながりがあることを発見したことにより、生徒に責任感が生まれてきた。ある生徒は「私たちには村の問題を解決する必要がある、同時に村の人々が持っている間違った考えも正さないとはいけません。」と述べ、また「今後も村の人々と一緒に活動していく心の準備ができています。新たな知識や技能を村の人に広め、同時に私たちは村の人々からも学びたいです。豊かな自然とともにある村の人々の生活を保持しながら村の発展に貢献していきたいと考えています。(中略)私たちはこの調査を通して村の人々の生活様式を理解し、村の問題について知り、そして解決方法も知ることができました。」という感想もみられる。こうした回答からもわかるように、調査を通じてシェンクワン県の将来を担うのは村の大人ではなく自分たちであり、自らが問題解決のために行動を起こす必要がある、という意識が若者に芽生えた意義は大きい。さらに日常生活に対する意識も変化

したことも強調されてよい。「環境保護にこれから努めていきたいので、ゴミのポイ捨てを止めようと思います。」という意見も挙がっていた。ラオスでは大人も子どもも道端に平気でお菓子の包み紙などを捨て、それが習慣のように行われているところもある。したがって、調査でゴミのポイ捨てに対する認識が変わったことは評価できる点であり、次の段階としての行動変容まで起こることを期待したい。

最後に、エンパワメントがプログラムの重要な要素として捉えることである。生徒はワークショップで、自己内省や試行錯誤を繰り返すことによって、自分で自分をエンパワーすることができるようになった。新たな自分を発見し、インタビューの改善や評価を自分自身で試みていた。このような一連の学びを通して、生徒たちは自尊感情を得ることの充足感も会得していたように見受けられる。

本調査を通じてエンパワメントされたのは生徒たちだけではない。村の大人も同時にエンパワメントされていた。インタビューを通して何が村の生活に大切か、何に幸福を感じるか、どうして村で悪い状態が起きているのか等、普段の生活のなかでは考える機会の少ない事柄を尋ねられることにより、村人も新たな視点から村の現状や生活に目を向ける機会が持てるようになっていた。ある村人は「子どもたちが村にきてこのような調査をしてくれてうれしいです。村の現状について改めて考えることができましたし、このような活動をこれからも続けて、子どもたちと一緒に活動していきたいです。また、うちの村の子どもたちを集めてこのような調査を行わせたいです。」と語った。自分たちの暮らしの現状を客観的に分析する機会を得たことにより、村の問題について新たな意識を持って取り組む意欲が見られた村民は少なくない。子どもたちと共に村の状況を改善しなければいけないという意識が芽生えていた。

### ＜ESD 広域モデル＞構築に向けた今後の課題

＜ESD 広域モデル＞構築に向けて以上のような成果、特に学習面での成果が見られたものの、その一方で調査を通していくつかの課題も浮き彫りにされた。ここでは主な課題について5点述べたい。

第1に、人材育成の問題が挙げられる。調査を通してワークショップのファシリテータを養成するトレーナーの質も重要であることが明らかになった。ワークショップでは生徒の学びを重視するため、ファシリテータから生徒に何かを教え示すことは一切なかった。したがって、ファシリテータには生徒を学びのプロセスに導いていく力量が問われる。今回のワークショップは「コンパス」メソッドを使用して展開された。ファシリテータは同メソッドの理念や考え方を十分に理解し、その上でワークショップを組み立てることが求められていたが、場面によっては相当な困惑を感じていたようだった。生徒が主体的に参加できるように促されるプログラムであること、また、自分が携わる調査をイメージできるようなトレーニングがあること、質問項目作成やインタビューの練習に十分な時間が割かれていることなど、生徒が調査に積極的に参加しようという意識を持たせる事前プログラムを設けることもファシリテータの重要な役目である。

第2に、「コンパス」メソッドの活用方法について考慮する必要がある。ラオスの生徒やファシリテータには今回のメソッドは斬新で、それらを身につけて定着させるまでに時間がかかることが分かった。先にも述べたように「知恵の箱」を作成するためには自然・経済・文化・幸福の4側面間でのつながりを見出すことや、システム思考を用いて考えることが求められる。しかし、物事が多様につながり合っているという視点を持って分析を行うことはファシリテータにとっても困難を伴ったため、上手く生徒を導くことができなかったように見受けられた。

「システィナビリティ・アジア」のR・スティール氏も述べていたように、糸を使って可視化することがコンパスの最終目標ではない。要は、物事をシステムの的にとらえるようになることや物事の見つけられるようになることであるため、糸というツールを使用しなくてもよいのである。ラオスの文化的文脈に沿った形で、例えば、なじみのある色や形を駆使しながらシェンクワン県の現状を可視化したり図示したりすることで、システム思考やつながりを見出す力を育むことが検討に値すると言える。

第3に、継続的な学びの場の創出が求められる。大人が定期的に学びの機会を設け、生徒に高い意識を保たせることは重要である。単発的な学びでは生徒はその学びを「よい経験」としか捉えないだろう。実際に、多くの生徒はこのワークショップを「よい経験になった」と答えている。＜ESD 広域モデル＞構築に向けた課題のひとつは、生徒の経験的な学びを行動変容へとつなげていくことであり、プログラム自体の持続可能性が重要となる。

第4に、「変化の担い手としての子ども(children as change agent)」としての可能性を最大限に育むことである。これまでの学校教育では子どもは大人の管理の対象として捉えられ、大人が教えて子どもが習うというような認識が少なからず存在していた。しかし、そのようなベクトルを反転させた学習活動が本調査であった。これまで述べたように、フィールド調査では生徒の学習によって周りの大人も影響され、いつしか共に学んでいるという場面は数多くあり、エンパワメントされた村人も多くいる。また、それにとどまらず、ポンサワン高校のカーンシサヴァン・ポンパクディー (Khansysavanh Phongphakdy) 教諭は、ワークショップを通じて次のことを生徒から学んだと述べている。「生徒は問題や質問があったときによく私に聞きに来ます。でも私もそのことについてわからなかったので、質問に答えるために私自身もいろいろと情報を集めたり、勉強したりしないといけませんでした。そういうきっかけで私の知識や能力を高めることができたように思います。生徒たちからプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力、話し方について学ぶこともできました。」カーン氏の言葉からもわかるように、生徒が調査を行うことによってコミュニティの大人も意識変容を遂げ、生徒と協働することを楽しんでもいる。生徒を持続可能なコミュニティ開発の中心に据えることにより、地域の大人たちの潜在的な可能性も開かれるのではないだろうか。

最後に、＜ESD 広域モデル＞を構築するには以下の五者の協力体制も求められていることを強調して本章のまとめとしたい。

1) 持続可能な未来への「変化の担い手としての子ども」による学びを中心に置き、2)

生徒とコミュニティの大人の学び合い、3) 学校外での生徒の学びと学校教育の連携、4) 生徒の活動への県教育事務所や中央政府の教育省の支援、そして5) NGO/NPO からの支援、そしてこれら5者の連携を強固にすることが<ESD 広域モデル>構築の基盤となる。

生徒は今回のワークショップのように、アクション・リサーチの担い手としてフィールドに赴き、村の現状の情報収集をする。そして村の人と共にコミュニティが抱えている問題についての解決方法や村の継承すべき文化を保持する方法等について検討する。また、地域の課題に関しては学校での調べ学習を通して他国(地域)で同様の事例がないか検索したり、問題解決のための情報収集をしたり、それらの情報をまとめたりして発表することができる。

コミュニティは、生徒との学びを通して新たな視点から村の現状について考える機会が与えられる。これによって何が村にとって大切か、どのような生活が村人を幸せにするのかを考える機会も生まれる。また、生徒とともに現在の生活について批判的に分析することもできる。これまでは村に問題があっても解決法がわからずそのままにしていたことも、生徒の新鮮な発想とともに問題解決に導かれることもあるだろう。

このような地域密着型の問題解決に向けた学びを展開する「持続可能な地域センター」としての機能も学校に期待することができるだろう。例えば、ラオスには全体のカリキュラムの20%は各学校の裁量で学びを展開することが定められているため、その時間を活用し、教科の枠を超えた学びを地域と一体となって展開することができる。特に、シェンクワン県に5校あるユネスコスクールは、こうした新たな教育運動をリードしていくモデル校の役割を担い得ると言えよう。

これらの4者間の関係性づくりや人材や財政全体の調整を取りもつ NGO 等の役割もこの上なく重要である。今回の調査では PADETC が聖心女子大学の大学院生を中心としたチームと協働することにより、プログラム全体のコーディネーションを行い、多くの成果をもたらしたと言える。

さらに、県教育事務所並びに教育省の理解及び適切なリソースの提供が求められる。ESD を推進するためには、まず各県の教育事務所レベルで ESD についての理解や学校とコミュニティの連携の重要性、そして学校での学びの刷新についての理解が求められる。また、学校及びコミュニティの代表がコンソーシアムを組む形で、<ESD 広域モデル>の構築を後押ししていく役割も重要である。同時に、教育省レベルでの ESD 推進に向けた政策決定を行うことによって、ラオスでの<ESD 広域モデル>の強固な基盤構築ができると言えるだろう。



## むすびにかえて 「学びのエコロジー」へ

国際協力の仕事に従事していると、次のような発言をときおり耳にする。それは、発展途上国での開発の仕事に携わっていると、先進諸国が失ったものにしばしば気づかされるという主旨の発言である。例えば、ゆったりとした時間、家族のつながり、地域社会の相互扶助、その土地に根ざしてきた古いしきたりや伝統文化……。たしかに、これらは先進国と称される国においても、かつては当たり前のものであった。実際、途上国でこうした懐かしいものの価値を再発見し、当地で絆が失われないように尽力する先進国の人々も珍しくない。

この度、ラオスで活動してみて、そうした絆は途上国においても失われつつあるのではないかと思われた。その喪失は、首都のビエンチャンだけでなく、地方においても感じられたのだ。本文でも述べたように、調査地のシェンクワン県は飢餓などの問題はないものの、戦争による傷跡もいまだに残り、貧困問題を長く抱えてきた地域である。しかし、一方で、シェンクワン県は金などの鉱物資源、森や川、鉱泉などの自然資源が豊富にあり、外国からの資本が流れ込んでおり、伝統的な生活様式の一部が崩されている。

こうしたグローバリゼーションの現れは、テレビやインターネットからの情報に敏感な若者のライフスタイルにも容易に見てとれる。調査にユースボランティアとして参加した若者達もカラフルなシャツを身にまとい、携帯電話を使いこなし、K-POPにも通じていた、おしゃれな中高生であった。彼（女）らは、田舎といえども、街の出身であり、山中の村人とは異なる生活習慣や価値観をもっていた。当然ながら、そうした彼らと、戦争をくぐり抜け、細々と貧困生活を続けてきた世代の村人との価値観の相違は歴然としており、今回のアクション・リサーチを通して出会った両者は少なからぬ「他者」どうしであったと言える。

しかし、幾度かのワークショップを通して、両者の距離になんらかの変化が起きたようだ。若者に質問される村人は実に嬉しそうな表情を浮かべ、村人を前に調査結果を報告する若者は誇らしげでもあった。ある村の村長は「インタビューされることを誇りに思うし、質問されて分からなかったことをこれから勉強していきたい」と語っていた。また、インタビューを行ったある高校生は「考えながら質問することは難しいけど楽しい。肌で感じた村の様子や親切にしてもらったことを忘れないで日常生活に活かしていきたい」と述べていた。

調査を通して縮まったかに見える「距離」は街と村という異空間の間や若者と大人というジェネレーションの間だけではない。学校とコミュニティとの距離、現代的な知識体系と伝統的なライフ・スキルとの距離、計画的な学びとインシデンタルな学びとの距離……。これらひとつ一つが会う場がプロジェクトを通してもたらされ、新たな学びの文脈の中へと若者も村人も織り込まれていった。

一般的に学校は時間も空間も外部世界と隔てられており、社会の中でも特殊な時空であ

る。ほぼ毎日一定の時間帯に子どもを家庭という自然発生的な時空から引き離し、より計画的で意図的な時空で育て上げることにより、家庭よりもはるかに巨大な社会システムに対応できるように国民や市民を育ててきた。しかし、それは一方で、世代間の対話を希薄にし、学校知と地域で伝承されてきた伝統知とを差別化し、もともと統合されていた知の対象を専門分化してきたのではないだろうか。

調査を終えてこれまでのプロセスをふり返れば、今回の事業は、学校教育を中心に構築されてきた要素還元的ともいえる〈教育世界〉というものをラディカルに問い直す試みであったのではないかと思えてきた。大人から子どもの方へ、知識習得を目的とした教室から探求するプロセスを楽しむフィールドの方へ、我慢して記憶していく勉強から問題を発見しワクワクするような学びの方へと、教育の中心点を少しずつシフトさせることによって、ほのかに浮かび上がってきた世界、それが上記の「新たな学びの文脈」である。これを私たちは「学びのエコロジー」と呼ぶことにし、本報告書の扉図（裏表紙）のように表してみた。これは、やや大袈裟に言えば、近代の教育の在り方そのものへの問いかけの図であると言ってもよい。

シェンクワン県でいわば実験的に試みた教育活動から見えてきた世界を表したのが上記の図であるが、それは新たな学びの在り方を示唆することを意識して創られた図でもある。一見、曼荼羅のようなこの図に内包された世界から生まれる教育や学習とはどのようなものか、シェンクワン県での経験しかない私たちには何とも答えがたい問いであるが、少なくともそれは、近代教育によって形成されてきた「より強く、より速く、より効率的に」というような価値観とは異なる、人間の身の丈に合った教育であると言えよう。

そもそも ESD とは、ホリスティックな教育の営みであることは「国際実施計画」等で当初より強調されてきたが、その具体的な在り方はなかなか示されてこなかった。しかし、今回、その「在り方」がなんとなしに見えてきた気がする。今後の課題は、その芽をじっくりと育くみ、より多くの人々と共有できるような言葉やイメージで分かりやすく示していくことと言えよう。その芽がいつか開花するのを見とどけるまで、これからも微力ながら努力をつづけていく所存である。

「発展途上国における〈ESD 広域モデル〉の構築に向けた基礎調査  
及び視聴覚教材の作成・普及」事業 企画提案者(総括)／聖心女子大学准教授  
永田佳之

# 資料

|      |                     |    |
|------|---------------------|----|
| 資料 1 | 調査結果のマトリクス          | 35 |
| 資料 2 | 技術移転のための調査及び招聘プログラム | 51 |
|      | 1) タイ調査報告           | 53 |
|      | 2) インド調査報告          | 69 |
| 資料 3 | コンパス・スクール（翻訳）       | 75 |



## 調査結果のマトリクス

2 郡 6 カ村で行った調査の結果は以下の通りである。

## 1) ペック郡ナオ村

調査日：2011 年 2 月 23 日

## 自然

| WHAT    | HOW                                                                                                                                                                                                 | WHY                                                                                                                                                   |
|---------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 森、山、観光地 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・森：パーペックは国営で、広大である。村人が植林を行う。</li> <li>・竹林：生活のため、村の人自身が植える。</li> <li>・プーボートンの山：高くて広大であり、はげ山である。金が採掘できる池があるため、ボートンと呼ばれている。</li> <li>・観光地：ジャール平原がある。</li> </ul> | <p>人々の生活保護のために行う。</p> <p>水不足にならないように植林を行う。日常生活のために植林を行う。自然に生み出された山であるから、植林を行う。村の人々から尊敬されている山である。</p> <p>プーボートンの山では金が採掘される。</p> <p>ジャール平原は昔の遺産である。</p> |

## 経済

| WHAT                                       | HOW                                                        | WHY                                                                                                        |
|--------------------------------------------|------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 農業<br>動物飼育(ブタ、ウシ、バ<br>ッファロー、ヤギ、トリ)<br>家庭菜園 | <p>主にバッファローを放牧する。</p> <p>群れで飼育する。</p> <p>畑はあまりきれいではない。</p> | <p>豊かな牧草地である。</p> <p>広大な土地がある。</p> <p>動物の飼育に適切である。</p> <p>動物が盗まれることがない。</p> <p>水不足である。</p>                 |
| 小売店                                        | 安くたくさん仕入れ、販売する。                                            | <p>交通が便利である。</p> <p>村の人々のニーズを満たすため。</p> <p>時間節約のため。</p>                                                    |
| 工芸品<br>織物<br>竹細工（もち米入れ）                    | <p>生産した分だけ収入を得ている。</p> <p>竹細工を生産し、収入を得ている。</p>             | <p>織った分だけ販売する方がより収入を得られる。</p> <p>大きな市場やどの市場でも商売することができる。</p> <p>村の人が竹を植えているから節約になる。村に生息している竹を使用して生産する。</p> |

## 文化

| WHAT  | HOW                                                                                                                           | WHY                                            |
|-------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------|
| 文化、習慣 | 祭りをする。<br>昔の祭りの中では現在、4つの祭りが積極的に行われる。<br>ブンパペー、ブンソンカン、ブンカヴァンサー、トッパサー、<br>ブンバシー、ブンホーカオ、パダプディン、ブンホーカオサライ、<br>ブンオーパンサー、ブンカオクァカンハー | 仏教の教えに従って様々な祭りが開催されている。                        |
| 宗教    | 村の民族（ラオ、モン、ラオルン）：それぞれちがう宗教を信仰する。<br>モン：モン族は霊を信仰しているが、霊を信仰している人は少ない。<br>ラオルン：仏教を信仰する。                                          | 多民族：互いに調和や尊重し合い、共存している。互いに丁寧な言葉を使う。会うたびに挨拶をする。 |
| 方言、言語 | シェンクワン弁が使用されており、特徴的な言語として扱われている。                                                                                              | シェンクワン弁を使用してコミュニケーションをとりあう。互いに理解し合っている。        |

## 幸福

| WHAT              | HOW                                                       | WHY                                                                                                                     |
|-------------------|-----------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 住居、食料<br>生活<br>調和 | 県の中心部に近く便利である。<br>交通機関が便利である。<br>人々の調和がよく、互いに尊重し合って生きている。 | 豊かな山、緑に囲まれているため、空気も新鮮である。<br>都会に近く、市場や病院もあるので便利である。<br>自然に頼った生活を営んでいる。<br>自給自足の生活を営んでいる。<br>どの家族もとても幸せであり、隣人と仲良く暮らしている。 |

## 地図

### ＜森林におけるルール＞

1. 森林の木を伐採してはいけない。
2. このルールを守れない人は一本あたり 50 万キープ課せられる。  
 また、木を伐採した人は、伐採した分植林しなければならない。
3. 再犯を犯した際、課金は倍になる。
4. 森を燃やしてはいけない。
5. ルールを守れない人に対し、1 ha あたり 150 万キープ課せられる。  
 また、植林をしなければならない。
6. 木を伐採したいときは、一本あたり 500 キープ



支払い、そして植林をする。  
(自然林のみ切ることが出来る。)

## 2) ペック郡ラッドゴーン村

調査日：2011 年 2 月 23 日

### 自然

キン川：

- ・川は村の周辺に位置している。
- ・キン川と呼ばれる理由：昔からキンと呼ばれていたから。

コー川：

- ・長い川である。
- ・ラッドゴーン村を囲んで流れており、キン川に接して流れている。
- ・コー川はグン川に流れ出る。
- ・コー川が生まれた理由：パーサイ郡のコー川から流れてきたため、コー川と呼ばれる。

ペック森：

- ・あまり大きな森ではない。
- ・自然に発生した森である。
- ・国営林は深い森であり、多くの木が自然に生息している。木を切ってはいけない。
- ・たくさん木があり、森を大切にしていきたいという意思が村人にある。

土：

- ・村の土の特徴は、土壌が豊かであることである。

空気：

- ・昔に比べ、悪化している。
- ・天気の変化の原因は、村の人が木を伐採しているからである。

### 経済

農業

動物の飼育：

- ・牛は放牧している。
- ・豚、あひる、にわとりは小屋で飼育している。
- ・収入のために動物を飼っている。

家庭菜園(畑)：

- ・にんにく、野菜、長ネギ、米を育てる。
- ・自給用、副業の収入のために畑仕事を行っている。

工芸品：

- ・竹で作ったイス、ほうきを作っている。
- ・収入向上のために生産する。

織物：

- ・シンは伝統的な服であるため、たくさん生産されている。

商売：

- ・小売店、車の運転手、砂の販売を行っている。

### 文化

手芸品：織物、裁縫、竹で出来たイスが有名である。

舞踊：ケーン(笛)を吹く人が村にいる。吟遊詩人も村にいる。

服：適切な服を着用する。女性は絹や綿で織られたシンをはいている。

宗教：

- ・アニミズム、仏教を信仰している。
- ・アニミズム：ブンキンチャンという祭りが開催される。
- ・仏教：ラオスの正月(4月)と5月の祭りが開催される。

言葉遣い、方言：

- ・シェンクワン弁(「ウ」という発音)が使用されている。

歴史的な場所：

- ・シャール平原、ジャール平原にあるジャー(ツボ)を作る場所、金と銀の仏像が有名である。
- ・寺は村人の信仰の場としている。

## 幸福

1. 何がある？

- ・便利さがある。

2. なぜ

- ・村の開発、生活改善：生活用水が利用できる。家に電気がつながっている。
- ・自然に頼る生活をしている。
- ・乗り物を所有している。

幸せ：

- ・便利な生活をしている。
- ・村には整備された道路、自然、川がある。
- ・村が発展している。
- ・子どもたちが学校に通える。
- ・仕事に就いている。
- ・人々が調和的である。
- ・村が安全である。

不幸せなこと：

- ・村に不足しているもの：病院、市場、水道

## 地図

ラッドゴーン村には、896名187家族が暮らしている。最近村が隣村と併合したことにより、村の境が不明である。

ペックという木が森に多く生息している。





### 3) カム郡プームワン村

調査日：2011 年 2 月

村の歴史：

1. 1978 年村の人が山の麓に移住したため、プームワンと呼ばれるようになった。  
移住当時 40 家族、260 名が村に暮らしていた。当時少数民族は暮らしていなかった。
2. 2 年前から村に移住してくる人が増加する。
3. ホック村から 33 家族が移住する。
4. 現在プームワン村では 89 家族が生活している。  
2 家族がモン族、残りの 87 家族はタイダム族が暮らしている。

村のルール：

1. 国有の川では、魚釣りをしてはいけない。
2. 道具を使用して魚を釣ってもいけない。  
魚釣りをしている所を発見された場合は、法律に従って罰せられる。
3. 化学物質を使用して魚を獲ってはいけない。
4. 川にゴミを捨ててはいけない。
5. 川に生息する資源(魚、かに、エビ、貝)を保護する。

#### 自然

| WHAT | HOW                                                                                                                                                                                         | WHY                                                                                     |
|------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------|
| 土    | 昔の土は肥沃であり、生活や家庭菜園などに問題がなかった。<br>現在田んぼ、畑に問題があり、生活にも悪影響を及ぼしている。                                                                                                                               | ミミズが木を食い荒らしている。<br>用水路が不整備なため、田んぼに十分な水が行き渡っていない。<br>労働力：人力によって稲作を行っているため、機械に比べて米の品質が悪い。 |
| 森    | 昔の森は豊かで、たくさんの植物や動物が生息していた。<br>現在は、村の人々が畑仕事を行うようになり、野生動物や森林が減少傾向にある。<br>ターデン山とプージョンティック山という国営の山があり、絶対に木を伐採してはいけない。2つの山の全面積は 600ha であるが、それらの山で使用できる面積は 11.7ha である。<br>村の人々は分配された土地で農作物を栽培できる。 | 人口増加に伴い農地が必要になり、森林伐採が進行している。<br>庭に生息するミミズが木を浸食するため、生産物の質がよくない。                          |
| 野生動物 | 昔はたくさんの野生動物が生息していた。大型から小型の動物まで生息していた。<br>村人が狩猟の乱伐をしたため、動物が減少傾向にある。<br>ある動物は既に絶滅している。                                                                                                        | 人口が増加したから。                                                                              |

|                   |                                                                                                                          |                                                                        |
|-------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------|
| 村の隣にパーデン山とチク山がある。 | 昔のパーデン山とチク山は深い森であったため、たくさんの木々や動物が生息していた。<br>キノコ類も生息していた。<br>現在のパーデン山もチク山も昔と変わっていない。                                      | パーデン山とチク山は国有の山であるため、豊かな自然が保持されている。<br>国営地以外の土地はたくさんの木が伐採され、昔のような自然はない。 |
| ゲー川、サム川           | 昔は清潔な川であり、石がたくさんあった。<br>大きな川であるため、たくさんの蟹、魚、貝、エビが生息していた。<br>現在川にゴミが捨てられるようになり、水質汚濁が目立っている。<br>昔よりも川の水量が減少しているが、川の水は使用できる。 | 川に生息する動物が減少した原因は、水質汚濁、川の水量の減少、魚の乱発が増加したからである。                          |

### 経済

| WHAT                                                                                | HOW                                                                                                                             | WHY                                                                                                                                                                           |
|-------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 生産可能な面積は11.75ha がある。以下の農業が盛んである<br>・米<br>・とうもろこし<br>・にんにく<br>・スイカ<br>・バナナ<br>・サトウキビ | 畑：<br>6・11 月にかけて畑仕事を行っている。<br>自給用の野菜が余ったら販売している。                                                                                | 稲作：<br>自給用に生産する。米の収穫量が不十分な時期もある。<br>ミミズの悪影響により、生産量が落ちている。<br>村民の知識不足により不作が起きている。<br>ある家族は米を十分に生産・消費できないため、畑仕事を始めている。<br>とうもろこし畑<br>とうもろこしの生産は副業として行っている。<br>堆肥は畑の3分の2を使用している。 |
|                                                                                     | 稲作の問題点：<br>水不足、用水路の不整備、ミミズによる悪影響が非効率的な生産をもたらしている。堆肥の使用にも問題があるのだが、田の全面積の3分の2は堆肥を使用している。                                          |                                                                                                                                                                               |
|                                                                                     | とうもろこし畑：<br>米作りの時期と同時期にとうもろこしを育てる。村の人が消費するとうもろこしと輸出用のとうもろこしを栽培する。肥料の3分の2は堆肥を使用している。<br>とうもろこし栽培には様々な問題があるが、1キロ 2000 キープで販売している。 |                                                                                                                                                                               |
|                                                                                     | にんにく畑：<br>11-2 月を中心に栽培する。にんにくの売価は、時期によって異なる。にんにくは高値で売れるため、栽培する人が多い。にんにく栽培にも問題点はある。にんにく畑の3分の2は堆肥を使用している。                         |                                                                                                                                                                               |

|  |                                                                                                                             |  |
|--|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|
|  | <p>スイカ畑：</p> <p>2・5月を中心にスイカを栽培する。商売のために生産している。水やりが多く、販売までに手間がかかる。品質による値段の差が激しいが、高値で売れる。栽培期間は3ヶ月かかる。スイカ畑の3分の2は堆肥を使用している。</p> |  |
|  | <p>バナナ畑：</p> <p>多くの土地を所有している家族のみ栽培している。バイヤーが直接各家庭に購入に来る。1年間通して生産することができる。一房5000キープで販売する。</p>                                |  |
|  | <p>さとうきび畑：</p> <p>多くの土地を所有している家族が栽培している。バイヤーが直接各家庭に買いに来る。1年間を通して生産することができる。1本1000キープで販売。堆肥を使用して生産している。</p>                  |  |

| WHAT                                                                                                                                                                                                        | HOW  | WHY                                                                                                                                                                            |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>動物の飼育</p> <p>大型動物を飼育する場合</p> <p>牛：水牛よりも牛の方が多く育てられている。販売用に飼育しているが、必要に応じて家庭の食用にもなる。</p> <p>水牛：水牛の飼育はとても難しい。販売用に飼育しているが、必要に応じて家庭の食用にもなる。</p> <p>・小型の動物</p> <p>あひる、にわとりを飼育している。家庭の消費用に飼育している。まれに売ることもある。</p> | (不明) | <p>牛と水牛の飼育：</p> <p>牛は水牛より飼育が楽であるため、牛がよく飼育されている。最近牛のえさとなる草が不足しているため、飼育に悪影響が出ている。牛は販売用として主に飼育している。</p> <p>・小型の動物の飼育</p> <p>あひる、にわとりを家庭で消費するように飼育している。収入を得るために、必要に応じて販売もしている。</p> |

#### 工芸品（経済）

| WHAT                             | HOW                                                               | WHY                                            |
|----------------------------------|-------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------|
| <p>織物</p> <p>シンの刺繍</p> <p>洋裁</p> | <p>織物は副業として行われている。シンの模様をデザインする。洋裁は時間があるときに行われるが、あまり多く行われていない。</p> | <p>収入を得るため。副業。田や畑仕事が忙しくないときに行われる。生活費を補うため。</p> |

#### 文化（タイダム族）

| WHAT                  | HOW                         | WHY                         |
|-----------------------|-----------------------------|-----------------------------|
| <p>服を着る</p> <p>宗教</p> | <p>ブンセンバーンという祭りが行われている。</p> | <p>伝統を守り、タイダムの信仰を守っている。</p> |

|        |                                              |  |
|--------|----------------------------------------------|--|
| マナー、方言 | 服が特徴的である。<br>アニミズムである。<br>正式な書き言葉をもたない民族である。 |  |
|--------|----------------------------------------------|--|

## 幸福

幸福(身体面)：

- ・ 水道、電気が使用できる。道路がある。豊かな生活がある。
- ・ 健康的である。
- ・ 村がきれい。良い生活環境がある。
- ・ 自給自足の生活をし、自然に頼った生活に満足している。
- ・ 森に狩りにでたり、カニを探しに行ったり、キノコを探しに行く。
- ・ 森に漢方薬を探しに行く。
- ・ 健康的である。有機野菜を食べられる。  
→化学肥料を使用すると、健康にも悪いし、環境にも悪い。
- ・ 病気になったときに薬をのむことができる。
- ・ 自然の美しい環境の中で生活できる。
- ・ 悪質な事件がない。
- ・ 村のポリシーがある。
- ・ 2008-2009 年にかけて村のポリシーを作成し、村民がそれに従っている。
- ・ 村民が村の美化活動に協力的である。
- ・ 昔は小川から水を使用していたが、現在は水道を使用できる。
- ・ 豊かな自然がある。
- ・ 県の健康管理局が3ヶ月に1度調査にくるため、村民は安心して暮らせる。

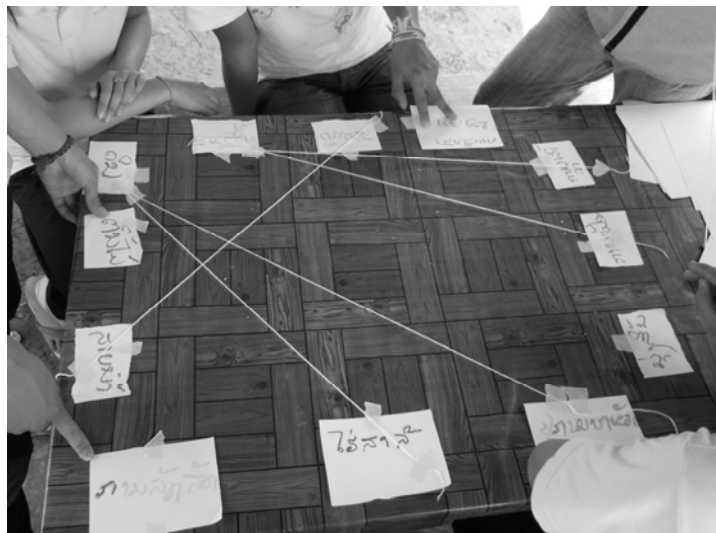
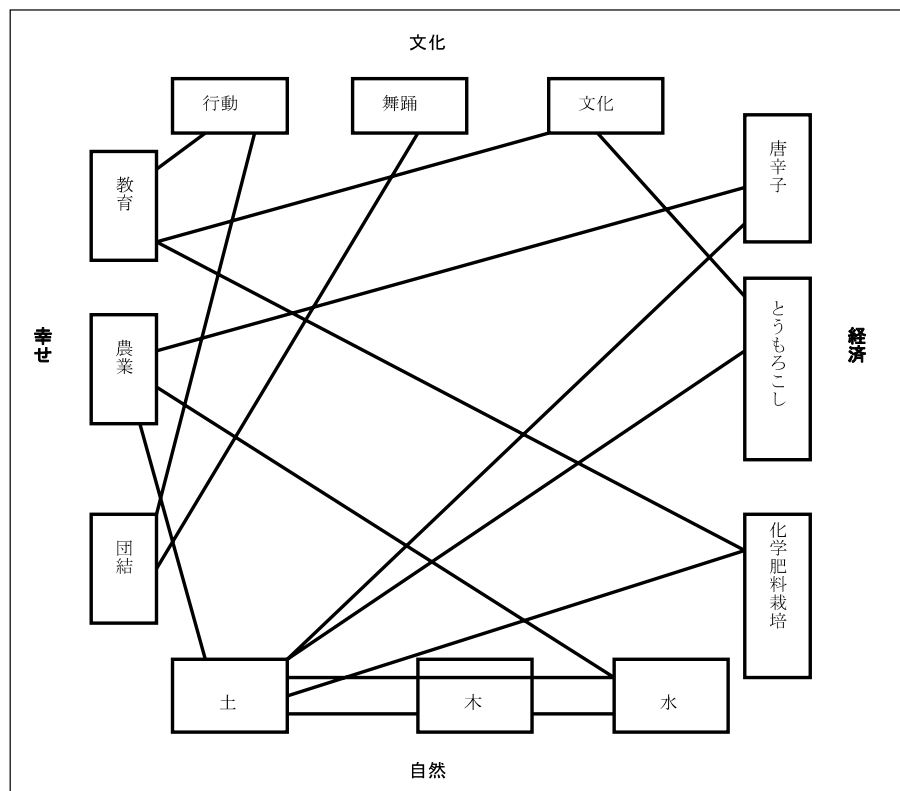
幸福(心／精神面)

この村に生まれてよかったこと：

- ・ 温かい家庭を築き、夫婦円満であり、互いに協力し合い、尊敬し合っている。
- ・ 子どもに教育を受けさせることができる。  
→子どもに知識を持たせたら、村の発展につながると信じている。
- ・ 借金がない。
- ・ 食べたいときに食べたい物が食べられる。
- ・ 庭、畑を所有している。
- ・ 夫婦が理解し合っている。
- ・ 暖かい家庭を築ける。
- ・ 村の計画に基づいて生活できる。
- ・ 豊かな自然がたくさんあり、食べ物に困らない。
- ・ 村民同士の調和がある。  
村の発展のために子どもの知識を向上させることができ、幸せを感じることができる。子どもたちが成長して親孝行をすることを願う。  
しっかりとした村長がいて、ポリシーを皆が守れる。泥棒などがなく、村民が協力し合って生活し合っている。

#### 4) カム郡ナパ村

##### 「知恵の箱」



写真：「知恵の箱」作成中

## 自然

| WHAT                                                                                                    | HOW                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>川、木、土</p> <p>川：プーブンロン山の麓から水が流れている。マット川はナーパーイ村の横を流れる。マット川にはたくさんの魚や蟹やエビ、貝などが生息している。マット川の水量は減少している。</p> | <p>原因：農作物の生産に水を使用しているため。森林を守るために、伐採した分の木を植える。</p> <p>土：以前は肥沃な土が村にあったが、現在は家庭菜園を行う人が増加したため、土の質が低下している。土を何度も掘り起こしたため、土の質が悪化した。豊かな森林を守るために、村民の意識を変える必要がある。単一農業ではなく、様々な種類の野菜を育てることが重要である。</p> <p>木：森にはたくさんの木が生息していたが、現在は減少傾向にある。</p> <p>原因：農作物を生産するためにたくさんの木を伐採している。</p> <p>村に住む人が増加したため。</p> <p>肥沃な森を取り戻すために伐採した分の木を植える必要がある。村民の義務である。</p> |

## 経済

| WHAT                     | HOW                         | WHY                                                                                                                 |
|--------------------------|-----------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>とうもろこし畑<br/>動物の飼育</p> | <p>とうもろこし畑の増加<br/>動物の減少</p> | <p>村民はとうもろこしを生産するようになる。とうもろこしの栽培が困難である。とうもろこしを生産するための資金を提供してくれる人がいるため、高収入が得られると考えている。</p> <p>動物のえさに化学物質が含まれている。</p> |

## 文化

| WHAT                                            | HOW                                                | WHY                                                                               |
|-------------------------------------------------|----------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| <p>衣類：</p> <p>綿のシンをはくこと、髪を結うこと。パーヴィヤン？すること。</p> | <p>昔と違い、ジーンズをはく人が増加した。</p> <p>大勢の民族の人がジーンズをはく。</p> | <p>欧米の文化の影響のため、ラオス女性はジーンズをはかなくなった。</p> <p>文化・習慣の保全につとめる。</p> <p>丁寧な言葉遣いを心がける。</p> |
| <p>仏教の信仰：</p> <p>パーシー儀式</p>                     | <p>村に寺院がないため、隣村の寺で祭りを行う。仏教の他にアニミズムを信仰する人もいる。</p>   |                                                                                   |
| <p>方言：</p> <p>方言に柔軟性がある</p>                     | <p>方言：昔は乱暴な言葉遣いを使用していたが、現在は丁寧な言葉を使うようになる。</p>      |                                                                                   |
| <p>舞踊、吟遊：</p> <p>プワンの詩</p> <p>シェンクワンの詩</p>      | <p>運動の一部に舞踊をとりこみ、楽しい雰囲気を作り出したい。</p>                |                                                                                   |

|                         |                                    |  |
|-------------------------|------------------------------------|--|
| 祭りの開催：<br>7月～10月に開催する祭り | 調和の場を広げる、美しい文化を拡大するために食料などを仏様に捧げる。 |  |
|-------------------------|------------------------------------|--|

## 幸福

幸福(身体面／心・精神面)

| WHAT                | HOW                                                      | WHY                               |
|---------------------|----------------------------------------------------------|-----------------------------------|
| 子どもの教育<br>畑仕事<br>調和 | 学校に通うことの出来る子どもの数の増加したこと。<br>自給自足の生活ができる。<br>村のよい一致団結がある。 | 子どもに教育を受ける機会がある。<br>食べ物があれば幸せである。 |

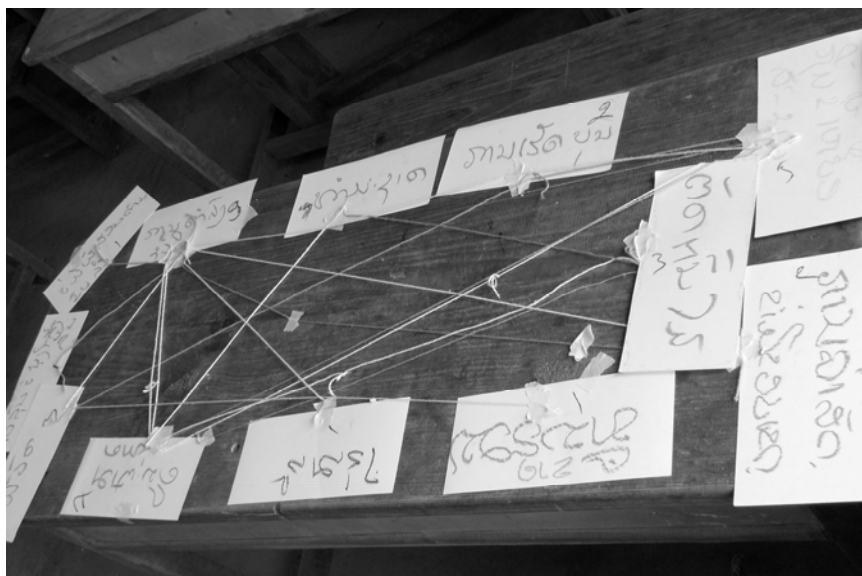
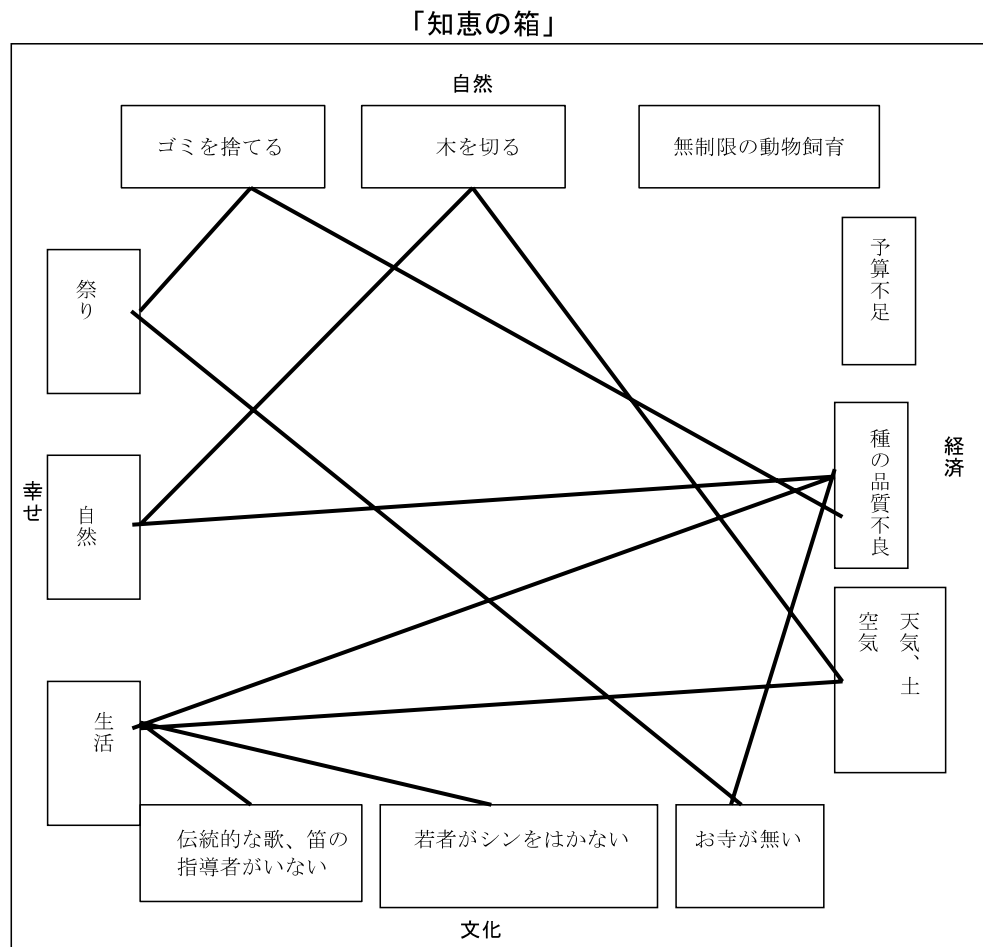
## 解決策

- ・とうもろこし以外にも芋や豆を植える。
- ・バナナの木、サトウキビを植える。  
利点：土を掘り出す必要がない。  
高い収入が得られる。  
土の改善が見られる。
- ・植林をする。
- ・土の改善策  
とうもろこしを生産しない。  
伐採した分の木は植林する。  
化学肥料を使用しない。
- ・土になにが起きたのか？  
土壌劣化  
土砂崩れ
- ・なぜ起きてるの？  
土を掘り起こすため。  
化学肥料を使用しているため。  
森の木の伐採しているため。

## 地図



## 5) カム郡ロンピュー村



写真：「知恵の箱」作成の様子



## 自然

| WHAT                                                                   | HOW                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      | WHY                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
|------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| タンピュー洞窟<br>ナンピュー洞窟<br>水の洞窟<br>パーデー山<br>パーダム山<br>プーケー山<br>空気<br>滝<br>森林 | <p>&lt;タンピュー洞窟&gt;<br/>           タンピューには小川がある。<br/>           小川の水を使用して米作りや家庭菜園の水として使用し、村の人々の生活に使用している。</p> <p>(良い点)<br/>           タンピューが観光地になって以来、祭りのときに村の人々が出店し、収入を得ている。</p> <p>(悪い点)<br/>           祭りのときに村人がゴミを川に捨て、水が汚れている。</p> <p>&lt;ターヒャーの滝&gt;<br/>           ターヒャーの滝はタンピュー洞窟の北に位置する。<br/>           ターヒャーの滝は北のタンピューから流れており、南のタンピュー洞窟へ流れていく。</p> <p>&lt;森&gt;<br/>           タンピュー周辺にある森は、様々な種類の木が生息している。</p> | <p>&lt;タンピュー洞窟&gt;<br/>           タンピュー洞窟に訪れる観光客が増えるほど、ゴミも増える。</p> <p>&lt;ターヒャーの滝&gt;<br/>           (良い点)<br/>           観光客にまだ知られていないため、豊かな自然がある。</p> <p>(悪い点)<br/>           誰も知らないから開拓されていない。</p> <p>&lt;森&gt;<br/>           (良い点)<br/>           森の伐採に対するルールがしっかりしているので、勝手に木を伐採する人がいない。水にとって豊かな森は大切である。</p> |

<村の人による付け足し>

- ・ターヒャーはまだ開拓されておらず、観光地ではないので観光地にしてほしい。
- ・タンピューの周りには多くの野生動物が生息している。

## 経済

| WHAT                 | HOW                                                                                                                                                                                                                 | WHY                                   |
|----------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------|
| 工芸品<br>(手作り、カゴ、おりもの) | <p>20,000 キープで工芸品を販売する。<br/>           もち米入りを 20,000～25,000 キープで販売する。</p> <p>織物は依頼主から頼まれて織るときと、自分で材料を仕入れて織るときがある。</p> <p>シンは1枚 6,000 キープで販売する。</p>                                                                  | 貧困を抜け出すため。<br>昔からの習慣である。<br>収入向上のため。  |
| 観光                   | <p>タンピュー入場料<br/>           ラオス人：2,000 キープ<br/>           外国人：5,000－10,000 キープ<br/>           売店がある。</p> <p>祭りのときに売店を開くには、税金を払わなければならない。<br/>           (1㎡ 20,000 キープ)</p> <p>毎年の売り上げは 2,000,000～3,000,000 キープ。</p> | タンピューを開拓するため。<br>村の改善のため。<br>収入向上のため。 |

|                          |                                                                                                                                                          |                        |
|--------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------|
| 農業<br>動物飼育<br>(ウシ、ブタ、トリ) | ウシ：<br>母牛と子牛のセットで 2,000,000～3,000,000 キープで販売する。<br>子牛のときに購入し、成長したら 5,000,000 キープで販売する。<br>ブタ：<br>子豚は 100,000～200,000 キープで販売する。<br>成長したブタは 1,000,000～である。 | よりよい生活のため。<br>収入向上のため。 |
| 家庭菜園<br>(トマト、とうもろこし)     | トマトの種:2,000,000 キープで販売する。                                                                                                                                |                        |

### 文化

| WHAT | HOW                                                                           | WHY                                                                                  |
|------|-------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------|
| 衣服   | シンをはく。<br>女の子は髪を結う<br>(良い点)<br>・祭りのときにシンをはく<br>・伝統を守る<br>(悪い点)<br>・若者はシンをはかない | 織物は家族の分のみ生産する。<br>若者がシンをはかなくなったのは、<br>社会の影響、社会の変化が大きい。                               |
| 宗教   | ・村の大半は仏教徒<br>(良い点)<br>・毎年祭りが開催されている<br>(悪い点)<br>・宗教儀式の内容は困難である                | 村に寺がないため、儀式を行うのに<br>困っている。<br>将来村に寺をつくりたい。                                           |
| 舞踊   | おどり、うた、詩歌、ケーン<br>(良い点)<br>・方言が特徴的<br>(悪い)<br>ケーンの笛を吹ける人が年寄りしかいない              | 舞踊について、若者にしっかりした<br>トレーニングを行いたい、インス<br>トラクターがいないので出来ていな<br>い。<br>若い人はラオスの伝統文化に関心がない。 |

### 幸福

| WHAT                                                         | HOW                                                                                              | WHY                           |
|--------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------|
| <生活の仕方><br>家族で互いに協力し合<br>いながら生活する。<br>畑仕事を行うときは協<br>力し合って行う。 | <生活の仕方><br>稲作<br>畑<br>(良い点)<br>商売に有利である。<br>(悪い点)<br>農作業は天気によって左右される。<br>ある家族は、資金はあるが労働力が不足している。 | とうもろこし畑、米作りは、<br>自由に行うことが出来る。 |

|                                                         |                                                                                                  |                               |
|---------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------|
| <p>&lt;文化・習慣・宗教&gt;<br/>ブンカオーサラという祭りは10月に開催される。</p>     | <p>ラオスの発展と共に、ラオスの文化・習慣を守っていく必要がある。</p> <p>&lt;宗教&gt;<br/>バーンファイ村には僧侶がいないため、仏教の信仰があまり積極的ではない。</p> |                               |
| <p>&lt;村の有名な食べ物&gt;<br/>たけのこ<br/>たけのこサラダ<br/>野菜のサラダ</p> | <p>(悪い点)<br/>たけのこは環境に悪影響を与える。</p>                                                                | <p>村の特徴的な食べ物はとうもろこし、米である。</p> |

### 地図



<村人による付け足し>  
森は国営林であり、森に生息する植物は漢方薬になる。

### 村の問題点

<村の生活で改善すべき点>  
生産能力を高めるための用水路の設置が必要である。  
文化保護、仏教信仰のために寺の建築をする。  
農業の生産力をあげるための予算が不足している。  
政府の援助を得て、道路を整備したい。

<その他>  
教育：今回のように村の中でボランティアの学生を育てたい。  
図書館に新しい本を入れてほしい。今ある本は古くなっており、図書館を利用する人がいない。



## 技術移転のための調査及び招聘プログラム

下記の調査は、シェンクワン県における教育開発にとって重要な情報を収集するために、また同県の調査を実現するために行われた。調査日程や訪問機関等については、以下の通りである。

## ● ラオス調査

調査者：永田佳之、斉藤美貴

| 期間                        | 場所     | 対象者／機関                                                                                                                                                                                                                 |
|---------------------------|--------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 2010 年 12 月 25 日<br>～31 日 | ビエンチャン | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ チャルーン・ソウボン氏<br/>(ラオス国教育省就学前教育・初等教育局長)</li> <li>・ シサモン・シティラボングサ氏<br/>(ラオス国ユネスコ国内委員会事務局長)</li> <li>・ ソンバット・ソンポン氏<br/>(PADETC 代表)</li> <li>・ 岩崎真紀子氏<br/>(JICA ラオス事務所)</li> </ul> |

## ● タイ調査

調査者：永田佳之、斉藤美貴

調査期間：2011 年 1 月 26 日～2 月 10 日

| 調査者          | 期 間           | 場 所      | 対象者／機関                                                                                                                                                                                                                                                      |
|--------------|---------------|----------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 永田佳之<br>斉藤美貴 | 1 月 27 日～31 日 | バンコク     | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ アタボル・アヌンタボサクル氏<br/>(チュラロンコーン大学 ESD 研究センター所長)</li> <li>・ ミッコ・キャンテル氏<br/>(ユネスコ・バンコク事務所 ESD プラグラムスペシャリスト)</li> <li>・ ケイティ・バンハラ氏<br/>(ユネスコ・バンコク事務所 ESD 担当スタッフ)</li> <li>・ ロバート・スティール氏<br/>(システィナビリティ・アジア所長)</li> </ul> |
| 斉藤美貴         | 2 月 1 日～2 日   | コンケン県    | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ソンバン・ジャンパワイ氏<br/>(Ban Wa 学校校長)</li> <li>・ ジティチャイ・ゲットカウ氏<br/>(Ban Wa 学校教員)</li> <li>・ マノーンサック氏<br/>(Khamkennakron 学校教員)</li> </ul>                                                                                  |
| 斉藤美貴         | 2 月 4 日～8 日   | カンチャナブリ県 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ラチャニー・ドンチャイ氏<br/>(子ども村学園校長)</li> </ul>                                                                                                                                                                             |

- インド調査

調査者：曾我幸代

調査期間：2011年2月7日～15日

| 期 間       | 場 所                    | 対象者／機関                                                                                                                                                                 |
|-----------|------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 2月8日～10日  | ウッタールアーカンド州<br>デラドゥン市内 | ナヴダーニャ<br>・ヴィンオッド・バート氏<br>(ナヴダーニャ代表者)<br>・ティファン・ブルバン氏<br>(スクール・プロジェクト担当インターン)<br><br>プロジェクト校 アン・メアリー・スクール<br>・ディーパック・アロラ氏<br>(アン・メアリー・スクール校長)<br>・シルビア・ウィクゾレック氏 (同副校長) |
| 2月10日～14日 | ニューデリー市内               | ナヴダーニャ<br>・ヴァンダナ・シヴァ氏 (ナヴダーニャ創設者)<br>・カヴィータ・シン氏<br>(スクール・プロジェクト・コーディネータ)                                                                                               |

- ラオス人招聘プログラム

来日者：カンプイ・サイタラット氏

(PADETC シニアマネージャー)

ブンコン・ラッタナビライ氏

(シェンクワン県立ポンサワン高校ユネスコスクール校長)

来日期間：2月28日～3月8日

| 期間         | 場所／機関                        |
|------------|------------------------------|
| 2月28日～3月4日 | 北海道浦河町<br>社会福祉法人浦河べてるの家      |
| 3月5日～3月7日  | 神奈川県川崎市<br>NPO 法人フリースペースたまりば |

## タイ調査報告

斉藤美貴

### 1. チュラロンコーン大学 ESD 研究開発センター

#### タイの ESD の現状と特徴

タイの首都バンコクにはユネスコの地域事務所があり、アジア・太平洋地域の ESD を推進していることから、タイは他のアジア地域に比べて ESD の最新情報を入手することができ、それに適合した ESD の実践をいち早く行うことができる環境にある。またタイの国王、プミポン国王は、1990 年代後半に「足るを知る経済哲学(Sufficiency Economy Philosophy)」を提唱し、過度な経済成長を優先させる国の開発に警鐘を鳴らしていることから、タイは ESD を推進できる環境が他国よりも整っているという見方もある。

ESD の実践面では、タイでは 2008 年から 2012 年までの EESD(Environment Education for Sustainable Development: 持続可能な開発のための環境教育)のマスタープランが制定されたことにより、環境教育の側面から ESD を推進している傾向が見て取れる。実践内容は、学校のゴミ分別やエネルギー消費の抑制など、いわゆる「エコ活動」が目立ち、ESD が目指している、持続可能な開発に向けた行動変容や価値観の変容にまで及ぶ実践はまだ多くはみられない。しかし、ESD の研究者および実践者は全国各地に点在しており、チェンマイ大学、コンケン大学、タクシン大学、地方の私立学校等において ESD の優良実践が行われている。

#### EESD について

ASEAN 諸国は、1992 年のリオデジャネイロで開催された国連環境開発会議で採択された「アジェンダ 21」の影響を受け、環境教育アクションプラン(Environmental Education Action Plan)を策定した。タイは 1997 年から 2001 年の 5 年間を「環境教育マスタープラン及びアクションプラン(Environment Education Master Plan and Action Plan)」の期間と制定し、国家レベルで初の環境教育の推進活動を行った。これは、自然資源・環境省によって主に進められ、環境教育のガイドラインとして活用された。

さらに 2001 年までの環境教育マスタープラン及びアクションプランを引き継ぎ、2008 年から 2012 年までを「持続可能な開発のための環境教育(Environment Education for Sustainable Development, EESD)」の期間と制定した。この 5 年間の目標は 2 つある。1 つは EESD を推進するためのアクションプランを作成すること、もう 1 つは環境教育を通じて持続可能な経済成長や社会開発を実現し、市民教育を強化することである。

#### チュラロンコーン大学 ESD 研究開発センター

ESD 研究開発センターは、チュラロンコーン大学教育学部内に設置された EESD センターを前身としており、2007 年 ESD センターと改称された。同センターは環境教育の研究

だけでなく、ESD についての研究開発を行っている。アタポル・アヌンタボサクル(Athapol Anunthavorasakul)センター長をはじめ5名の大学のESD研究者と6名の非常勤研究者が同センターの研究開発に携わっている。

タイに ESD と名のつく機関はチュラロンコーン大学 ESD 研究開発センターと NGO 団体の WWF の2機関である。WWF は主に環境活動を通して ESD を推進し、チュラロンコーン大学は ESD の COE として国家レベルやアジア地域レベルの ESD の革新や発展を目指している。主に教師や教育者、教員養成機関やその他教育関係機関のキャパシティー・ビルディング、ネットワーク構築、ESD の地域およびサブリージョナル・レベルの連携強化も目指している。ESD 研究開発センターの役割は4点あり、ESD のイノベーションの調査・開発を行うこと、ESD の現状をモニタリングすること、ESD の学術上のサービスを提供すること、そして ESD の評価をすることである。実際には、5つの教育サービスと、4つの研究、そして2つのイノベーション開発を行っている。

教育サービスは、ユニセフの Child-Friendly School の理念のもと展開してきた。

- ・ 事前研修の一環としての教員前教育、ライフ・スキルやグローバル教育、シティズンシップ教育
  - ・ ICT を活用した教員養成
  - ・ ESD についての講演会や「サステイナビリティを学ぶ」ワークショップの開催
  - ・ サステイナビリティについて理解を高めるための映画の上映会
  - ・ 教員志望の大学生に「ESDに向けたキャパシティー・ビルディングのワークショップ」
- キャパシティー・ビルディングのワークショップでは、ESD の概念のもと環境教育や子どもの権利、ライフ・スキルについて学ぶ。

研究分野では、以下の研究が繰り広げられてきた。

- ・ 国際理解教育の教育政策についての研究
- ・ 9県で実施されている Child Friendly School 実践校のモニタリング
- ・ 自然資源・環境省と共同で6県のエコ・スクールのモニタリング
- ・ International Institute for Child Rights Development(IICRD)と共同する「トリプル A (Action, Analysis, Assessment)子ども・コミュニティ開発」

IICRD との共同プロジェクトは、現在バンコクにあるクロントイとチェンライにあるバンナートというスラムで活動が行われている。

イノベーション開発では2つの活動が行われている。

- ・ 教員前研修として Child-Friendly School とライフ・スキルそしてグローバル教育についての研修
- ・ 権利の概念に基づいたプランニング、モニタリング、評価研修

現在センターが行っている活動の一部として、ESD を根底においた事前研修、エコ・スクールにおける環境教育、子どもの権利に関する活動、そして ESD を通した「足るを知る経済」の推進が挙げられる。

活動資金は、プロジェクトごとに資金源を見つけており、特にユニセフ・バンコク事務



所や自然資源・環境省との連携が強い。

### ラオスへの「コンパス」メソッド活用の可能性

ラオスで「コンパス」メソッドを使用する際の留意点について以下の助言を得た。

「コンパス」メソッドをアジア地域、特にラオス、タイで活用する際は、その教授法を学んだ教師に、より多くの討議や分析する時間を与える必要がある。「コンパス」メソッドは教師にとって新しい思考法であり、また革新的な教授法であることから、教師が理解し活用できるようになるまでに時間がかかる。タイで「コンパス」メソッドのワークショップを行うと、参加者(教師)から「『コンパス』メソッドはとても複雑だ」という意見が寄せられていることから、「コンパス」メソッドの教員養成をする際には簡素化することが求められているであろう。

タイやラオスの教育の特徴として「静かな教室文化」が挙げられた。つまり学校教育では、教師が教科書を使用した一方的な授業をし、生徒はそれを静かに聞きノートに記入しそして記憶するという学校文化が根付いている。このような学校文化圏において「コンパス」メソッドのような、教師が生徒に多く発問し、授業で子どもたちの活発な参加が求められる授業体系に教師が慣れていないことが課題として挙げられた。また、生徒が教師に質問をしては失礼だという暗黙の認識もあることから、「コンパス」メソッドの活用には、学校の「隠れたカリキュラム」を考慮していく必要もある。

以上のことから、「コンパス」メソッドを教える教員養成者の高度な力量も同時に求められる。

スティール氏らが行っている「コンパス」メソッドをそのままタイやラオスの学校教育や教員養成に活用するのではなく、その土地の文化や教育文化、国民性に適応した「コンパス」メソッドを創り上げていく必要がある。また、「コンパス」メソッドのアクティビティが多少複雑な点があり、それらを簡素化する必要もある。

### 今後の ESD 推進の課題

これまでの学校教育では、「何をどの年齢で教えるか」という内容が重視されてきており、学習の過程が重要視されることが少なかった。しかし、ESD は教育のコンテンツではなく、教育や学びのプロセスを強調していることを目指している。DESD の最終年である 2014 年までの課題は、学校教育をコンテンツ中心の教育からプロセス中心の教育に方向転換することである。

タイには現在環境教育(Environmental Education: EE)、国際理解教育(Education for International Understanding: EIU)、異文化教育(Multicultural Education)、グローバル教育(Global Education)等、多様な教育が混在しており、それらと ESD の補完性を持つことが課題である。

たしかに、「足るを知る経済哲学」と ESD の理念は重複する点が多々あり、また「足るを知る経済哲学」は国や企業の経済成長について新たな示唆を与えており、ESD 推進にとって

重要である。しかし、「足るを知る経済哲学」推進の手段として ESD を活用することが有益だと認識する人は多くなく、タイの ESD を推進する上での課題として挙げられる。タイには ESD について学者や実践者の間でも理解がある人は 100 人中数名ほどで、ESD を EE(環境教育)と混同している人も多く、ESD についての認識を広げることも課題の一つである。

## 2. ユネスコ・バンコク事務所

### ESD 推進の課題

アジア太平洋地域の現状から ESD 推進の課題として以下の 3 点挙げられた。1 つめは、いかに ESD を学校教育のメインストリームに組み入れていくかという課題が挙げられる。中国やインドネシア等アジア各国の学校レベルで ESD の優良実践が生まれているが、それらを学校教育のメインストリームにすることが ESD の課題である。

2 点目に ESD を推進するにあたって、キャパシティ・ビルディングの問題がある。教員養成とカリキュラム開発を同時に行うことが ESD の推進の鍵を握っている。また ESD の学校運営に関する校長向けのガイドラインを作成することも必要であり、特に教授法と施設運営に関するガイドラインの必要性が高い。ESD 推進にあたって、教員養成のみやカリキュラム開発のみの改革を行っても ESD の実践につながらない。また、例えばラオスの初等学校では、カリキュラム全体の 20%は地域に根差す自由なカリキュラムを組み立てても良いという制度があるが、現実にはそれらは十分に活用されていないか、または誤解のもとに活用されている。本来のねらいである地域に根差した教育活動を行わず、英語教育の時間として活用されていることが多い。つまり、どれだけカリキュラムが良質なものであっても、それらを利用する教師の能力が十分になれば、本来のねらいは達成されないままになってしまうことから、教員養成とカリキュラム開発が同時に改善されていくことが重要である。さらに、ESD は学びを通じて人々の意識改革や行動変容を求めていることから、学習者が生活している事柄に根付いた学びを展開しない限り、ESD の目標が達成されないことも強調すべき点である。

ESD の評価については、従来の EFA モニタリング・レポートにあるような教員／生徒数の比率やクラス・サイズに関する指標とは異なる「新たな質的指標」が求められている。

### EFA と ESD の連携について

近年 EFA の特徴として、以前にも増して「教育の質」の重要性についての認識が高まっている。また、EFA の課題として「最後の 10%」<sup>1</sup>についても ESD は積極的に考慮する必要性もある。

---

<sup>1</sup> 以下の出版物は、少数民族の ESD の優良実践が掲載されている。

Walpole, Pedro. *Learning Sustainable Life: Bukidnon Pulangien Community Experience of Integrating Mother Tongue Education for Sustainable Development*. APC. 2010.

### バンコク事務所の今度の取り組み

バンコク事務所は次の4点について力を注いでいる。1点目に、防災教育の推進が挙げられる。防災教育のキャパシティー・ビルディング、また防災教育の推進を通して災害時の危険性を軽減するねらいがある。2点目に、気候変動教育(Climate Change Education)の推進を挙げている。以上の防災教育と気候変動教育は、ESD の概念と重複する点が多く、特に気候変動教育に関しては、ESD の導入として有用である。3点目に、気候変動問題に取り組む他の国連機関や、国際 NGO 等の横のつながりを構築、強化することである。4点目に、一般企業と提携して、気候変動に関する研究並びにアドボカシーの向上を目指している。

### ラオスでの「コンパス」メソッド活用についての助言

「コンパス」メソッドの一般的な傾向として、個々の教員養成に焦点があてられており、ホールスクール・アプローチの視点から「コンパス」メソッドを活用することに対する意識が低いことが挙げられる。そのため、ラオスで「コンパス」メソッドを活用する際には、キャパシティー・ビルディングやカリキュラム開発等のマクロの視点からコンパスを生かしていくことが必要である。また、コンパスについてのガイドラインを作成し、新たな教授法をラオス全国に広めていく努力も重要である。

先にも述べた EFA の「最後の 10%」の課題はラオスの現状にも当てはまる問題である。ラオスには多くの少数民族が暮らしており、公用語のラオ語と全く異なる言語や、ラオスの多数民族である低地ラオ族と全く異なる文化を持つ部族もある。このような少数民族の多くはラオスの学校教育を受けることに有益性を感じず、就学を望んでいない。したがって、ラオスで ESD を推進する際に「最後の 10%」について考慮しながら活動を行う必要がある。

また、ラオスで ESD を推進するにあたって、ユニセフが展開している Child-Friendly School プロジェクトの理解も同時にすることが必要である。カンボジアでの Child Friendly School の実践は広域に広まり、良い実践成果も存在する。Child Friendly School の概念も子ども主体の学びに焦点をおき、持続可能な子どもの成長のために活動を行っていることから、ラオスが ESD を展開するにあたってユニセフの活動の軌跡をたどることは有益である。

チュラロンコーン大学訪問時にも話題に挙がっていたアジアの「静かな教室文化」が生徒の創造性や批判的能力の育成を阻めている傾向があるため、教師自身も批判的能力や創造性のある考え方等の高次の思考(higher-order thinking)を活かす能力が低い傾向にある。ラオスのみならず、アジアの ESD 普及の課題は、伝統的な記憶中心の文化をいかに乗り越えていくかを考え、行動することである。

また、ラオス国は最貧困国の一国であることから、多様な国際機関や2国間援助をすべて受けているために近年「援助過多」の傾向があるという見方がある。世界銀行は、2010年にドナー主導の支援体制から被援助国主体の援助に方向転換することを明言し、さらに北欧では2011年にラオスへの二国間援助を打ち切る国も出てきている。ラオスを取りまく

国際協力は変化の時期にあり、「援助過多」にある社会制度の非効率性を単に援助打ち切りにするのではなく、ラオスの国民が自国の発展のためにオーナーシップを持てるような国際協力が求められている。この事業の課題は、ESDを通してラオス国民のオーナーシップを育む教育を広める土台づくりとして重要な役割を担っているのではないだろうか。

### 3. コンケーン(Khon Kaen)県調査

#### 調査校 2 校が「コンパス」メソッドを知るに至った経緯

各々の学校について述べる前に、ここで扱う 2 校がいかに関「コンパス」メソッドを活用するに至ったかについて言及しておきたい。タイの公立学校におけるエコ・スクール活動は 2008 から 2009 年にかけて施行されているが、それに伴い DEQP (Department of Environmental Quality Promotion) が開催したセミナーに参加し、そのセミナーで「コンパス」メソッドについて初めて紹介された。DEQP が 2 回目に開催したハンズ・オン・ワークショップでコンパスとピラミッドについてのワークショップが行われ、それ以降各学校で「コンパス」メソッドを実践しながらエコ・スクール活動を展開している。

#### 3.1 バンワ学校 Ban Wa School

コンケーン県の中心部から車で 40-50 分の位置にあるバンワ学校は、敷地内に 1-6 年生までの初等学校と 1-3 年生までの前期中等学校がある。初等、中等学校合わせて全校生徒は約 500 名おり、各教室 28-30 名の生徒を担当が 2 名ずつ担当するクラスが編成されている。全校生徒の約 70%が前期中等教育を終えて就職し、コンケーンにはサトウキビ畑が多く点在していることから、サトウキビ農家で働く割合が多い。

バンワ学校のコンパスの特徴は大きく分けて 3 点あり、校長のコンパスについての理解と地域でのコンパスの実践、授業でのコンパスの実践、そして前期中等学校の生徒が環境活動を行っていることである。

バンワ学校校長のソンパン・ジャンパワイ(Somphan Janwapai)校長は「コンパス」メソッドの重要性についてよく理解し、学校運営のみならず、「コンパス」メソッドを生かした学校と地域コミュニティとの連携促進、そして地域住民の生活改善にも「コンパス」メソッドを活用している。

またジャンパワイ校長は同校に 18 年間勤めており、バンワ学校を誰にでも開かれた学校づくりに取り組み、透明性のある学校、地域との良い関係がある学校、地域に優しい学校、信頼できる学校づくりを目指している。その実践の一つとしてバンワ学校では、2002 年より地域住民が学校運営に教育担当として関わっている。現在は学校区域内の各区域に教育担当が 1 名任命され、現在 13 名の地域教育担当が学校運営に携わり、月に 1 回学校と教育担当官で定例会議を行っている。

「コンパス」メソッドを活用する以前の地域の状態は、ある問題が存在しても住民がその問題解決のための手段や思考法が不十分であった。そこで「コンパス」メソッド

を使用したワークショップを通して問題解決能力の向上を目指した。ワークショップには80名の地域住民が参加し、地域がかかえる問題について理解し、そしてそれらの問題がつながりあっていることを知り、住民自らが解決方法を見つけ出し、状況の改善に向けた行動を起こすことを目指そうとしている。

「コンパス」メソッドでは、自然・経済・社会・福祉(ウェルビーイング)の4つの視点からある事柄を考察するがバンワ学校の実践では、社会、経済、文化、健康の4視点からコミュニティの現状を分析し、各グループは4側面の問題に対して順序付けを行い、最終的には、各4側面から学校とコミュニティが問題解決に向かって取り組む2つの課題を取り上げている。現在バンワ学校が取り組んでいる課題は以下の通りである。

|    |                  |                            |
|----|------------------|----------------------------|
| 経済 | 経済についての知識を持つ     | 日常生活に必要なお金の使い道について分析する力をもつ |
| 社会 | コミュニティの結束力の向上    | 薬物依存者の軽減                   |
| 環境 | ゴミについての知識をもつ     | 化学肥料についての知識をもつ             |
| 健康 | 健康的な食生活について知識をもつ | 運動行動の向上                    |

| เศรษฐกิจ          | สังคม               | วัฒนธรรม                    | สุขภาพ                                |
|-------------------|---------------------|-----------------------------|---------------------------------------|
| 1. ค่าครองชีพสูง  | 1. การว่างงาน       | 1. การละเลยในวัฒนธรรม       | 1. การขาดความรู้เกี่ยวกับสุขภาพ       |
| 2. การขาดความรู้  | 2. ปัญหาการว่างงาน  | 2. ปัญหาการละเลยในวัฒนธรรม  | 2. ปัญหาการขาดความรู้เกี่ยวกับสุขภาพ  |
| 3. การขาดความรู้  | 3. ปัญหาการว่างงาน  | 3. ปัญหาการละเลยในวัฒนธรรม  | 3. ปัญหาการขาดความรู้เกี่ยวกับสุขภาพ  |
| 4. การขาดความรู้  | 4. ปัญหาการว่างงาน  | 4. ปัญหาการละเลยในวัฒนธรรม  | 4. ปัญหาการขาดความรู้เกี่ยวกับสุขภาพ  |
| 5. การขาดความรู้  | 5. ปัญหาการว่างงาน  | 5. ปัญหาการละเลยในวัฒนธรรม  | 5. ปัญหาการขาดความรู้เกี่ยวกับสุขภาพ  |
| 6. การขาดความรู้  | 6. ปัญหาการว่างงาน  | 6. ปัญหาการละเลยในวัฒนธรรม  | 6. ปัญหาการขาดความรู้เกี่ยวกับสุขภาพ  |
| 7. การขาดความรู้  | 7. ปัญหาการว่างงาน  | 7. ปัญหาการละเลยในวัฒนธรรม  | 7. ปัญหาการขาดความรู้เกี่ยวกับสุขภาพ  |
| 8. การขาดความรู้  | 8. ปัญหาการว่างงาน  | 8. ปัญหาการละเลยในวัฒนธรรม  | 8. ปัญหาการขาดความรู้เกี่ยวกับสุขภาพ  |
| 9. การขาดความรู้  | 9. ปัญหาการว่างงาน  | 9. ปัญหาการละเลยในวัฒนธรรม  | 9. ปัญหาการขาดความรู้เกี่ยวกับสุขภาพ  |
| 10. การขาดความรู้ | 10. ปัญหาการว่างงาน | 10. ปัญหาการละเลยในวัฒนธรรม | 10. ปัญหาการขาดความรู้เกี่ยวกับสุขภาพ |

写真1 各グループでコミュニティが抱える問題を出し合い、順序付けをおこなった

校長は、地域の人々がワークショップに参加して問題解決の過程をたどる際には、地域の人々をエンパワメントしながらの地域の人々の創造性を育むことが重要であり、またコミュニティの人々と良好なコミュニケーションをとり合うことも重要である。

地域の教育担当の一人であるポンサ(Ponsa)氏は、教育担当として子どもたちの世話をできるようになったことに嬉しさを感じている。また、子どもたちには、学校教育を通してたくさんの知識を身につけ、仕事で成功をおさめ、地域の世話をする大人になってほしいと願っている。

授業での「コンパス」メソッドの活用は、前期中等教育で行われている全8教科中、社会と理科の時間に活用されている点がバンワ学校2つ目の特徴である。理科担当のジティチャイ・ケットカウ(Githijay Khetkhaw)氏は、授業で「コンパス」メソッドを活用している。「なぜ?」「なぜ?」「どのように?」という発問を通して、生徒の分析力が向上し、また多様な物や事象が互いにつながり合って存在していることに生徒が気づき、生徒同士が意見を交わすようになり、生徒自身に自信がついたこと述べる。同氏は、「コンパス」メソッドを活用した方が授業を行いやすいと述べている。

「コンパス」メソッドを活用した学びを通して同氏は、子どもたちに、ある事象に対して分析できる力、物事が多様につながり合っていることに気づくことができる力、例えば、メディアの分析を通してメディアが社会や経済に影響を与えているか分析できる力を育むことを目指している。

授業内では、「コンパス」メソッドを活用しているが、教室で実際に「コンパス」という名前を使って生徒にアクティビティを展開することではなく、また N(自然)/W(ウェルビーイング)/E(経済)/S(社会)を活用したアクティビティも行っていない。

「コンパス」メソッドを活用した教員養成について同氏は、学校に1名でも「コンパス」メソッドの研修を受けた教師がいるのであれば、その知識を学校の教員養成課程に組み込むことは可能である。

国王の提唱する「足るを知る経済哲学」を教育分野で活用する際にも「コンパス」メソッドは有益であり、また最新の教育法には年間35時間環境教育に関する授業を行うように制定されており、「コンパス」メソッドを活用する機会は多い。同学校では、2010年にコンパスについての教員養成を行っており、メソッドを活用して授業展開をする教師の人数が今後増える可能性もある。

3つ目の特徴は、前期中等学校の生徒が校舎の清掃活動と、ゴミの売買活動を行っている点である。校舎の清掃活動は校庭の美化活動を主に行っている。ゴミの売買では、生徒からプラスチックのボトル(ペットボトル)や、プラスチックのコップを1kgあたり7パーツ(約19円)で購入し、購入した物品のうち小学生が図工の時間に活用できそうな素材は小学校に寄付し、【リサイクル品を使用してつくったものの写真】それ以外のものは業者に1kgあたり8パーツ(約21円)で販売している。

プラスチック製品の売買金額は、生徒と教師、コミュニティの人々とプラスチック回収業者とともに決定した額である。すべての取引を含んで年間で1,000パーツの収入を得ることができ、その収益金は学校の運営資金として、ほうき等の備品購入費に充てられている。この活動に関わっている生徒は、活動を通して責任感が生まれ、また活動は楽しいと述べる。



写真2 リサイクル品を使用して作成したもの

### バンワ学校の「コンパス」メソッド実践の課題

DEQP が初めて開催した 2008 年のセミナーから現在までのバンワ学校の実践を図に表すと、以下ようになる。

ケットカウ教諭は、DQPE 主催のエコ・スクール活動の実践に向けた初めての講演会に参加した一人であった。その会ではスティール氏がパネルスピーカとして、「コンパス」メソッドについての概要を紹介していたが、講演のみでは、同メソッドはとても高度で難しく、実践が困難であるという印象を受けたと述べている。2 回目に DQPE が開催した教員を対象としたスティール氏がファシリテータのワークショップにバンワ学校からケットカウ氏を含め教員 2 名と、1 名の管理職と 1 名の地域教育担当が参加し、そこで「コンパス」メソッドについての理解ができ、授業で活用できるということや同僚の教員に「コンパス」メソッドのスキルを伝達できるということも確信したという。

チュラロンコーン大学の訪問時にも挙げられていた、「コンパス」メソッドの普及の課題は、講演会や文書でメソッドについての共有をするだけでは各校の実践は難しく、ワークショップ等を通して教師の体験的な学びが重要であり、その後各校での実践に移行した際は、フォローアップ体制を整えておくことが「コンパス」メソッド普及の鍵であると思われる。

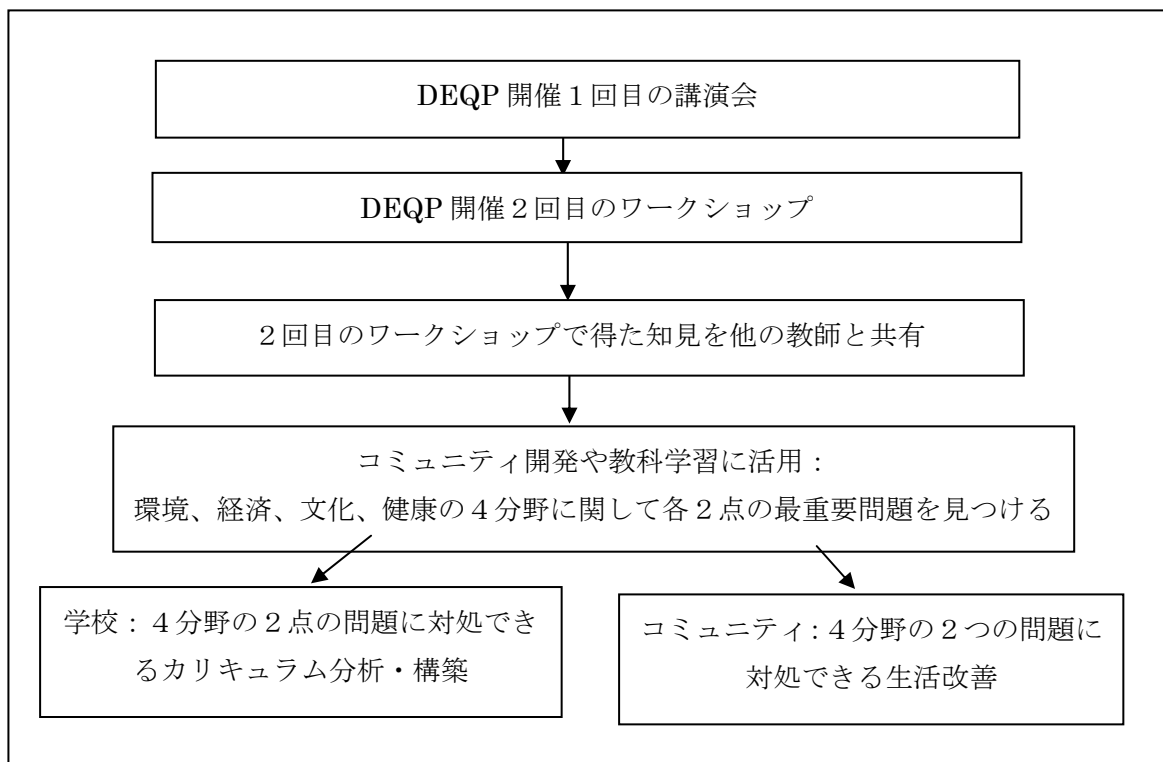


図 1 バンワ学校「コンパス」メソッドの取り組み

### 3.2 カムケンナコーン学校 Khamkaennakorn School

#### カムケンナコーン学校の「コンパス」メソッドの取り組み

同校には、社会、生物、英語科の数名の教師と地域の自治体員数名が「コンパス」メソッドについての知識があるが、実際に教科活動でメソッドを活用している教員は現在いない。しかし、同校で教師を務めるマノーンスック氏は、課外活動で環境クラブの顧問をしており、そのクラブで「コンパス」メソッドを活用している。特に長期休暇の間に行われる 2 泊 3 日のキャンプでは、「コンパス」メソッドを活用して地域の環境問題に取り組んでいる。キャンプ中に同氏は、まず「コンパス」メソッドを活用せずに環境問題について生徒にディスカッションをするよう促すと、生徒は目の前の事柄にしか注意が行き渡らないという。しかし、後に「コンパス」メソッドを活用しながらディスカッションを進めると、生徒の理解が深まり、目先の問題に注目するだけでなく、より深い問題が発生した原因について考察ができ、様々なもののつながりを見つける視点が育まれる。そしてこれらの思考の変容を生徒自身が体感することが重要であると述べる。

#### 学校が抱えている問題

カムケンナコーン学校の「コンパス」メソッドの推進が疎外されている理由は、大きく



分けて4点ある。

1点目に管理職に就いている人々の「コンパス」メソッドに対する不十分な理解が挙げられる。生徒数の多い学校で「コンパス」メソッドを活用するには、まず管理職にある人の十分な理解が求められる。特に校長が「コンパス」メソッドについて理解がない限り同校での「コンパス」メソッドの導入は厳しい。現在のカムケンナコーン学校は、生徒の学びの結果よりも、プロセスを重視する「コンパス」メソッドは理解されがたい現状がある。

2点目に、教師の仕事の多さが問題に挙げられる。日本の教師と同様にタイの教師の仕事は授業準備と授業のほか、その他大量のペーパーワーク、会議、クラブ活動の顧問、またコンペティションに出場する学生の指導があり、「コンパス」メソッド普及の障害になっている。さらに、保護者の多くは生徒を大学に進学させたいという願望を持っているため、大学進学に対応した教育を行うことが求められている。

3点目に、生徒をとりまく様々な問題が存在しており、特に生徒の喫煙問題が大きな問題として挙げられた。授業内容が困難でつまらなく、授業をスキップする等、家庭環境が不安定でその影響として生徒の心理状態も不安定になっていることが挙げられた。現在化カムケンナコーン学校では、全校挙げて生徒の喫煙行動の改善に取り組んでおり、「コンパス」メソッドについて語る余地がないという。

最後に、「足るを知る経済哲学」の推進である。マノーンスック氏は、「コンパス」メソッドを活用して「足るを知る経済哲学」を学校教育で推進することができると述べているが、学校全体で取り組む際には、まず教員養成の時間と、ワークショップに必要な費用を確保すること、そして学校全体でカリキュラム編成を行うことが重要であるとも指摘している。

### **カムケンナコーン学校で「コンパス」メソッドが必要な理由**

マノーンスック氏は、環境クラブでの「コンパス」メソッドの活用を通して、生徒が自らクラブの活動の予定を立て、生徒の主体性や創造性、活発性が育まれ、学びを通した生徒の変容を目にしているため、「コンパス」メソッドを学校教育に取り入れることの重要性を誰よりもよく理解している。

「コンパス」メソッドを活用することの利点は、第一に学校が学校運営に対して責任を持つようになること、そして教科学習の活動で生徒にオーナーシップを持たせることができることである。ホールスクール・アプローチとして「コンパス」メソッドを推進することが重要であり、それによって地域の生活様式に寄り添った学校運営もできると述べる。

### **2校の訪問から得た知見**

以上2校の「コンパス」メソッドを活用している学校を訪問し、ラオスで「コンパス」メソッドを活用する際に以下の点について考慮する必要があることが分かった。

1点目に、「コンパス」メソッドを活用して地域コミュニティの住民の意識改革を行う必要がある。持続可能な開発について考慮する際、チェンジェージェントとしての子どもの役割は大きく、教育を通して子どもの意識変容を行うことは大前提であるが、同時に大人

の意識変容も行うことが求められている。子どもたちは生活の大半を家庭や学校で過ごし、双方の生活で持続可能な開発に向けた実践が求められている。つまり、子どもたちと生活を共にする保護者を含めた地域コミュニティの意識変容も必要である。

2点目に、規模の大きい学校や都市部に存在する学校で「コンパス」メソッドの実践をどのように進めるかを考慮する必要がある。学校規模が大きいと必然的に「コンパス」メソッドを学校全体で活用することが容易でなくなる。まずは、校長を始めとする管理職が「コンパス」メソッドの重要性について理解することが重要である。次に、校内研修や「コンパス」メソッドを活用してコミュニティの活性化を行うことが「コンパス」メソッドを活用したESDの実践の要点である。また都市部に位置する学校は、郊外の学校に比べて比較的地域との交流が少ないことが指摘できる。ESDの広域モデル構築のためには、学校と地域コミュニティの連携が不可欠であるため、各コミュニティが学校に参加しやすい環境づくりについても考慮する必要がある。

3点目に、「コンパス」メソッドは「静かな教室文化」に挑み、新たな教育文化の構築を目指している教授法であり、ESDの具現化に直結するメソッドではないことに留意する必要がある。つまり、「コンパス」メソッドを学校教育や地域コミュニティに活用しただけでは、ESDが求めている「行動変容」や「価値観の変容」にまでたどり着くことは難しいのではないだろうか。「コンパス」メソッドを通して学習者は新たな物事のつながりを発見する能力や問題解決力、批判的思考は身につけても、それらが日常生活の「行動変容」を引き起こすことは決して容易ではないと言える。ラオスでの実践で肝心な点は、「コンパス」メソッドを活用した上でどのように人々が「行動変容」のプロセスをたどるのかを丁寧に分析する必要がある。

4点目に、コンケーンで視察し実践は、確かに「コンパス」メソッドの概念を理解して各授業や課外活動で活用しているが、システナビリティ・アジア(Sustainability Asia)が「コンパス」と名付けているNWSEのカテゴライズの実践までは活用されていないことが多いことが分かった。2校の実践では、NWSEのカテゴライズの活動よりも、生徒の創造的思考や批判的思考、そして物事のつながりを見つけられる力を育むような実践のほうが多い。必ずしも各授業でNWSEの活動を取り入れる必要性はないが、実際に公立学校でNWSEを授業に導入するには限られた授業時間や教師の力量等乗り越えなければならない課題が多い。

#### 4. 子ども村学園訪問報告

##### 子ども村学園の概要

子ども村学園(Children Village School)は1979年、学園の運営母体であるタイのNGO団体「子ども財団」(Foundation For Children)によって設立された寄宿制のオルタナティブ・スクールである。学園は、カンチャナブリ県中心部から車で1時間ほど離れた、敷地約32万平方メートルの豊かな森の中に位置している。子どもたちは、11軒の「家庭」で教職

員である「メー(タイ語でお母さんの意味)」や「ポー(タイ語でお父さんの意味)」や「ピー(タイ語でお姉さん、お兄さん)」と共に生活している。2011 年 2 月現在、160 名の子どもが生活し、24 名の教職員が学園に関わっている。

学園の成立背景は、1970 年代から見られるタイの急速な経済成長のかたわらでスラム街の発生や経済格差など様々な社会現象が発生し、特にスラム街に生活する子どもたちの劣悪な生活環境をはじめとする、子どもの権利が剥奪される状況が多発したことによる。

学園の理念は、仏教の精神とイギリスのオルタナティブ・スクールのサマーヒルの実践から成り立っている。サマーヒルの創設者の A・S・ニール(A. S. Neill)の子どもたちの自由や自治、そして大人と子どもが対等な権利を有すると考える教育思想に基づいている。サマーヒルの教育実践で有名な「学校評議会(General Meeting)」を子ども村学園でも実践しており、毎週金曜日の午後に評議会が開催されている。



写真 3 学校評議会の様子

### 子ども村学園が学校運営で重視している点

子ども村学園は、学校運営上、以下の 5 点を重視している。

1 点目に、学園のポリシーが挙げられる。1979 年の創立時、子どもたちに「幸せ」を与える場としての学園作りを目指していたが、創立 10 年目には「幸せ」を与える場としての学園だけでなく、将来子どもが自分自身の人生を自分で決定、行動できる大人になるための準備期間として学園は認識されている。

2 点目に学園の自然環境が挙げられる。学園の農業活動は、福岡正信氏の農薬を一切使用しない自然農法を展開しており、子どもたちは主に学園で採れた有機野菜を食している。また、敷地内には様々な果物の木があり、子どもはそれらを採取し、食べることもできる。このような生活を行うことで、自然と人間の生活が一体であることを子どもは体感している。学園のほとりに流れる川の存在も大きい。毎日 16 時から子どもたちは、シャワー兼水遊びとして川で遊ぶことができる。子どもたちは川遊びを通して、あり余るエネルギーを発散させている。

3点目に、子どもたちに考えさせる教育を実践していることが挙げられる。例えば、バンコクほか他県に課外学習として赴いたとき、学園の豊かな自然環境とは大きく異なる環境を子どもたちは目にする。学園の教師は、学園と大きく異なるその環境を教材として活用し、子どもたちに何が学園と異なるか、自然はなぜ必要なのか、学園の自然を保全するにはどのようなことをしたらよいのか等子どもたちに考える機会を作っている。子どもたちは子ども同士で考え、分析し、彼らなりの答えを出す。このような活動を通して子どもたちの考える力を育てている。自然の重要性に気づいた子どもたちは、環境保全についての意識が高まるという。

また、学園はタイの伝統的知恵について子どもたちに教える必要があると考えている。グローバリゼーションやモノカルチャーの波に流されるのではなく、タイの文化やタイの伝統知を重視できる思考法—ドンチャイ校長はこのような思考法を「正しい思考法」と呼ぶ—を育むことが重要であると考え、実践している。

4点目に、子ども村学園にはウェルビーイングが存在していることである。学園のポリシーや豊かな自然環境、創造性を育む教育実践を通して子どもたちの心身の健康が向上されている。そして、子どもを管理の対象ではなく、大人と同等の権利を有する人間としてとらえ、子どもの自由を尊重する学園の環境が子どもたちの身体的・精神的ウェルビーイングに大きく関係している。

最後に、学園の理念を大きく支えている仏教思想の影響が大きい。以下は、学園運営のキーワードである。

- Kelayanamita : 子どもは大人と同等の権利を有する
- Chanda : 「動機」子どもたちの勉強したい、という「動機」を尊重
- Viriya : 教師は子どもの勉強に対するモチベーションを高めることを助ける
- Bramavihara Dhamma という仏教思想をもって子どもたちと接する
  - ・ Metta : 愛と誠実
  - ・ Karuna : 慈悲を持って子どもたちの苦しみを癒す
  - ・ Mudita : 前向きな思考を持つこと
  - ・ Upekkha : 平静、沈着をもつこと

このように学園の理念や実践をみると、教えることよりも学ぶことを重視している点、学びに精神性が含まれていること、自然環境の重要性について体感できること、経済について考える機会があること、社会主義が重視されていること等、子ども村学園の実践は ESD の優良実践であると言える。

### 子ども村学園が ESD であると言える理由

学園が 4 半世紀続いている理由についてドンチャイ校長は、学園には十分な環境があることを述べている。環境とは、豊かな自然環境、愛や慈悲のある環境、そして自由の環境のことを指す。また、学園の理念も持続的であると述べている。それは、学校評議会を取

り入れることによって、教育の民主主義を取り入れることに成功していることや、豊かな自然環境、そして仏教思想によって子どもたちの善良な本性を育てるという理念があるからである。さらに学園は、経済面での持続性も確保している。学園運営費全体の 80%をタイ国内から、そして残りの 20%は日本を始めとする外国からの寄付金で学成り立っている。また、子どもたちが学園に来る来客者にとっても親切にしていることも相まって、持続性のある寄付活動が行われている。

同学園の経済面の持続可能な運営でもう一つ注目すべき点は、学園の子どもたちの小学校卒業後の進路や、就職のサポートが充実している点である。学園の生活で朝食作り以外の作業はすべて労働とみなされ、1回の就労につきそれぞれ決まった金額が子どもたちの口座に振り込まれるようになっている。また、子ども村学園で初等教育を終えた子どもたちの一部は全日制の中等学校に進学し、ある人は週末学校に通学している。週末学校に通う子どもたちは平日職業訓練に従事し、全日制に通う子どもたちも同様に、休日はパティックなどの制作活動を通して報酬を得ている。それらの貯めたお金で子どもたちは大学進学や就職の際の資金として活用している。また、大学進学を考えている子どもには、進学時にそれまでに子どもが貯めた金額と同等の金額の資金を学園が給付し、進学支援を行っている。

学園には幼稚園と初等学校しかないが、学園には後期中等教育を終えるまで子どもたちは暮らし、社会に出る準備をしている。学園は、子どもたちが成人となり、一人ひとりが自律し、社会で生活できるようになるまで経済面、精神面での支援をしている。以下の図 2 に示したように、子ども村学園のタイ社会における存在意義が大きいことが確認できる。学園にやってくる子どもたちは主に、タイ社会の急激な経済成長のかたわらで被害を被った家庭からやってくる人が多い。このようなタイの持続不可能な開発のつながりを断ち切るために、学園は決して良いと言えない環境で暮らしている子どもたちを引き取り、自然豊かな環境で子どもたちを育てている。いわば、学園はタイ社会の社会的セーフティーネットという役割を担っているのではないだろうか。持続不可能な社会で生活していた子どもたちを引き取り、持続可能な生活環境が充実している学園で生活し、その間に子どもの人間性自体を持続可能性が含まれる人間へと育て、最終的に社会へと送り返しているのである。ある卒業生は学園と同じカンチャナブリ県で有機農家として生活し、週末には畑で採れたたくさんの野菜を学園に寄付していたり、ある卒業生はセラミック工場の社長をしていたり、子どもたちはタイの社会で自律した生活を送ったりしている。子ども村学園の ESD の実践は、学園が ESD の要素を含んでいるだけではなく、タイ社会の中で活躍できる人材を育てていることも、タイの持続可能な社会形成の一端も担っている。

またドンチャイ校長は、現在タイ全国でオルタナティブ教育のネットワーク構築に尽力しており、子ども村学園の実践経験を全国各地に普及している。規模の比較的小さな学校と提携し、学校教育にタイの伝統文化や伝統知を取り入れたり、地域の方々を学校に関わるようにして子どもたちとの交流する機会を増やしたりなど、地域活性化も含めた学校改善に取り組んでいる。さらに子ども村学園では、ホームスクーリング制度も新設し、学園

のオルタナティブ教育の活動領域を広げている。

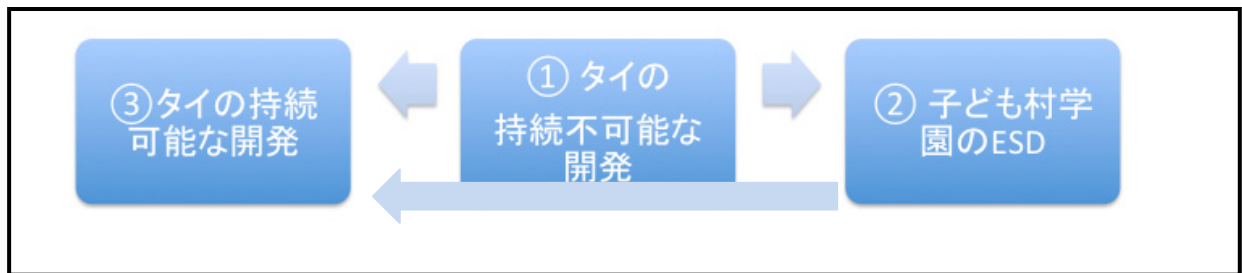


図2 タイ社会に影響を与えている子ども村学園

#### 最後に—ラオスでの事業に対する示唆—

ラオスの公立初等学校で ESD の実践を行う際に考慮すべき点を2点挙げる。まず、何がラオスの持続可能な社会を構築する要素になるのか、という青写真を描くことである。子ども村学園の実践では仏教の教え、つまり精神性を学園の理念に取り入れることであり、伝統知の復興であり、自然環境やウェルビーイングのある生活だが、ラオスの持続可能な社会にはどのような要素が重要となるのか、この事業に関わる実践者が共通の理解を持つことが必要である。

次に、何がラオスの ESD の要素になるのかを考えて実践を展開すべきである。子ども村学園の実践では、学びを中心とした学園生活や、民主主義のある教育、子どもと大人が同等の権利があることについての理解、自由、自律そして教師の意識改革が挙げられる。

ラオスにもタイと同様に仏教文化が昔から根付いており、教育面では、アジアの「静かな教室文化」がラオスでも根強くあるのではないかという指摘はチュラロンコーン大学で受けた通りである。子ども村学園では、30 年以上にわたる実践のなか、タイ文化を大切に保持しつつ「新しい文化」も創造している。例えば、子ども村学園ではタイの伝統文化についての深い理解をすると同時に、伝統を重んじながらも将来のタイ社会の「変化の担い手(change agent)」であるという意識を育む実践も行っている。この実践はまさに持続可能な社会を構築するための教育であると言える。学園は、目下の「子ども期」に焦点をおいて教育活動を行うのではなく、子ども一人ひとりの生涯に焦点を置いた教育を行っている。だからこそ学園の学びの中心は生活であり、自律を目指した教育実践があり、生涯学習のための基盤作りを担っているのである。このように長期にわたる持続的な教育的営みが今後のラオスの教育開発に示唆することは少なくない。

## インド調査報告 —ナヴダーニャ Navdanya—

曾我幸代

### ナヴダーニャの概要

ナヴダーニャは、インドの北東部ウッタラーカンド州の州都デラドゥン Dehradun の郊外に位置する。ライツ・ライブリーフッド Rights Livelihood 賞受賞者であるヴァンダナ・シヴァ氏 Dr. Vandana Shiva によって 1987 年創設された（1991 年に正式に団体登録される）。

1984 年に起きた「プンジャブ闘争 Punjab Violence」と「ボパールの悲劇 Bhopal Tragedy」によって、インドは農業におけるパラダイムシフトを迎える。ナヴダーニャは地球と農民が守られる「非暴力の農業 Non-violent Farming」の実践を研究しており、緑の革命以降絶滅に瀕してしまった種を保存するシードバンクという活動を通して、生物多様性の保護とエコシステムの回復を目指す。

ヴァンダナ・シヴァ氏は、緑の革命に代表される化学農法を用いた大規模な農業を警戒した。化学農法がもたらす悪循環は、農民の自殺という事件をもたらししていた（次頁参照：**図 1 化学農法による悪循環**）。化学農法は害虫や土を殺しエコシステムを荒廃させ、化学肥料に耐えうる品種のみが生き残るモノカルチャーの世界を生むだけでなかった。高額な種や農薬、機械などの借金返済の苦勞に耐えかねた農民は、農薬を飲み自らの命を絶ったのである。1997 年以降 25,000 人もの農民が自殺している。また、経済成長に伴う急速な都市化によって、若者たちは都市に移動し農民の数が減少していることから、この循環はより悪化している。

シバ氏は種を集めなければ私たちの生存は困難であると説き、種の保存を始める。現在、国内各地のさまざまな NGO 団体と協力し、合計 16 州に 54 か所のシードバンクを設置し、3000 種の米、75 種の麦、何百種の菜種や野菜などの種を保存している。設立から約 20 年間で有機農法に関するトレーニングやワークショップを行い、50 万以上の農民が参加するネットワークをもつ。シードバンクから始まったナヴダーニャの現在の活動は以下の通りである。

- ・ アースデモクラシー、種・土・水・食の自治権
- ・ オーガニック・ムーブメント
- ・ 多様性のための多様な女性たち
- ・ フェアトレード
- ・ 気候変動
- ・ 教育: ビジャ・ビジャピース (Earth University)、学校教育プロジェクト Seed of Hope, Garden of Hope

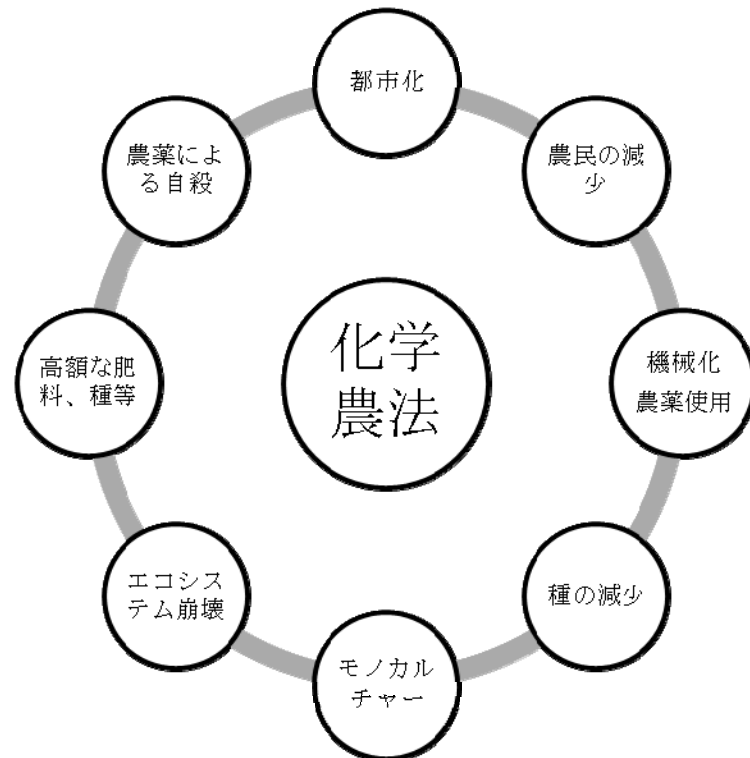


図1 化学農法による悪循環<sup>1</sup>

さまざまな分野にわたるナヴダーニヤの活動の中核にあるのは多様性である。種を始めとして人や地域が多様性をもつことで一つの範囲に縛られることなく、さまざまな選択肢から自らの生きる道を選ぶことができる。それは、人々が化学肥料や企業による大規模農業などに頼らない自立した農業や生活が営めるようにすることを意味している。シードバンクを通じたナヴダーニヤの活動は地球の生態系、地域や人々の権利や環境を守る正の循環を生み出している。

ナヴダーニヤはシードバンクを通して種の一種類一種類を救うだけでなく、エコシステムの回復と多様性の保護、農民一人ひとりの安定し自立した生活の保障を実現している。

### ナヴダーニヤのサスティナビリティ

右肩上がりに経済成長を続ける一方でインド独自の自然や文化が失われつつある今日、ナヴダーニヤは虐げられている弱者—種、農民、女性など—が自立・自律することができるように支援している。「小さき」者にも権利があることを意識づけ、メインストリームから外れオルタナティブな農業や生活のあり方を示す。

ナヴダーニヤが持続する一つの理由としてあげられるのは、それを支える哲学的な基盤が確固としてあるためである。ナヴダーニヤの代表者であるバート氏は、ガンディの思想に根付いていることを認め、そこから多くの影響を受けていると述べる。ナヴダーニヤを

<sup>1</sup> ナヴダーニヤ代表者バート氏への聞き取り調査（2011年2月9日実施）、ナヴダーニヤのHP（<http://www.navdanya.org/>）をもとに作成。



支える哲学的基盤は、図 2 のように図示することができる。

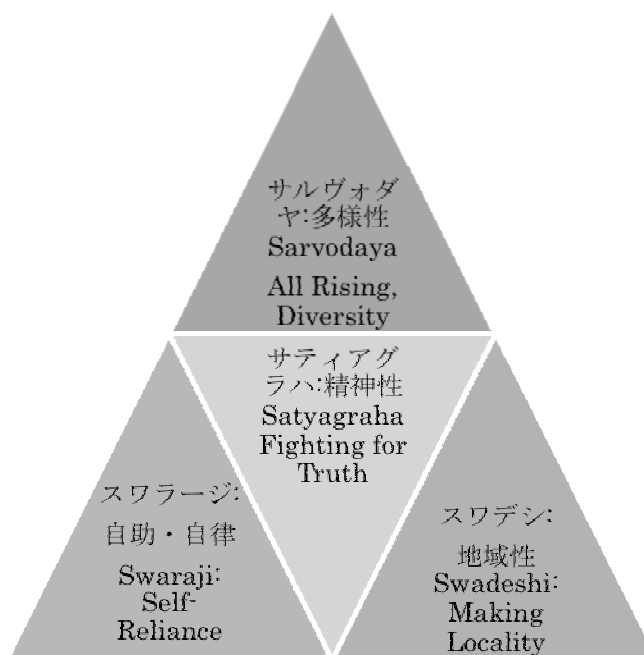


図 2 ナヴダーニャを支えるガンディの思想<sup>2</sup>

中核でありかつ基盤となるのは、精神状態を示すサティアグラハ（真理のために闘うこと）である。現代社会のメインストリームとなっている資本主義やグローバリゼーションという大波に対抗するために抱く確固とした精神性を示す。強大な勢力に負けない心・精神性を鍛え保持することの重要性をシバ氏は説いた。

次に社会的状態を示すサルヴォダヤは、植物、動物、土、水など地球に生きる物すべてに権利があり、さまざまなものが共生している多様性を表す。個人においては、自らがもつさまざまな可能性に目を向けるようにする考え方である。

第 3 に、主に経済的側面を示すスワデシは地域性を表す。都市やグローバリゼーションに目が向けられる傾向にある今日、失われつつある地元の産物や文化の回復を目指し、地域経済が活性している状態である。

最後にスワラージは政治的側面を示す。メインストリームに頼らず自らで判断する力を養い、自律した状態を表す。

これらの要素は個人・地域・国家レベルでも適用できる。4つの要素は小さくあることや地元の文化を重視している。これら4面がバランスよく発達することが求められ、精神性を示すサティアグラハを基盤として3面が組み合わせられたとき、図2は三角錐（すい）となる。その中身は個人や社会または国家の幸せや健全さとして考えられるだろう。どれか一面でも不足したり、3面のバランスが崩れたりしたときには中身はこぼれてしまう。

<sup>2</sup> ナヴダーニャの教育機関であるビジャ・ビジャピース（Earth University）の「ガンディとグローバリゼーション」コース（2010年11月24日・12月4日）での講話をもとに作成。

それは、物足りなさや不安、不満、居心地の悪さなどを感じる社会を表していると言えるだろう。

ナヴダーニャは種の保存という活動をきっかけに現在さまざまな活動を行っている。創造的な地球の力に真理を見、生物多様性の保存のため有機農法を推進し、小規模の農業に従事する農民が健康に安定した生活をするができるように支援している。産業化や都市化などによって人々の生活に地球との関係性が見出せなくなりつつある現代社会において、ナヴダーニャは私たちがさまざまなものとの「全体的な関係 (Systems in Whole)」の中で生きていることを気付かせそれを実践することを促進する。換言すれば、ESD の目的とされている「価値観や行動、ライフスタイルの変容」の転機をナヴダーニャは提供していると言ってよい。機械や化学肥料などの使用が推奨される近代農業から、「小さき」者による小規模で有機的な農業への転換は、人々にライフスタイルや行動、価値観の変容をもたらした。

ナヴダーニャは二元論的世界観からホリスティックな世界観への転換が実現可能であることを私たちに示していると言える。この世界観にこそ、ナヴダーニャのサステイナビリティを理解する鍵があるように思われる。そして、その転換を成しえたのは人々の確固とした意思決定と強固な精神性が地に根ざしていったためであると推察される。

### ナヴダーニャからの技術移転の可能性

DESD(Decade of Education for Sustainable Development: ESD の 10 年)の指針を示す国際実施計画 (International Implementation Scheme: 以下、IIS) <sup>3</sup>において、持続可能な開発を構成する 4 要素—環境、経済、社会、文化—が相互に関連していると言われていることは周知の通りである。しかしながら、さまざまな ESD の実践においてどれか一要素が突出していたり調和が取れていなかったりするため、4 要素のバランスや相互関連性を読み取ることは難しい。

ナヴダーニャにおいて、私たちはその具現化を見ることができた。先述したとおり、ナヴダーニャは確固とした精神的基盤を持っているため、活動がさまざまに発展しても私たちはその一貫性を見出すことができる。それは、創設者のシバ氏が唱えるアースデモクラシー<sup>4</sup>という言葉からも明らかな通り、地球のあらゆるものに権利を認め、それぞれが虐げられたり支配されたりすることのない共生できる社会づくりである。ゆえに、ナヴダーニャは、環境、経済、社会、文化という 4 要素が有機的につながり合った調和した社会づくりを目指すのである。

確かに、ナヴダーニャは種の保存・有機農業という環境的側面が強く見て取れる活動を中心にしている。しかしながら、人々の意思決定や経済的自立、自律などを支援するその活動からは、環境・経済・社会・政治・文化的側面が有機的に関わっていることを読み取

---

<sup>3</sup> UNESCO. *UNDESD International Implementation Scheme*. 2005.

<sup>4</sup> Shiva, Vandana. *Earth Democracy: Justice, Sustainability and Peace*. South End Pr. 2005.(ヴァンダナ・シヴァ、『アースデモクラシー』明石書店、2007 年。)

ることができる。ナヴダーニャは、相互関連しバランスのとれた4要素が調和している持続可能な開発のあり方を示す優良事例として挙げるることができる。その要因はナヴダーニャの活動を支える思想に見出せられる。

ナヴダーニャを支える基盤は、「小ささ」から全体性を唱えたマハトマ・ガンディの思想にある。ガンディの示した相互関連する4要素(図2参照)がナヴダーニャの活動を支え、かつ方向付けている。社会・経済・環境という一つひとつの要素で分析される傾向にある持続可能な開発を、多様性や精神性、地域性、自律といった状態や性質で表し、4要素を関係性の中で捉えていることが特徴的であると言える。すなわち、全体のシステムの中で個々がどのように関係しているかを捉えることにある。

ナヴダーニャの活動自体は地域の特性が生かされているため、その活動を直接技術移転することは難しいが、ナヴダーニャが基盤としている考え方はサステナビリティを考える上で参考となるだろう。特に、4要素の中に環境面が明記されていないことは特筆に値する。地球に生きる上で自然とともに生きることがもはや当然のこととして受け止められており、またそのことが前提とされているためと考えられる。そして、4要素—サティアグラハ、サルヴォダヤ、スワデシ、スワラージ—が経済、社会や環境という領域に縛られることなく、全体性や関係性という調和の中で経済や社会などの要素が有機的につながっていることも理由として挙げられよう。

また、個人や社会、国家のどのレベルにおいても、サステナビリティに関わる活動には精神性が不可欠であることをナヴダーニャは提示している。それは活動や人々を支える基盤となるばかりでなく、地球がもつ計り知れない力や人類が追究してきた普遍的価値と呼応することで深く根付き、グローバリゼーションのような大きな流れにのみ込まれないために進むべき道に導く羅針盤ともなるからである。

私たちが持続可能な開発やESDを実践する際、環境破壊や人権侵害、紛争など直面する諸問題の緩和や解決のためのスキルや知識、方法の提示のみならず、それらの根底にある本質を問うことが求められているように思われる。それは、環境や経済、社会という個々の領域から議論されることは難しく、それらを俯瞰するように個々の領域の枠を超えた横断的かつダイナミックなところにあると考えられる。持続可能な開発を議論する上で、ナヴダーニャはIISが説く4領域、特に3領域—環境、経済、社会—の限界と、ホリスティックな世界観に基づく関係性の中で持続可能な開発やESDを考えていく必要性を示しているように思われる。



# コンパス・スクール

サステナビリティへの途上にある学校のためのグローバルネットワーク

(翻訳)



ドラフトコンセプト & ワーキングペーパー

Concept Paper BETA Version 5.0

Compass Education: Joel Bacha and Robert Steele

Compass Schools Network: School Sustainability Self Assessment

Contributions and drafting from Lister Hannah (1.11.10)

## イントロダクション

### 持続可能な開発において学校が果たす中心的な役割

*私たちは今、人類が自分たちの未来を選択しなければならないという、  
地球の歴史上重大な転換点にさしかかっている。世界がますます相互依存を強め、  
他からの影響を受けやすくなるにつれて、未来には大きな希望と同時に、  
大きな危機が存在している。*

#### —地球憲章—

学びの拠点として、および地域の要となる施設として、学校は、人類がその将来を選ぶ過程のなかで、もっとも重要な場所である。もし、地球憲章に引用されているような“大きな希望”——持続可能な開発——の存在する場所があるならば、それは、世界中の学校のなかで見つかるだろう。

持続可能な開発は、人々が、自らの可能性に気づき、地球のあらゆる生命を守り、高めていくような方法で、自らの生活の質をよりよくさせることのできる、ダイナミックなプロセスである。持続可能な開発のビジョンは、国連持続可能な開発のための10年の基礎文書として認識されている「地球憲章」においてはもちろんのこと、今では、世界人権宣言、アジェンダ21、グローバルコンパクト、ミレニアム開発目標といった数々の条約や宣言において、しっかりと表現されている。

こうした文書や条約のなかで打ち出された人間開発の課題に立ち向かうとするなら、それが学校へ示唆するところは非常に多い。学校は、学びの共同体として、教育活動や学校経営、ガバナンスを通して、持続可能な世界のビジョンを形づくっていく必要がある。

しかし、このビジョンを実現するために、ほとんどの学校は、自らの役割や適切な仕組みを摸索しているか、あるいは、その理解をまったく持っていない。学校は、現行の伝統的で知識伝達型の教育から転換型の教育へと、その中心をさらに変えていく必要がある。これは、学校コミュニティ内のすべての人々——理事会、経営陣、教員や職員、生徒、保護者、地域住民や地方自治体など——の活発な参加を促すモデルへと、大きな影響をもったパラダイムシフトである。

サステナビリティのビジョンを達成するには学び、共通の目標をつくり、その目標達成のために協働するすべての人々の関与を促し、彼らの可能性をひらき、力づけることを通して、学校経営のあらゆる面において、包括性、思いやり、相互の尊重といった精神が広くいきわたる必要がある。生徒たちは、このようにして、全校をあげた学びの共同体の核となる。それは、教室のなかでサステナビリティについて学ぶだけでなく、学校の内外で、サステナビリティ（の概念）が形作られ、実践されていく様子を経験することでもある。このビジョンに向かって動く学校は、したがって、学校の計画策定、カリキュラム、教育・学習活動のなかにサステナビリティを一体化させ、さらには、学校のインフラやその維持においてもサステナビリティを取り入れていくよう試みる。

学校のリーダーたちは、学校自体のサステナビリティを計画し実践するために、自らの学校をこのホリスティックで参加型のアプローチへと導いていく重要な責任を担う。彼らの目的は、サステナビリティの実践が、学校のミッション、ガバナンス、運営や教育・学習活動のあらゆる局面に確実に埋めこまれていくように、全校をあげた取り組みをリードしていくことにあるべきだろう。

持続可能な学校は、実際の場所で、実際の人々とともに、実生活に即した挑戦に立ち向かうことで、ダイナミックで活気のある学習環境をもたらす。生徒たちは、自分たちが地球に及ぼしている影響を理解するだけでなく、意思決定に貢献し、日常生活や学校コミュニティの運営に携わることを通して、サステナブルな実践が実際に行われているのを経験することができる。

教室のなかで語られる価値観や態度は、人々の日常生活のなかで習慣化する。学校は、自らが教えている通りに自ら実践していなければならない。価値観は、学校の方針や日々の活動のなかで確かなものとなり、その結果として、単に教えられるだけでなく、実践されるものとなる。

学校のリーダーたちは、以下のようなアプローチをとるべきである。

- 確かな根拠に基づき、実践的で、眼前かつ将来のニーズに関連している
- 現行の、および現在培われつつある専門性に基づく適切なリソースがあり、長期的な計画および財源に拠っている
- 内省プロセスを促すためのモニタリングと評価に適している
- 反応がよく、開かれた心で、適切かつ柔軟である
- 真に変革をもたらす決意があり、創造的で斬新な考え方や実践を生み出すキャパシティがある

持続可能な開発のための教育の核となる教育学は、現在のベストプラクティスとして世界的にいつそう受け入れられつつあるものを反映している。

- 生徒中心で、すべての人々がもっている多面的な知能を認めている
- 探究に基づき、構成主義的で、脳全体の経験学習に関して神経科学から導かれることを土台に、学習内容を文脈に位置づけ、できるかぎり教科を統合し、以下を促進している：
  - ・伝統的な分野別領域を超え、一本化された学際的な指導
  - ・サービ斯拉ーニングの機会を通し、知的経験および実体験を提供する学習経験として、地域に根ざした探究活動
  - ・教育・学習活動をよりよくするために、実績あるこれらの教育学をつなげる“場”として、地元の自然や地域の環境が機能する“場に根ざす教育”
- 振り返りの習慣という基礎に根ざし、創造性やシステム思考、批判的思考、ホリスティックな思考のスキルを奨励する。

- 個人学習及び協働学習を合体し、必要な場合は確実に協力を促し、コミュニケーション能力や分かち合い、ともに発見する能力を高められるようにする。
- 共感力のある個人の育成や、ジェンダーや人種、言語、その他生活環境の違いによりさらに高まる人間性をもった、配慮やまとまりのあるコミュニティの育成に注力する
- 「壇上の聖人」ではなく「ともに歩むガイド」として、ともに学ぶ人として、生徒が自らの学びにオーナーシップをもつための力づけをするファシリテータとして、教員を位置づける

要約すると、サステイナビリティへとつづくホールスクール・アプローチは、学校のビジョンに始まって、以下にあげるような学校生活のあらゆる局面においてはっきりと扱われる。

- ・学校の組織、ガバナンス、運営
- ・学校のデザイン（現状のインフラの制限のなかで）
- ・校庭の開発と運営
- ・学校による資源の効率的な利用（水、エネルギー、製品や材料など）
- ・学区域とのいっそうのコミュニケーションや、地域やその他の施設を超えたつながり
- ・校舎内や校庭内の自然環境や遺産の保護
- ・持続可能性や持続可能な開発の、教育・学習活動への統合

サステイナビリティを包括する学校は、以下の項目に重点的に取り組むべきである。

- ・学校コミュニティ全員（生徒、教職員、保護者）の社会的および感情的なニーズに応える
- ・多様性を重視し、尊重する
- ・健康的な生活を促進する
- ・ローカルおよびグローバルな環境を守り、地球規模で考え、地域に密着した行動を起こす
- ・生徒だけでなく職員やより広いコミュニティ内で、みんなが変化を起こせるという自信を育む

## コンパス・スクール

コンパス・スクール・ネットワークは、この考え方を国際的な協働と発見のプログラムの基礎とし、小学校・中学校・高校が私たちの時代の大きな挑戦に立ち向かっていくために、自らを導く手助けとなる共通の枠組みとして「サステイナビリティのコンパス」を用いる。

## Learning to be(「人間存在を深める学び」)。

コンパス・スクールのプロセスはホリスティックであり、教育国際委員会がユネスコに提出した1996年の報告書「学習-秘められた宝」に示されていたような場に根ざす教育の特徴と一致している。この報告書では、学校での経験を超え、人々の人生を通じて起こってくるサステイナビ



リティに関する教育の、4本の柱を紹介している。その4本の柱とは、1) 知ることを学ぶ、2) 為すことを学ぶ、3) 共に生きることを学ぶ、そして 4) 人間存在を深める学び である。

コンパス・スクールは、生徒や教員、その他の職員、地域住民、保護者、地方自治体、地方のメディアやビジネス界など、学校に関わるコミュニティのすべての人々に関わってもらうことで、これらの4本の柱を実行に移していく。コンパス・スクールは、チームワークを奨励し、すべてのレベル、つまり世界規模、地域、そして個人で、持続可能な開発に貢献する方法で学校を運営していくために必要なことについての共通の理解を促す。

最後に、コンパス・スクールは、**変革することを学ぶ**、という5本目の柱があるという立場に立っている。コンパス・スクールは、学校コミュニティ全体に浸透し、学校のネットワークが地元のコミュニティやさらにそれを超えて広がるようなつながりを通して、変革をもたらすような教育を実践する。

## 全体像

今日私たちが直面するグローバルな課題について考えてみると、それらは計り知れない。気候変動、自然災害、貧困、非識字、食糧安全保障、不健康や非衛生など、並べあげるときりがない。しかし、グローバルな課題について心に留めておく必要があることは、これらはほとんどすべてが単独で起こるのではなく、眼に見えない、無数の、認識されていないこともあるような連鎖の関係につながっているということである。あるひとつの問題をいくつかの異なる視点から見ると、そのほとんどは因果関係でつながっている。例えば、自然資源は職業に、職業は収入に、収入は食べるものに、食べるものは栄養に、栄養は健康に、健康は学習に、それぞれ影響を及ぼしている。

サステナビリティを扱うためのカギとなるステップは、これらの関係や、その関係が依拠する体系—気候体系、金融体系、学校体系、教授体系、呼吸器系など—について理解するための学習である。それぞれの体系は、いくつかの因果関係によって成り立っている。例えば、気候体系のなかでの関係は、ローカルな水のサイクル、農業生産、移動性の生物種、伝染病発生などに影響を与えている。この気候体系のなかでの関係のバランスがとれているときは、地球の気候パターンはかなり予測しやすい。しかし、これらの関係が変わったとき、気候パターンは変化し、洪水や台風、さらには地滑りなど、予期せぬ自然災害が引き起こされる。グローバルな課題と、その課題が生み出すこれらの体系は、ほとんどすべての場所に存在している。地域においても地球規模でも、経済、社会、文化、そして環境においても、さらには世代をまたがっても存在している。これらの体系がどのように働くかを理解することは、生徒や学校にとって、害を及ぼすような変化を最小限にし、彼らの地域のウェルビーイングを促進する大きな助けとなる。

## コンパス・スクールとは？

コンパス・スクールとは、このように、サステイナブルな学校になることを目指す学校であり、ひとつの地点に重要な関係者や問題を集約し、学校のサステナビリティへのビジョンへむけた共通の方向性を計画するために、簡単で、ホリスティックな方法として、アラン・アトキソンらによって開発されたサステナビリティ・コンパスを、全校をあげた枠組み、またはレンズとして用いる学校である。コンパス・スクールになるためのスタート地点は、コンパス、つまり方位磁針の例えのなかにある。つまり、現在地を測り、よりサステイナブルな学びと暮らしにむけた方向性を定めることである。

サステナビリティ・コンパスでは、4つの方角（N=北、E=東、S=南、W=西）を用い、それは、人間の生活のなかで相互に依存しあっている4つの側面を反映している。



### ◆ N = Nature （自然）

すべての生命体が拠って立つ自然の体系。

この側面におけるサステナビリティは、地球の物理的および生物的限制、つまり地球の生命維持システムのなかで生きること、そして地球の生態系の健全な機能に貢献することを意味する。

### ◆ E = Economy （経済）

人類に、商品やサービス、意義のある仕事をもたらす経済の体系。

この側面におけるサステナビリティは、経済の実行可能性、持続力、繁栄を意味する。

### ◆ S = Society （社会）

学校のコミュニティなど、人々のまとまり、アイデンティティ、安全や自由をもたらす社会的・文化的な体系。

この側面におけるサステナビリティは、社会の安定や包括性、平等、一体性などを保つことを意味する。

### ◆ W = Well-being （ウェルビーイング）

個々人やその家族にとっての健康、幸福、生活の質。

この側面におけるサステナビリティは、賢い選択によって、個人の健康や機会、充足感や幸福をもたらすことである。

これら「4つのコンパス・ポイント」は、サステナビリティに関する学びのための、簡潔か

つ明確で、ひとつの包括的な枠組みを提供するものである。そしてまた、培うべき態度や行動を積極的に形成する場としての学校自身が、持続可能な方法で運営されるためのプラットフォームでもある。このコンパスは、以下のように使うことができる。

- サステナビリティの原則に沿った学校方針を定めるガイドや枠組みとして、サステナビリティの理念をより効率的に具体化する学校経営の助けとして、また、それらの進展についての測定可能な指標をつくる助けとして。
- 教室での授業で用いるホリスティックなレンズあるいはメンタルモデルとして、また持続可能な開発のための教育（ESD）に沿ってカリキュラム全体を構成する助けとして。
- 学校コミュニティの全員がつどい、持続可能な社会へとつづくこの重要な文明の旅に参加していると感じるための、共通のシンボルや「重心」として。

### 旅を始める：サステナビリティ・コンパスの実施

コンパス・スクールのアプローチや方法論は、学校生活において、サステナビリティ・コンパスの一般的な側面をより具体的な活動分野に翻訳することであり、ここではそれを**コンパス・スクール・ポータル**と呼ぶことにする。このポータルは、学校経営、ガバナンス、財政や資金集め、資源の管理や消費、労働・学習環境、個人の健康、環境意識と行動、ネットワーキングや参加、カリキュラムデザインや教育方法の発展などを含む。

コンパスを実施し、コンパス・スクールになるための旅を始めるには、鍵となる5つの入り口（ポータル）がある。これらの活動領域は、コンパスやISIS（指標、体系、創造、戦略）アプローチを適用することができる場所であり、学校の内外で新しい考え方が生まれ、活動が起こり、また持続可能性の文化が涵養することができるだろう。これらの領域には、以下のようなものがある。

- 1) 学校のガバナンスおよび運営
- 2) 教育と学習活動
- 3) 管理、運営およびサポート
- 4) 校舎と校庭
- 5) ネットワーキングとパートナーシップ

このようなポータルが見つかり、ある疑問がわいてくるに違いない。コンパス・スクールのワークショップに参加したら、次はどこから始めればいいのか。すべてのことを一度にやってしまうとすべきだろうか、それとも、今、何らかの変化を起こすために、もっとも影響力がありそうなところから始めるべきだろうか。その答えは、もちろん、その学校の現状による。特に、学校の経営陣や、教科主任など教授陣のリーダーシップに関係してくる。突き詰めて考えると、このプロセスをはじめるにあたり、潜在的な可能性が最も大きく、戦略的に重要なふたつのポータルがある。それは、ガバナンスと運営、そして教育と学習活動である。

## 1. ガバナンスと運営

この文書のはじめに、学校におけるリーダーシップの重要性を強調した。そして、もし正しい状況であれば、ガバナンスと運営というポータルの活性化が非常に重要で、それは、サステイナブルな学校としてどのように見られたいかというビジョンづくりや、サステイナビリティの概念を学校の理念に織り込む際に、決定的な意味をもつ。そして、このプロセスを通し、関係者を巻き込み、彼らの可能性を引き出し、力づけすることで、関係者全員が、学校全体でこれ以外のポータルの発展に取り組む際の大きな支えとして、効率的かつ効果的に、活気をもたらしことができる。理事会や経営陣は、彼らに与えられた権威を考えると、このビジョンを具現化し、持続可能な未来へつながる教育の型をつくる責任を担うことができるだろう。

よいガバナンスと言えるのは、意思決定が学校コミュニティ全体に割り振られ、生徒や保護者、その他の関係者が適切に関与する場合である。そうすることで、経済や環境、社会的に健全な方法で、学校がもつ物的および人的資源を最大限に活用することが可能になる。

このプロセスは、実際には次のように始まるかもしれない。まず、校長や幹部、理事会の核となる思想的指導者、保護者、教職員、そしてリーダー的な生徒たちが、コンパスの考え方に馴染み、学校コミュニティのなかの他のメンバーたちにこの意義や重要性を伝えることができるようになる。この最初のグループは、コンパス・スクールの今後のプロセスのために、運営委員会、またはサステイナビリティ・リーダーシップ・グループとして活動できるだろう。

例えば、はじめに、このグループは、少なくとも半日程度、自ら、またはスキルのあるファシリテータの助けを得て、自分たち自身をコンパスの考え方に慣れさせる。そして、まず自分たちがもっている資源や懸念を、それぞれのコンパス・ポイントの範囲で一覧にする。そして、この一覧表が、コンパスの四方位のバランスをとりながら学校の将来のビジョンを描く基盤にする。

このプロセスは、このコンパス・スクールの旅の明確なゴールやそれから期待される長期的な成果を確立すること、途中の道標を設定するステージになる。そしてそれが、どのようにその他のポータルに着手し、それを円滑化するかという戦略をたてることにつながるだろう。

また、このグループはさらに一歩進んで、学校経営におけるサステイナビリティ指標を特定することもできるだろう。定期的なミーティングを利用したり、専門のプロジェクト・チームを組むことで、余分な負担を感じることなく、この指標特定のプロセスを進め、学校生活に付加価値を生み出すことができる<sup>1</sup>。一度この枠組が完成すると、あるいはその途中であっても、このリーダーシップ・グループはコンパス・ポイントやそれぞれの指標の間にある非常に重要なつながりを探しはじめるだろう。教室から地域全体まで、学校活動にかかるより包括的で体系的なイメージを描きはじめるだろう。そして、このグループは、サステイナブルな学校になるための参考となるような、革新的な新しいプロジェクトやイニシアティブ、政策やプログラムを探し始めるだ

---

<sup>1</sup> コンパス・スクール・ネットワークのメンバーは、このプロセスのガイドとなるツールやマニュアルを入手できる

ろう。リーダーシップ・グループはまた、これらのイニシアティブを成功裏に実施するために、計画や戦略をたてることもできる。

## 2. 教育と学習活動

しかし、現実には、学校の理事会や経営陣は、コンパス・スクールになるための第一歩を積極的に踏み出す準備ができていないことが多い。そのような場合に最善のアプローチは、イノベーション普及理論によると、単純かつ小さなアプローチから始めることである。つまり、コンパス・スクールの概念やツール、枠組みを使うのに最も有利な場所で、目に見える結果や認識されている強みがはっきりとわかりやすい場所である。

多くの場合、こういったことが起こりやすい場所は、一つひとつの授業が行われる教室である。これは、決してカリキュラムを書き換えたり、覆したりすることを意味しているわけではない。しかし、単純に、これから扱う学習領域を、コンパスをレンズとして見てみると、生徒にシステム思考を促すことができ、それによってその教科に対する生徒の理解を豊かにすることにつながる。これは、付加価値のある学習経験をもたらす。

成功している教育プログラムでは、カリキュラムや教育・学習プロセス、教授法が、効果的に統合されているだろう。学習プロセスで重要な点は、「どこで」学習が起こっているかである。校内にも、コミュニティを広く超えたところにも、興味をひく多種多様な学習環境がある。さらには、サステナビリティ教育は、実践的かつ体験可能で、実験的な、生徒の疑問から発する学習に価値をおき、それはまた、私たちの知識や価値観、行動について、探求していく際の協働プロセスや、実際の行動、振り返りを含み、これらを通して、継続的にサステナブルな行動を促すことを目的としている。

一度この考え方が他の教授陣に紹介されると、それがスケールアップし、カリキュラムや計画の策定にも援用することができるかもしれない。そして、学校のリーダーたちとの議論の場が開かれ、学校のガバナンスや方針づくりに影響を与える可能性もある。また、それが他のポータルへとつながっていき、校舎や、学校活動、造園、または学外のコミュニティとの関係などといった側面にも反映されるかもしれない。実際に、「カシの大樹ももとはみなどんぐり」という諺が学校で実現してきているのである。（添付資料参照）

コンパス・スクールの実施にあたり、他のいずれかのポータルが最も取り組みやすいという場合もあるかもしれない。しかし、これまでの経験から、以上ふたつのポータルからはじめるのが最も適切なようである。以下に、その他3つのポータルについての簡単な紹介をする。

## 3. 学校の管理、運営およびサポート

学校は、その敷地に対する環境的な価値観を認識し、守り、改善することや、そのエコロジカル・フットプリントの削減に責任をもつことで、持続可能な組織へと変わっていくことができる。最初の取り組みとして、学校は、ゴミを減らす、エネルギーや輸送、水の消費を最小限に抑える、

リサイクルするものを増やす、校庭の生物多様性を奨励する、適切な購買行動をとる、売店の商品が環境適用品かつ健康なものにする、などが考えられる。サステナビリティにむけて動くためには、学校がその日々の運営をどのように組み立てるかが重要な点になってくる。これらの行動でできた貯蓄は、他のサステナブルな行動のために使うこともできる。

#### 4．校舎など物理的な環境

学校は、校庭や校舎など、その外観や体裁から判断されることも多い。校庭での（生物）多様性や植物が植えられている範囲を増やすことは、学校のイメージをよくするだけでなく、それを生徒たちの教育や環境活動に用いることで、そういった空間のもつ可能性を最大化することができる。動植物の生息環境をつくること、樹木の保温や保水のための覆いをつくること、学校菜園、造園、（もし適切ならば）生産的な事業づくり、ゴミの削減などを通して、生徒や教職員、保護者は、校庭の持続可能な運営に積極的に関わることができる。学校コミュニティの想像力や熱意さえあれば、その機会は無限に開かれている。現状の建物のデザインによっては学校ができることは限られているかもしれないが、古い校舎を改修することは、エネルギー利用の効率化にも関係してくる。ほとんどの学校にとって、最も影響力があるのは、校舎や校庭をどのように利用するのかということである。新しい校舎は、エネルギーの保存を優先事項としてデザインされるべきである。

#### 5．ネットワークとパートナーシップ

持続可能な開発をもたらす最良の方法は、ローカルなコミュニティとより広いコミュニティが協働することである。これには、その他の教育機関や地方自治体、商工会、地域団体やさまざまなネットワークとパートナーシップを結ぶことも含まれる。そうすることで、生徒の学習と、職業や地元の環境・社会の課題を結びつけ、生徒は、当事者意識を持って積極的に関わることができるようになる。パートナーシップを涵養する学校は、そうでなければ手に入らなかったような資源を受け取ることもあるだろう。

学校コミュニティの関係者の関与のなかで、保護者の強い関わりは、彼らの所属先とのつながりを通して、学校を超えたより広いコミュニティへのつながりという豊かな利点をもたらすことができる。上述のようなネットワークやパートナーシップを築くにあたり、これは非常に大きなきっかけとなるだろう。

#### 結論：サステナビリティの学校文化をつくる

それぞれのポータルを活性化することは、学校全体に、サステナビリティがよりいっそう織り込まれた学校文化の発展に寄与する。これは、サステナビリティの原則や態度、価値観や視点を促進するだけでなく、それによって、サステナビリティのツールや方法、枠組み、シンボル、言葉などが日常生活のなかに統合されていくことにもなる。また、4つ全部の分野における

サステナビリティの水準を、測定可能な指標を使いながらモニタリングすることを確実にし、ホリスティックな環境アカウンタビリティを促す。

さらに、コンパス・スクールのプロセスは、学校コミュニティにおける各分野の人々をつなぎ、彼らが意味のある方法で新たに結びつくことにより、数えきれないほどの有益な波及効果をもたらす。彼らは、協力や助け合いの方法や共通の目標や興味関心を新たに見い出すだろう。学校のサステナビリティを生み出すことはまた、学校の社会資本を生み出し、それにより、学校は変化のエージェントとなる。

### コンパス・スクール・ネットワークに参加する利点

学習における革新的な側面を強調することと一致して、このコンパス・スクール・プログラムに参加する学校にとっての利点は、以下のようなものがある。

- ・批判的な思考力や、文化を超えた視座、参画やシチズンシップについての生徒のスキルやコンピテンシーを生み出すような参加型の学習アプローチの増加
- ・カリキュラム内のすべての学習領域における、環境教育と持続可能な開発のための教育の統合
- ・学校コミュニティ（理事会から経営陣や校長、職員、保護者や生徒）すべてを巻き込んだ、より参加型かつ民主的な意思決定メカニズム
- ・学校のエコロジカル・フットプリント（生態系や天然資源に対する負荷）の削減やハンドプリント（持続可能性への貢献）の増加
- ・今後の行動にむけた定期的なモニタリング、ふりかえり、評価のプロセス（学校を学習センターとしてではなく、学習する組織として認識する）
- ・コミュニティ、家族や関係者の相互に役立つパートナーシップの発展

### コンパス・スクールが利用できるリソース

コンパス・スクールは、何よりもまず、学校それ自体が最高のリソースである。ネットワークに参加することで、世界中でサステナビリティのビジョンを実現しようとしている、自分たちのような学校の経験やアイデア、着想を入手することができる。

コンパス・スクールは、ISISアクセレーターツールキットの特別改訂版を入手できる。このツールにより、教員や運営に携わる職員、生徒たちは、会議や関係者のファシリテーション、指標の開発、チームビルディング、計画や変化のマネジメントなど、組織をサステナブルな方向へ動かすことに関する多くの重要な課題への実践的なサポートが得られる。このツールキットは、4段階のプロセス（指標＞体系＞革新＞戦略）を通して組織を導くもので、世界中で採用されているISISメソッドを取り入れている。

コンパス・スクールには、コンパス・スクール・ウェブサイトを通じたサポートもある。サイトには、このネットワークに参加している学校のケーススタディやその進展のための実践的な事

例などが紹介されている。また、このサイトは、経験を共有したり、質問を投げかけたり、アドバイスを得たり、役に立つリソースや情報を探すためのウェブフォーラムやデータベースも提供しており、サステイナブルな学びや運営につながるその他多くのツールや方法を掲載している。このISISメソッドを使うと、その他の手法をサステイナビリティ・プログラム全般に援用することが容易になる。

コンパス・スクール・ネットワークのメンバーは、サステイナビリティに関して非常に高いスキルを有するグローバルな教育者やファシリテータのチームに優先的にアクセスすることができ、必要なときに、彼らからプロフェッショナルなサポートが得られる。コンパス・スクールのファシリテータは、現場でも、インターネットや電話を通じてバーチャルでも活動しており、計画立案や実践について、さらなるガイダンスやアドバイスを提供する。

最後になるが、コンパス・スクールは、教育分野の枠を超えてネットワークを築ことができ、サステイナビリティ・プログラムの実際的な施行をサポートできるビジネス界や国際機関、NGOらとつながることで、生徒や教員、職員のさらなる刺激となっている。

### コンパス・スクールになる

コンパス・スクール・ネットワークには、コンパス・スクール・ウェブサイトを通じた簡単な登録プロセスがあり、年間使用料としてXXXX米ドルが発生する。この価格には、以下のサービスが含まれている。

- コンパス・スクール・ウェブサイト上のすべてのメンバー特典
- 教室や学校経営においてISISアクセレーターツールを無制限に使用できるアカデミックライセンス（このライセンスは、学校がコンパス・スクール・ネットワークのメンバーでなくなった後も使用可能）
- 計画、実施、会議などを支援するコンパス・スクール認定ファシリテータやサステイナビリティのプロからの優先的サポート（サポート価格は別途かかるが、優先的な配慮の他、メンバー価格でのサポート）
- サステイナビリティのビジョンを共有する世界中の学校や、その旅の象徴や基準枠としてコンパスを採用した学校とのつながり
- その他多くの役に立つリソースへのリンク



コンパス・スクールへの参加は、以下のサイトにアクセスするか、以下のアドレスへメールを送付する。

<compass.schools@atkisson.com>.

コンパス・スクールの世界的なコミュニティへ、あなたの参加をお待ちしています。

コンセプト・ペーパー

リスター・ハンナ アトキソングループ シニアアソシエイト、プレミアム・センター  
(タイ) 名誉教授

ロバート・スティール アトキソングループ シニアアソシエイト  
システィナビリティ・アジア創設者

ジョエル・バチャ コンパス・スクール運営委員会

アイザック・ストッダード ウプサラ大学 (スウェーデン)

ベン・ロシェ アトキソングループ シニアアソシエイト

クリスティナ・アトキソン アトキソングループ シニアアソシエイト

アラン・アトキソン アトキソングループ会長、編集者

## 資料 1

### サステイナビリティ・コンパス、コンパス・エデュケーションの由来

サステイナビリティ・コンパスは、1990年代後半、サステイナビリティ指標に関する国際調査プログラムへの貢献のひとつとして、アトキソン・グループの創始者であるアラン・アトキソンによって開発された（AtKisson, 2008）。この枠組みは、その後、コミュニティによる指標開発のためのプラットフォームから、企業のサステイナビリティやCSRアセスメントとそのマネジメント、包括的な水資源の管理、関係者間のダイアログマネジメントなど、いくつもの場で応用することのできる、サステイナビリティについての一般的な枠組みへと発展し、やがて、それがコンパス・スクールやコンパス・エデュケーションに発展した。この分野で先駆的な環境経済学者ハーマン・デイリーの理論的著作を参考に、東西南北の4つの方位は、経済、ウェルビーイング、社会、そして自然と読み替えられた。

コンパス・エデュケーションの概念は、当初、コミュニティ開発の実践者たちを対象としたアトキソン・サステイナビリティ・ワークショップの後の話し合いのなから「コンパス・スクール」の名のもとに生まれた。このワークショップには、教員や、インターナショナルスクールの担当者、WWF (World Wildlife Fund) タイ、ラオスの教育省などから多くが参加した。これらの多くの教育者とともに、持続可能な開発のための教育や場に根ざす教育の手法・ツールであるサステイナビリティ・コンパスの多分野にまたがる意味合いが直感的に関連づけられていった。

2008年後半、サステイナビリティ・コンパスはアジアの学校へと広がり始めた。その後間もなくして、アトキソン・グループのシニアアソシエイト、アラン・アトキソン、ロバート・スティー、リスター・ハンナ、およびベン・ロシェらによって、コンパス・スクールの概念はおおよけに打ち出されることとなった。コンパス・スクールは、2009年1月、国連「持続可能な開発のための教育の10年」(DESD) に対するアトキソン・グループの貢献として正式に開始した。

幼稚園から高校までの教育機関におけるコンパス・スクール、高等教育機関のコンパス・ユニバーシティ、そして省庁や開発実務者への継続的な支援を通じたアトキシソンの活動を統合し、2010年8月、コンパス・エデュケーションという概念がまとまった。コンパス・エデュケーションは、次のふたつの目的をもった、正式なプラットフォームとなっている。1) サステイナビリティについてのホリスティックな考え方を促進するためにサステイナビリティ・コンパスをすでに導入している学校や大学間での共有、2) コンパスを新たに導入しようと考えている教育機関や開発実務者への支援。

## 資料 2

### 学校のサステナビリティへとつづく進路を決める

コンパス・スクールの中心は、サステナビリティに関する4つの独立したコンパス・ポイントである。ちょうど、地図の「方位」がひとつでも欠ければ完全でなくなるように、学校のサステナビリティを実現するには、4つすべてのコンパス・ポイントが等しく重要である。

#### **N: 自然**

すべてのヒューマンシステムは自然環境と自然遺産に拠って立つ。地球の自然体系は、すべての生命や私たちが必要とするすべての資源の源であり、ここ数十年間で私たちが学んできた通り、私たちの廃棄物の行き着く先である。廃棄物の行き先が埋まり、資源が枯渇するにつれ、こうした自然体系の機能は大きな脅威にさらされつつある。

この側面でのサステナビリティは、地球の物理的および生物的限制のなかで生きることの意味しており、地球の生態系の健全な働きに寄与することである。

学校のサステナビリティの側面に、学校運営（管理、経営、教育、社会）に関するあらゆる局面がどう影響するかを測るには、サステナビリティの測定可能な指標として、以下のような要素からみてとることができる。

- ・ 空気や水、土、景観、生物多様性など、学校の責任の下にある天然資源の質
- ・ 校舎や校庭に使われている材料
- ・ 使用している設備や機材が自然環境に与える影響
- ・ 資源の消費と廃棄物の処理
- ・ エネルギーの消費と自然エネルギーの利用
- ・ キャンパスの清潔さ、およびキャンパスの健康さを支える衛生対策
- ・ 地元や地域、地球規模で、コミュニティとしての学校が、地球温暖化、森林破壊、生物多様性の喪失、空気・水・土壌の汚染など、学校を超えた環境問題に関与している度合い
- ・ 学校の教育課程で、フォーマルおよびインフォーマルの双方でおこる学び

#### **E: 経済**

このコンパス・ポイントは、天然資源を加工することで成り立つヒューマンシステム、食品や商品、サービスといった人間の発明を支えるインフラストラクチャを意味している。自然が生活に欠かせない未加工品をもたらすとすれば、経済は、そうしたものを私たちが必要とし、満足する、美しいものへと加工することを意味する。私たちは、自らの生存のため、自然と経済に頼っているのである。

この側面でのサステナビリティは、経済の実行可能性、活気、そして繁栄を維持することを扱う。学校のサステナビリティの側面に、学校運営に関するあらゆる局面がどう影響するかを測るには、サステナビリティの測定可能な指標として、以下のような要素からみてとることができる。

- ・ 財政：支出に対する歳入のバランス、資本投資、積立金
- ・ 学費や資金集めなど、収入源と収入の程度
- ・ 雇用契約と福祉手当
- ・ 労働条件と労働量
- ・ 施設、設備、教材への投資
- ・ 広報活動やマーケティングへの投資
- ・ キャリア相談やカウンセリング、財政支援
- ・ 地元の学校周辺、地域の内外で、雇用レベルや、手の届く価格の住居や食料品、生活必需品の入手しやすさや公正な取引、生活の質、生産物や生産性、商工業、都市化、テクノロジー、輸送や消費者主義などその他のテーマを含む経済的側面に、学校がどのように影響を及ぼし合っているか
- ・ 学校の教育課程で、フォーマルおよびインフォーマルに、両方でおこる学び

## **S:** 社会

このコンパス・ポイントは、社会的集団、社会のシステムや機関など、人間生活の組織化を示す。これは、差別からの解放や、平和に生きる機会など、基本的人権を普遍化していく条件を生み出しながら、私たちが協力して働く能力や、まとまりや安定性を生み出す力を反映している。

この側面でのサステナビリティは、社会の安定性、平等、発展や社会的つながりを支えることを意味する。

学校のサステナビリティの側面に、学校運営に関するあらゆる局面がどう影響するかを測るには、サステナビリティの測定可能な指標として、以下のような要素からみてとることができる。

- ・ 学校コミュニティとしての社会的つながり
- ・ 権力、政策、意思決定に関する包括性や透明性
- ・ 適切かつ支持的で、効率的な組織構造およびシステム
- ・ 個人や個人の権利、男女平等、社会正義への理解と尊重
- ・ 異なる文化や信仰への理解、多様性や差異の尊重
- ・ 紛争解決、和解、平和的共存への準備
- ・ 職場における健康と安全

- ・物理的および精神的嫌がらせからの安全
- ・労働・学習環境と組織の士気
- ・個人や集団による達成や成功への承認や報酬
- ・キャリアや専門能力開発のための機会や達成感
- ・学校がこの社会的側面に、地元で、地域で、世界規模で、どの程度影響を及ぼし合っているか（政治や政府、安全保障、身の安全、健康、治安やその他のインフラサービス、貧困や文化の認知などの課題を扱う）
- ・学校のプログラムのすべてでおこる、この分野のフォーマルおよびインフォーマルな学びの質

## **W: ウェルビーイング**

このコンパス・ポイントは、個人の健康や幸福、発展、達成感など、どのように定義し経験するにしても、私たちすべての人間的・文化的多様性における生活の質全般を示す。幸福かつ健康で、バランスのとれた人々や家庭がなければ、よい意思決定がなされることはないし、社会が維持されることも、経済が適切に管理されることも、自然体系が丁寧に扱われることもない。ウェルビーイングは、人間の努力の目的であり、また世界に対して健全な責任をとるための必需品でもある。

この側面へのサステナビリティは、賢い選択を通して、個人の健康や、機会、達成や幸福を可能にすることである。

学校のサステナビリティの側面に、学校運営に関するあらゆる局面がどう影響するかを測るには、サステナビリティの測定可能な指標として、以下のような要素からみてとることができる。

- ・労働量と公平さ
- ・個人の健康や調子、栄養、摂食障害や病気、ストレスへの対応
- ・内省的で前向きな態度、精神力の発達、うつや自己中心主義、劣等感への対応
- ・知的な挑戦や創造力を発揮する機会
- ・キャリアや専門能力の開発のための機会
- ・倫理的な行為、意義、目的や幸福に対する肯定的な感覚
- ・学校がこのウェルビーイングの側面に、地元で、地域で、世界規模で、どの程度影響を及ぼし合っているか（個人の日々の生活の質、心身の健康、家族構造や関係性、安心な労働条件、教育レベル、居住環境、栄養）
- ・学校のプログラムのすべてでおこる、この分野のフォーマルおよびインフォーマルな学びの質
- ・置かれた環境のなかでの、個人の幸福や楽しみに関する一般的な感覚

### 資料3

#### ケーススタディ-PTISインターナショナルスクール（タイ）

「コンパスは簡単。生徒と議論を深めることができるし、とても扱いやすい。」

-5年生担当の教員-

PTISインターナショナルスクールの教師たちは、コンパスを使った経験を非常に肯定的に話した。コンパスは、ウェルビーイングについての考えを促し、概して、生徒や教員の間で批判的思考のレベルが高まったとコメントした。以下に、より広い学校コミュニティのなかで、コンパスが使われたいくつかの方法を示す。

- ・ カリキュラム計画：教員は、読み書き、算数、科学、歴史などの教科で、授業計画をつくる際にコンパスを用いた。コンパスは、彼らがより創造的に授業を組み立て、既存の枠組みの外で考える手助けとなったとしている。
- ・ 戦略計画：教職員や保護者、生徒の代表は、学校コミュニティ全体のサステナビリティを調べるためにコンパスを用いた。その第一歩として、一日の学校ワークショップを開き、彼らの学校の文脈におけるサステナビリティについて具体的な議論を行った。計画の前向きな結果のひとつとして、エネルギーの消費が削減され、そのおかげで学校の貯蓄が増えた。
- ・ 学校給食：4年生は、学校給食のメニューをみるレンズとしてコンパスを用いた。その結果、給食のメニューはより健康的なものになり、今では、学校はより多くの野菜や果物を地元で買うようになり、結果として学校食堂のコストが削減された。
- ・ 科学フェア：生徒たちは、小さなグループでコンパスを用い、学校の科学フェアにむけたプロジェクトをデザインした。
- ・ コミュニティプロジェクト：中学校の生徒たちは、コンパスを用い、地元の寺院の野良犬を助けるため、「犬を引き取る」プロジェクトを行った。このプロジェクトを実施する前は、地域のあちこちで犬がうろつき、吠えたり唸るなどして、地域の衛生面の問題となっていた。この状況は、地域のビジネスの幸福度に影響していた。生徒たちは、コンパスを用いてプロジェクトをデザインし、地域の寄付や、NGOとのパートナーシップを通して、このプロジェクトを実施した。今では、このプロジェクトによって助けられた犬は健康になり、餌も与えられ、その多くは去勢されるに至った。

## 資料4

### 学習ツールとしてのコンパス

サステイナビリティ・コンパスの学校への導入が検討されるには、第一に、コンパスが学習の役に立つものでなければならない。そして、それはまさに、コンパスが目的としているところである。ひとつに、コンパスは、生徒や教員、学校の経営者たちが、授業計画や行事についての教室でのディスカッションといったものから、生徒主導のプロジェクトや学校計画といったものまで、多くのレベルでシステマティックに考える助けとなる。

二酸化炭素の排出と気候変動を例にとってみよう。気候体系を理解することによって、大気中に二酸化炭素を放出することは、洪水や台風、海面レベルの上昇、生物多様性の喪失など、多くのグローバルな問題に影響をもたらすものと理解することができる。そこで、気候体系全体を考えることによって、私たちはそのテーマをさらに深めていくための問いを投げかけることができる。二酸化炭素排出の原因は何だろうか？ 二酸化炭素排出はどこからくるのだろうか？ 大気中に二酸化炭素を放出しているのは誰だろうか？ 最後に、その体系のなかにある異なる要素をみてることで、これらの問いに答えを見出し、体系のなかのさまざまな要素がどのようにつながっているのかを理解するために、より深く探求していくことが可能になる。

- ・二酸化炭素は、石炭・石油の燃焼など、さまざまな原因で放出されている。それでは、石炭や石油はどこからきているのだろうか？
- ・石炭や石油の燃焼は、多くの影響をもたらす電力消費の直接の結果である。それでは、電力消費は他にどのような影響を及ぼしているのだろうか？
- ・電力消費は、電気やエアコンなど、あらゆる場所で電化製品を使用することが原因だといえる。それならば、なぜ電化製品は使用されているのだろうか？

最後に、扱っている体系のなかで、具体的に変化を促すための影響をどの部分に与えることができるかを見つけることができる。気候変動を扱ったこの例では、変化を促すことは、実際に個人の決断に落としていくことになる。つまり、どのような製品を使うのか、いつ使うのか、そしてどのくらいの期間使い続けるのかということである（図1参照）。

エネルギー消費に関する私たちの決断から、気候変動やその他グローバルイシューについて、そしてもう一度個々人の行動について、全体の体系を調べてみることで、生徒たちは、全体のつながりに対して彼らの決断や個人の行動が影響を及ぼせるということや、それがまた世界の他の場所で人々に影響をもたらしていることを知ることになる。生徒たちは一度それらの理解を掴んでしまうと、よりサステイナブルな方法でよりよい選択や行動を起こすために、今まで以上の知識を身につけるだろう。このように、体系がもたらすものを分析するためのレンズとしてサステイナビリティ・コンパスを使うことで、生徒や学校コミュニティ全体に異なる視点を与えることができ、それがまた、様々な体系や、場合によっては他の人々に、個人の選択がどのように影響

を及ぼしているかという理解を深めることにつながる。

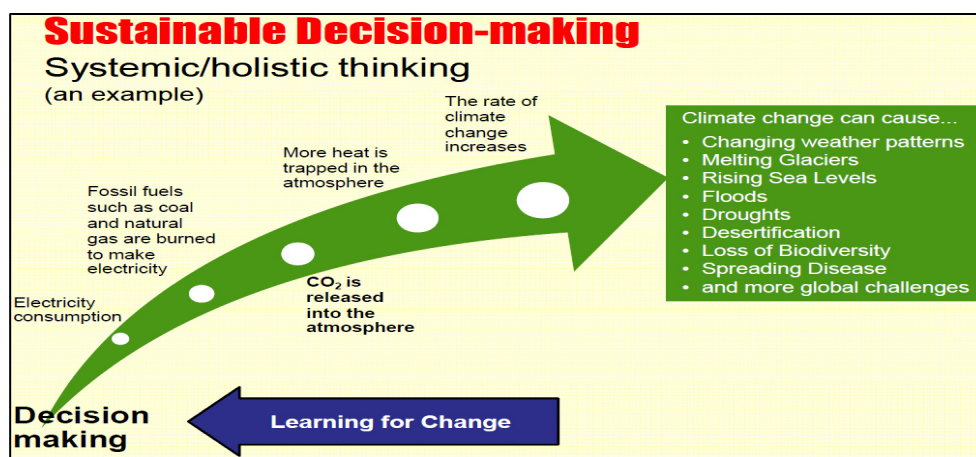


図 1. 気候システム内の意思決定に関する諸々の因果関係(例)

しかし、サステイナブルな方法で考えることを学ぶ前は、人々はあるテーマの表面にあるものだけを見てしまいがちである。この現象について、氷山がよい例えになるだろう。氷山のほんの少しの割合（約10%）のみが水面に出ているということはよく知られている。この表面に浮かんでいる部分は、気候変動のうち台風や洪水、気温上昇や干ばつなど、人々が認識出来る部分にのみ関わっている。しかし、気候変動というテーマがいかに大きいかを本当に理解するためには、この氷山の全体、特にこのテーマを浮かび上がらせている水面下の部分を検証してみなければならない。水面下には、文化や歴史に加えて、人々の思考様式、価値観、行動様式、さらに多くの関係を含む、すべての体系が存在している。

学習ツールとして、サステイナビリティ・コンパスは、学習者たちが、表面に出ていない物事を見つめ、ある体系のなかにある異なる構成要素が、相互にそして私たちの世界にどのように影響を与えているかを理解する助けとなる。水面下の物事を見、異なる体系がどのような働きをしているかを見るということは、ひとつのスキルである。そして、これは身につけることができるスキルである。人々が世界をどのように考え、捉えているかに変化をもたらすことができるスキルである。そして、人々の決断やサステイナビリティへむけた行動に影響を及ぼすことのできるスキルである。

### コンパスはどのように働くのか？

しかし、実際にサステイナビリティ・コンパスはどのように使えるのだろうか。教員や生徒たちはコンパスをどう用いるのだろうか。コンパスがどう使えるか、インドネシアの小学校3年生の教室でのシナリオを例にみてみよう。



あなたはインドネシアの小学校3年生の先生で、自然災害のあとに何ができるか、意識を高めるための授業をしています。現在、これは、国のカリキュラムのなかでは比較的小さなトピックですが、あなたの州は洪水や地震、崖くずれなどの自然災害を毎年多く経験しているため、今後より多くの時間が割り当てられるかもしれません。そのため、あなたはサステナビリティ・コンパスを使ってこのトピックを扱うことにします。

地震があなたの地域に及ぼす影響について教室でディスカッションをすることから、コンパスを使い始めることにします。あなたと生徒たちは、コンパス・ポイントのうちウェルビーイングについて、ブレインストーミングをすることから始めます。ウェルビーイングに着目して、地震が生徒の生活にもたらす影響をブレインストーミングします。小学校3年生レベルの答えとして、例えば、お腹が空く、喉が渇く、悲しい、怖い、学校に行けない、家族や友達が心配だなどが出るとします。次に、あなたは自然、経済、社会というその他3つのコンパス・ポイントについて、同じようにブレインストーミングをします。それぞれのポイントについて、教室でのディスカッションの結果は図2に示されているようなものになるでしょう。

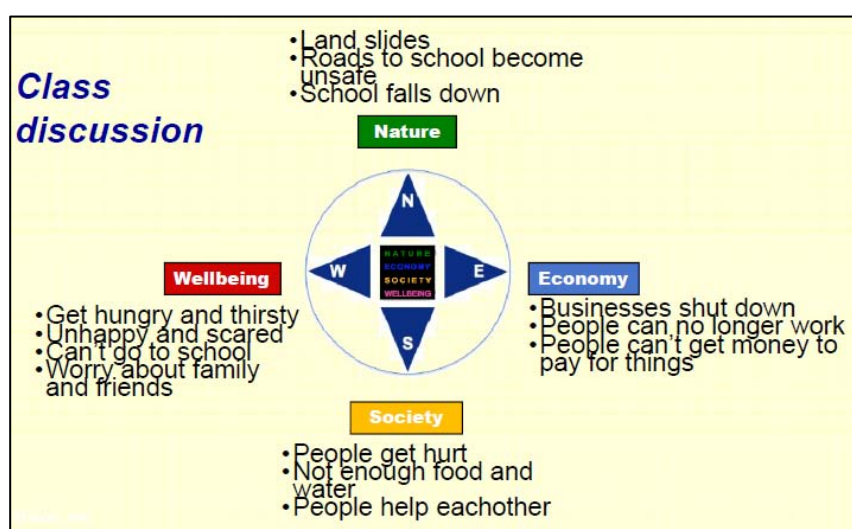


図 2. 地震が起きたときにコミュニティが受ける被害について  
「コンパス」を授業で活用した際に予想される回答(例)

このような課題はとても簡単だが、コンパスを枠組みとして用いることで、持続可能な開発に関する様々な側面のまわりにあるひとつのトピックについて、考えを膨らますことが可能になる。この例を続けてみると、以下ようになる。

あなたは、先生として、地震について授業を続けようとしています。そこで、もし生徒が住んでいる場所で地震があったら、何を改善したいか、ブレインストーミングの結果のなかから引き続き考えてみたいひとつのトピックを選ぶように、と生徒に言います。この場合、生徒たちは例えば、「お腹が空く」や「喉が渇く」を選びます。

ここで、あなたは次の授業を計画するためにコンパスを用います。お腹が空いたり喉が渇く、

というトピックを取り上げ、図3に示されているように、それぞれのコンパス・ポイントに関連して、生徒に投げかける質問について考えます。

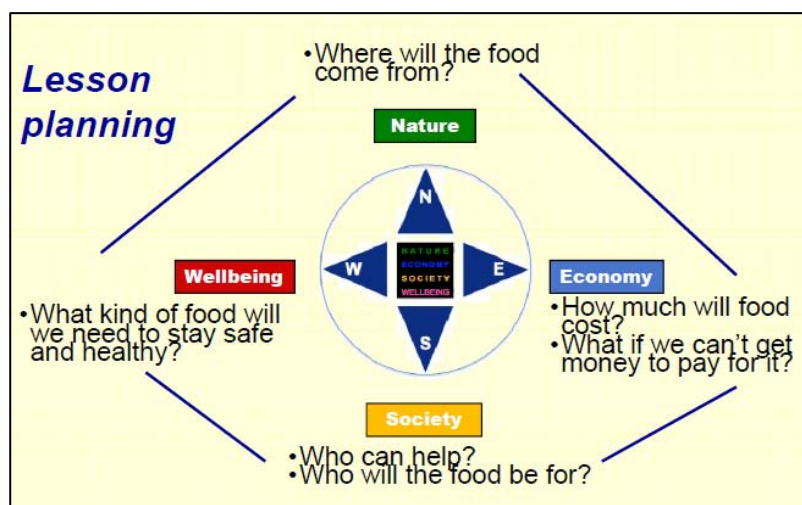


図 3. 生徒の問いを向上させるための「コンパス」を活用した  
授業計画

そこで、生徒たちはグループに分かれて答えを考えます。地域に出て行き、他の子どもたちや大人がどう思うか質問をしたり、その答えを見つけるために様々な活動をしてみたりすることもできます。いくつかの答えが見つかったら、次に、あなたは異なるコンパス・ポイントがどのようにつながっているか見てみます。これを、災害が起こったときに食糧の不足を軽減するためのさらに大きなプロジェクトの基礎とすることができます。

コンパスを使うことでこのシナリオに登場する先生は、異なる視点からサステナビリティを検討することで、災害の影響を軽減するための地域に密着したプロジェクトを考えることができます。このような課題は、作文や算数の問題、理科の実験やその他の教科の課題として、国のカリキュラムにつなげることもできる。

## 執筆者一覧

|                             |                      |
|-----------------------------|----------------------|
| はしがき                        | 寺中平治                 |
| 序                           | 永田佳之                 |
| 1. 事業実施国の概要                 | 下里祐美子                |
| 2. 事業実施地域(シェンクワン県)の概要       | 下里祐美子                |
| 3. 調査の概要                    | 斉藤美貴／曾我幸代／永田佳之       |
| 4. 調査結果の分析                  | 斉藤美貴／曾我幸代／永田佳之       |
| むすびにかえて                     | 永田佳之                 |
| 資料1 調査結果のマトリクス              | 斉藤美貴／曾我幸代            |
| 資料2 技術移転のための調査及び招聘プログラム     |                      |
| 1) タイ調査報告                   | 斉藤美貴                 |
| 2) インド調査報告                  | 曾我幸代                 |
| 資料3 コンパス・スクール               | R・スティー爾(翻訳：實槻圭美)     |
| 本報告書及び「学びのエコロジー」リーフレット作成協力者 |                      |
|                             | 吉田直子／田坂礼子／ソンバット・ソンポン |

平成 22 年度 政府開発援助ユネスコ活動費補助金  
アジア・太平洋地域等における開発途上国の教育、  
科学又は文化の普及・発展のための交流・協力事業

発展途上国における〈ESD 広域モデル〉の構築に向けた  
基礎調査及び視聴覚教材の作成・普及  
《事業報告書》

平成 23 年 3 月

代表者：

寺中平治(聖心女子大学学長)

企画提案者(総括及び本報告書監修)：

永田佳之(聖心女子大学文学部教育学科准教授)

〒150-8938 東京都渋谷区広尾 4-3-1

聖心女子大学

TEL：03-3407-5914

E-mail：yoshy@pobox.com

<http://www.u-sacred-heart.ac.jp/nagata/laos-oda/index.html>